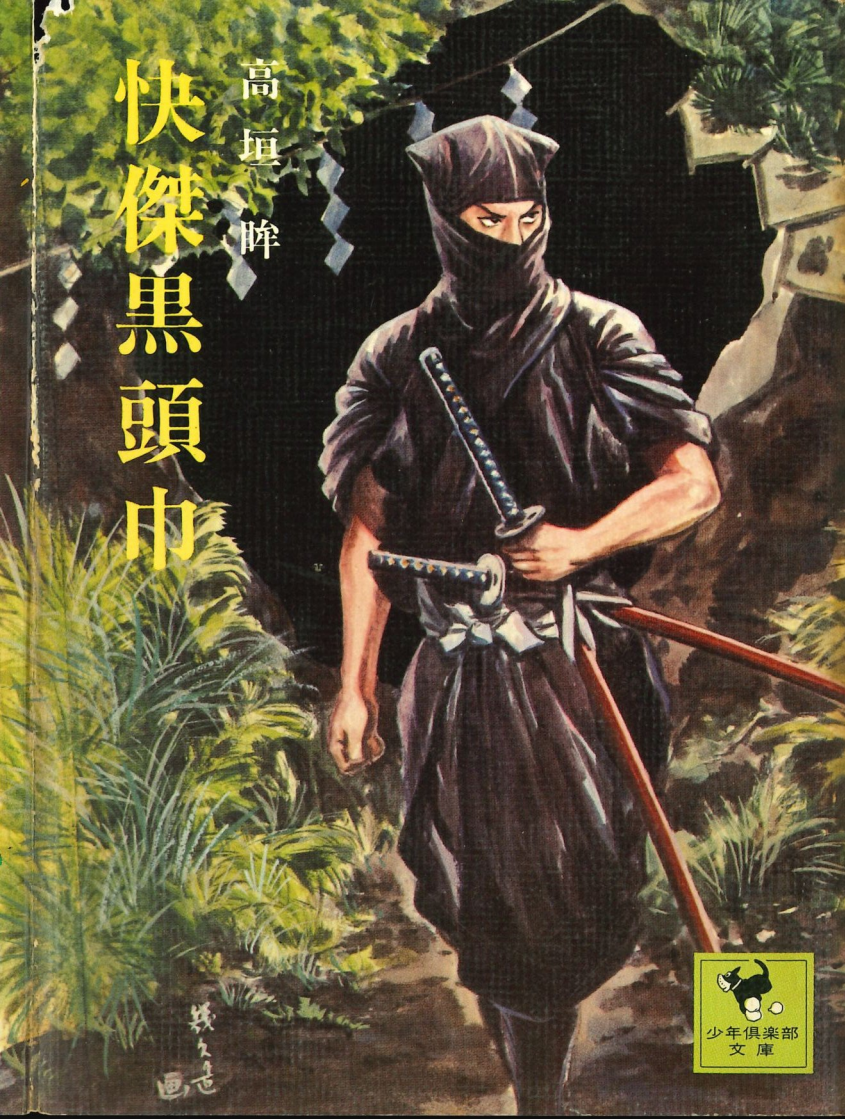
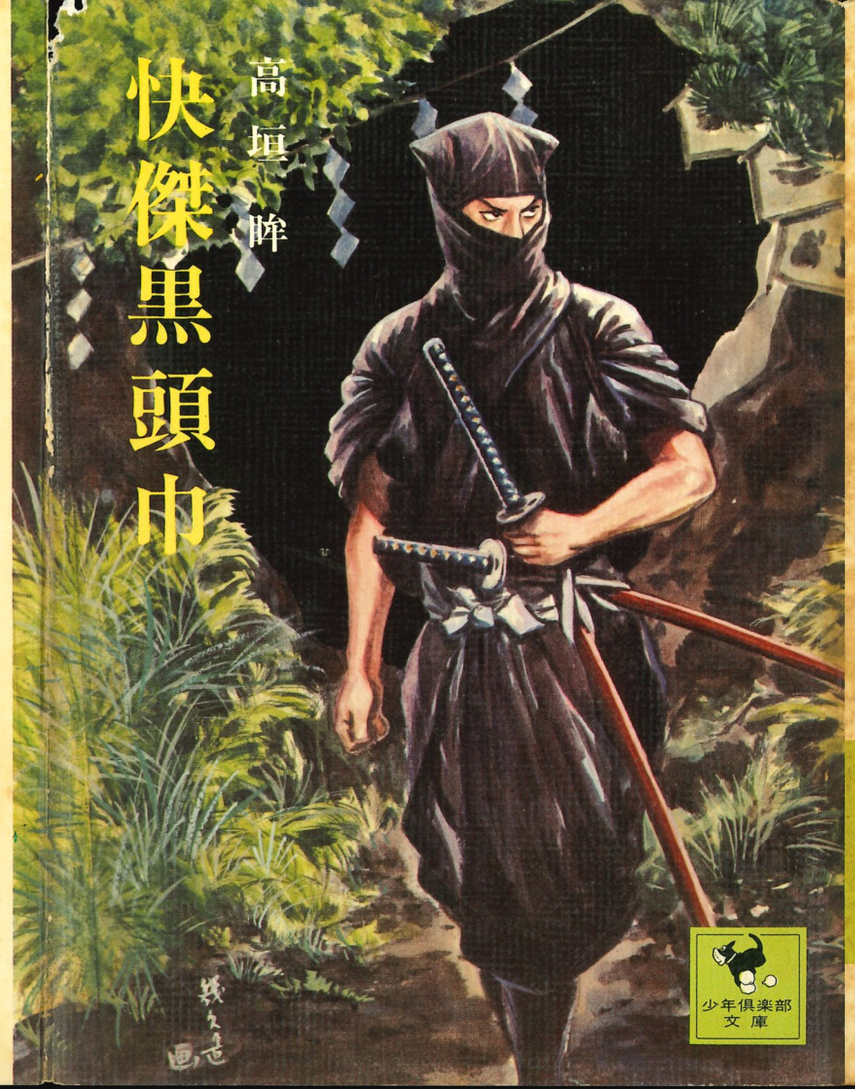
快傑黒頭巾

高垣眸



少年倶楽部文庫



快傑黒頭巾

高垣眸

幕末の兵学者山鹿士行は幕府に囚われて十三年、その安否をさぐる曲芸師の姉弟。二人を助ける覆面の武士とヘボ易者天命堂の正体は？　江戸城攻防の鍵を握る秘密地図をめぐって、浪人目付青江下野、目あかし赤鬼らのきびしい追求のうちに、波乱の渦はついに江戸城内、死の百虫館へ……。

少年倶楽部文庫
7
講談社
340

340円
0193-429078-2253（0）

表紙デザインは椛島勝一画の波による。

『少年倶楽部文庫』について

✡この文庫は、かつて雑誌『少年倶楽部』に掲載されて好評を呼んだ名作傑作の数々を選集したものです。

✡この文庫には、発表当時作者とともに情熱をこめて作品を飾られた諸画伯の挿絵もできるかぎり多く収録しました。

✡各作品のかなづかいなどは現代方式により、若い読者の方々にも読みやすくしてあります。

快傑黒頭巾

高垣眸

少年倶楽部文庫

快傑黒頭巾
高垣眸

講談社

少年倶楽部文庫
7

快傑黒頭巾

高垣　眸

講談社

＊目次＊

第一回　こよりひもの秘密　七
第二回　せまる白刃　二八
第三回　煙玉　五〇
第四回　ふしぎな囚人　七二
第五回　切支丹牢猛火　九三
第六回　天井裏騒動　一二五
第七回　珠三郎よ　いずこへ？　一三七
第八回　怪船怪人　一六〇
第九回　みどりの運命　一八三

快傑黒頭巾

第十回　一人二役　二〇四
第十一回　穴八幡　三一七
第十二回　父子再会　二四七
『快傑黒頭巾』後記　高垣　眸　二七六

装幀　安野光雅
挿絵　伊藤幾久造

第一回　こよりひもの秘密

美少年珠三郎

「東西ッ、お次はいよいよ、舶来管ばしごの曲乗りだが、なにしろこれは命がけの芸当なんで、今、も一度ざるをまわすから、みな、いせいよくバラバラと投げこんでおくれよ。いいかい、お立ち合い」

キビキビと口上をいったのは、十三、四のかわいい男の子。ところは江戸の、にぎやかな盛り場、上野の山下でした。桜は今がまっさかりで、のどかな春の夕ぐれ。

「この子ですよ、もと浅草で大人気の軽業、大月一座の珠三郎といった若太夫は」

「へえ、どうりで大道芸人らしくない、上品な子だと思った」

「感心な子でね。こうやってかせいで、わずらってるもとの親方を、養ってるそうですよ」

「それは豪儀だ。ではひとつ、大ふんぱつで祝儀を出そう。ホイ、ざるがまわってきたナ」

たいへんな人気で、ざるの底には、見る間にいっぱいの小銭。珠三郎はニコニコ笑って、
「やあ、ありがと。これだけあればたくさんだ。ではいよいよ、はしご乗りのはじまり、さようッ」
お礼と口上をゴッチャにしていって、細い金属の管を組み立てて作った四メートルあまりのはしごを、トンと地上におし立てると、手につばをつけて、スルスルと苦もなくてっぺんまでかけ登りました。ささえるものもないはしごが、まるで根がはえたよう。
「エエ、尾張名古屋は金のしゃちほこ」
空中で口上をいって、そろえた両足を棒のようにのばした珠三郎、はしごのてっぺんであざやかなしゃちほこ立ち。見物はドッと拍手喝采です。
「日光華厳の滝は千丈さか落とし、ヤッ」
かけ声もろとも、珠三郎は手を放したから、あッ、まっさかさまに落ちてくる。あぶない！頭の骨を大地に打ちつけてくだいたか？　見物たちが思わず手に汗をにぎるとたんに、
「どっこいなッ」
ピタリとはしごに手足をからんで、だきついたから、たちまち平均を失ったはしごが、大きくグラリとゆれます。
「アレ、あぶないッ」
肝をつぶしてとびのく見物たち。
「だいじょうぶだよ、お立ち合いッ」

声のもとに、はしごはまっすぐに立ちなおりました。
「ああ、おどろいた。ハッハッハッ」
しばらくはドッとわく笑い声。はしごの上では、一息入れた珠三郎が、つぎの芸当にかかろうとしたときでした。
「どけどけ、ええ、みなどけ」
あらっぽく人をつきのけて、人相のわるい大男がでてきました。筒袖の上着に、太いズボン、長い刀をさしているのは、幕府で新規につのって洋式教練をしている歩兵隊の兵士です。たちのわるい浪人や、ごろつきなどが集まっているので、幕府を笠にきて、いばりちらしてらんぼうをはたらくものだから、江戸じゅうでのきらわれ者になっています。
「あ、わるいやつがきた。あの歩兵は、この間までごろついていた、黒門権次という男だ」
「あの子も、たいへんなやつに見こまれたねえ。かわいそうに、なにをされるのかな」
見物は、珠三郎の身を心配してささやきます。はしごの下へ近づいた権次歩兵は、
「おい、そこの子どもッ」
と、上を見あげてどなりました。

銀針の早業

「やあ、歩兵さん、なんだい？」

上からはむじゃきな返事。
「なんだいではないぞ。おまえはいったい、だれにことわって、ここで人寄せをしてかせいでいるのだ？」
ソラ、いいがかりをつけにきたんだ。だが、珠三郎は平気でニコニコ笑っています。
「ウン、それはちゃんとおことわり申してあるよ」
「なに、ことわった？　だれにことわった？　いってみろ」
すこしあてがはずれたふうで、権次歩兵がたずねると、珠三郎の返事が、とんでもない……。
「不忍の弁天様にさ。そしたら『ああいいとも、たくさんおかせぎ』とおっしゃったんだい」
それを聞いた珠三郎びいきの見物たちは、ヒヤッとしました。あんのじょう、権次歩兵はゆでだこのようにまっかになって、
「な、なんだとッ。人をばかにするなッ。おのれ、子どもだといって、ようしゃはならんぞッ」
すると、見物の中から、また三人の歩兵がとびだしてきて、はしごをグルリととりまきながら、
「同役、なまいきな子どもではないかッ」
「ひきずりおろして、いためつけてやれ」
と、口々にわめきます。さあ、とんでもないことになっちまった。だが権次は、はじめから子どもも相手にけんかするつもりはなくて、ほかにねらった目あてのものがあったのです。
「なまいきなやつだ。が、きょうはまあ、かんべんしてやる。しかし、市中取締役のわれわれに

むだんでかせいだ銭は、みんなとりあげねばあいならんのだ」
そういって、銭のはいったざるの方へ手をのばすのを見ると、はしごの上の珠三郎は、おどろいてはしごをとびおりました。
「あッ、それは薬代のたいせつなお銭だい。おまえなんかに持ってゆかれてたまるものかッ」
はしごを投げ出して、かけよったときには、ざるは権次の太い腕の中にかかえられていました。
「返せよ。歩兵ッ、返せったら……」
おそれげもなく、権次歩兵にむかってゆく珠三郎のようすに、ひいきたちはまたハラハラします。心では、どんなに珠三郎に同情しても、相手がわるい。だれもとびだしていって、口をきいてやる者もありません。しかし、珠三郎は勇気のある少年でした。それに、親方のために、真剣にかせいだたいせつな薬代。
「返せってのに、返さないかッ、よしッ」
「アッ、ちッてッ、いててッ」
ふいに、権次歩兵がざるを放しました。蜂にさされたような手つきでひっこめた手の甲に、一本の細い銀針が深くつきささって、キラキラと光っていたのです。珠三郎はうまくとりもどしたざるをかかえ、管ばしごをひろいあげて、すばやく逃げ出そうとするうしろから、
「うぬ、逃がすものかッ」
今度は本気でおこった権次歩兵がつかみかかった。珠三郎がスッと身を沈めてのがれると、権次がつかまされたのは身代わりの管ばしごばかり。
「同役、その子どもをつかまえてくれッ」
「よしきたッ」
三人の歩兵ども、大手をひろげて、はしっこい珠三郎を四方からかこんだ。らんぼうな歩兵ども。見ている者の肝をひやさせる、おそろしいおにごっこがはじまりました。

深編み笠の武士

「ソラ、一人うしろへまわったぞッ」
「ああ、追いつめられた。わたしはもう見てはいられない。あれ、あぶない！　あッ」
ハラハラして気をもむ群集の中に、四十五、六のがんじょうなからだの男が一人、ジッと腕組みして、このさわぎを見物していました。この男は、幕府の御用をつとめる、赤鬼の弥太五郎という目あかし。おそろしい腕ききで、今までに何十人の勤王のりっぱな志士たちが、この男のためにとらえられたかしれないのでした。心まで鬼に似たか、歩兵のらんぼうをとめようともせず、かえっておもしろそうに見物しています。
「ワッ、だめだッ、とうとうつかまったッ」
「ああ、かわいそうに、どんなめにあわされるだろう」
見物たちはガッカリしました。追いつめられて逃げ場をうしなった珠三郎を、権次歩兵がグッ

とつかんで、あらっぽくこづきます。
「いまいましい小僧だ。どうしてくれよう」
「同役、屯へひきずっていって、ゆっくりなぐさみものにしようではないか」
「うむ、よかろう」
権次は、ひっしでもがく珠三郎を、ひきずってゆこうとしました。と、
「歩兵ども、待て」
りんとした声が聞こえて、見物の中から、深編み笠をかぶった、背の高い武士が進み出ました。それを見て、赤鬼の弥太五郎の蛇のようなするどい目が、思わずギロリと光りました。
「ああ、よかった。強そうなお武家だ。うまくあの子を助けてくれればいいが」
見物たちはホッとして見ていますと、深編み笠の武士は、ツカツカと権次のそばへ近づいて、いきなりその横っ頬を、力まかせの平手打ちです。ピシリッ、と、胸のすくような、はげしい音が、あたりに高くひびきました。
「わッ」
権次歩兵はとびあがって、珠三郎を投げ出すと、頬をおさえてよろめきましたが、ふみとどまったときには、目がおそろしく血ばしっていました。
「な、なにをするッ、うぬッ」
気ちがいのようにわめくと、いきなり大刀を引きぬいて、深編み笠をまっ二つにきりさくばかりの勢いでした。

「ばかッ」
ひらめく白刃を苦もなくかわして、のびた相手のこぶしをグッとつかむと、まるで蔓からへちまをもぎとるように、刀をうばいとった深編み笠の武士。
「うぬ、三びんッ」
血まよった権次歩兵が、武者ぶりついてくるのを、足をあげてサッと一けり。
「ウワワワッ」とたおれる権次歩兵。武士は静かに珠三郎をうしろにかばってつっ立ちました。
「こやつ、ぶれいなッ」
「同役のかたきだッ、それッ」
三人の歩兵ども、深編み笠の武士の早業に、あっけにとられていたが、このときやっとわれにかえって、ギラギラとぬきつれました。さすがにけんかなれている連中、パッと三方に立ちわかれて、ジリジリとせまってきます。が、深編み笠の武士は、おちつきはらったものでした。権次歩兵からうばった白刃を、むぞうさにさげたまま、うしろをふりかえって、
「おい、少年、きみはこのうじ虫どもにかまわず、早く道具を集めて帰るがよい」
しんせつなあたたかい、ものいいでした。
「ありがとう」
見も知らぬこの恩人に、心からうれしく礼をいうと、ざると管ばしごをとりあげた珠三郎は、すばやく、見物の中へまぎれこんでしまいました。
「や、子どもを逃がしおったなッ」

「もうようしゃはあいならん。同役、それッ」
三人同時に、三方から切りこむ白刃。
「エイッ」
「ううむッ」
「ぎゃッ」
またたき一つするまの勝負でした。バタバタと、丸太をころがすように、つづいてたおれたのは、三人の歩兵たち。深編み笠の武士は、ほとんどもとのところを動いたとも見えず、ひややかに敵を見おろして立っていました。権次歩兵をくわえて四人の者がたおれているのに、血が一てきも流されていないのは、深編み笠の武士が、わざと刀の峰で打ちたおしたからでした。
「歩兵ども、これにこりて、以後おこないをつつしめよ」
かれははき出すようにいって、権次の刀をガラリと投げすてると、あとをも見返らないで、夕やみせまる不忍の池の方へあゆみ去りました。

上野の夜あらし

「強いお武家だったなア」
「歩兵隊のやつら、いいきみだったぜ」
「こら、歩兵ども、これにこりて以後つつしめよ」

深編み笠の武士の口まねを、えらそうにした者がいて、みなはドッと笑いました。が、ただ一人、にが虫をかみつぶしたような顔をして、深編み笠のゆくえを、ジッと見送る赤鬼の弥太五郎は、口のうちでつぶやきました。
「今の手なみ、ただのねずみではないぞ。まるで、おたずね者の黒頭巾みたいなやつだ……。ア……」
ふいに、赤鬼ははじかれたように、
「そうだ。もしかすると、きゃつが黒頭巾では」
かれは腰の十手をにぎりしめると、夕やみの中をゆく、深編み笠の武士のあとを追いかけました。
黒頭巾とは何者でしょう？　名も顔も、年ごろさえも、だれ一人知る者はないのに、黒頭巾といえば、三つ子でも知っていました。悪役人、悪代官、悪旗本、またはごろつきどもが、役めを笠にきたり、力ずくで、正しい弱い者を苦しめるところへは、きっとどこからか黒頭巾の武士があらわれてきて、こきみよく悪者をとりひしぎ、正しい者を助けるというので、世間ではもう、たいへんな人気です。黒頭巾の錦絵や草紙が売り出されると、その日のうちに売りきれてしまうありさまです。
しかし、幕府では、この黒頭巾を深くにくんで、きびしい詮議をつづけ、一時も早くめしとろうとするのだが、風のようにあらわれては消える黒頭巾の、正体さえまだつきとめることができません。赤鬼が今、深編み笠の武士の手なみを見て、すぐ思い浮かべたのは、この黒頭巾のこ

と。

「追いついて、笠の内を一目見てやろう」

赤鬼の足は思わず早くなる。が、深編み笠の武士は、こんなおそろしい者につけられてることは夢にも知らぬようすで、気持ちよい春風の中を、こずえの花を眺めながら、ゆうゆうたるものです。

「あれがもし黒頭巾だと、おれ一人ではすこし手ごわい捕り物だが、なに、鬼神なら知らず、人間だったら、きっとなわをかけて見せらあ」

赤鬼の自信もたいしたものです。まったく今まで一ど赤鬼に見こまれた者で、つかまらずに逃げおおせたという者はないのでした。

「オヤ、お霊屋の方へあがってゆくぞ」

どこまでもつけるつもりで、足早に登る石段の中途に、なんだか白いものが落ちていました。ヒョイとそれに気をとられて、足もとに落とした目を、すぐまた前へむけたとき、さすがの赤鬼も、サッと顔色がかわりました。

「ヤッ、しまったッ、どっちへ消えたろう?」

二十メートルばかり前を、ゆうゆうと歩いていた深編み笠の武士の姿が、ホンのちょいと目をそらした間に、煙のように消えていたのです。めずらしく度を失った赤鬼は、石段を一息にかけ登ると、キョロキョロあたりを見まわしました。

「クククククク」と、だれだかすぐ耳のうしろで、笑ったような気はいに、思わずふりむいた赤鬼

は、息がつまるほどおどろきました。目と鼻ほどの間近いところに、ヌッと立っていたのは、今、見失ったと思ってあわてた、深編み笠の武士でした。石段の中途へ落とし紙を見せ、相手の心を一時他へまぎらせて、そのすきにそばの石どうろうのかげにかくれ、ウロウロするうしろから、パアッとでてくるなんて、相当に人がわるい。

「赤鬼、お前などにも夜桜をながめて楽しむ風流気があるか? ハハア、なにか落とし物か? なにをキョトキョトしているのだ。ハッハッハ」

大胆不敵な深編み笠の武士は、相手が江戸一番のおそろしい目あかし赤鬼だと知りながら、姿をあらわしたのです。赤鬼はだまって十手のさきで、深編み笠をはねのけようとしました。

「ハッハッ、この深編み笠の内が見たいのか」

また高らかに笑って、じぶんからパッと深編み笠をぬぎすてると、あらわれたのは、おお、目ばかり光った黒頭巾。赤鬼は、からだじゅうの血がさかさに流れだしたような気持ちがしました。だが、さすがに、死にものぐるいの勇気をとりもどすと、

「黒頭巾、御用だッ」

サッと銀みがきの十手がおどる。おぼろな春の夜桜の花の下で、二つの影ははげしくもつれあう。が、それもまた、まばたき一つする間だった。すぐに、一方が大地にねじふせられてしまったようす。

「ムッ、な、なんのッ……」

金剛力ではね返そうともがく敵を、組みしいて動かせぬほうは、あたりはばからぬ高笑い。

「ハッハッ、赤鬼どうした。弱い鬼だな。よくそれで人がしばれるな。ウム、しばるといえば、お前の持ってる捕り縄が入用だ。ちょっと貸せ」

もがく赤鬼をひざがしらでギュッとおさえ、内ぶところからとり出した捕り縄を、パラリととくと、皮肉にもその縄でもって、赤鬼のからだをしばりあげ、あまったはしを、石どうろうの根方に固くゆわえました。目あかしが、じぶんの捕り縄でしばられる。これほどの恥がありましょうか？　赤鬼は、無念のくちびるをかんでうなだれました。

黒頭巾は、目もとにこきみよいえみを浮かべて、そこに落ちてる深編み笠をひろいあげると、いきなり、赤鬼の頭から、スッポリとそれをかぶせておいて、

「よくにあうぞ、赤鬼。これでは、だれが見ても、赤鬼が深編み笠の男をめしとったと思うだろう。ハッハッ、朝までゆっくりそうやっていろ」

笑いながらたちさる黒頭巾の後ろ姿を、血走る目でにらみつけた赤鬼が、うらみと怒りにかれたおそろしい声で呼びかけました。

「黒頭巾、このしかえしは、きっとせずにはおかないから、おぼえていろよ」

東吉老人の物語

「珠兄さん、今お帰りかね？」

浅草鳥越のお天文台近くの原っぱで、呼びとめられて立ちどまったのは珠三郎でした。バラバラにして皮ひもでたばねた管ばしごの金具と、薬の紙袋とをたいせつそうに持っていました。

「天命堂のおじさんですか」

「ハイ、さよう。さあ、いっしょに帰ろう」

これはおなじ長屋に住む、大道易者の天命堂。よれよれの紋つき羽織に袴をはき、あごに天神ひげ、人のよさそうな男で、「神易、天命堂」と書いたちょうちんをぶらさげていました。

「親方の薬を買ってきなすったね。いつもながら感心だよ。だが、さっきはまったく、どうなることかと胸がドキドキしてな。なに、わしだって、手がきけば加勢にとび出して、歩兵どもを手玉にとってやりたいと、どんなに思ったかしれないがね。あんなときは、とかく手や足がふるえだして、すくんじまうからしまつがわるい」

「なんだ、おじさん、あれを見ていたの？　あの権次ってのは性悪でね。先に小屋へあばれこんだことがあったんで。……だけど、さっきのことは、親方や姉さんには、ないしょにしといてくださいよ。しかられるから」

「ああ、いいとも。なにもしゃべりはしないよ」

話しながらもどってきた、軒のかたむいた古長屋。

「わしもあとで見舞いにあがるつもりだが……」

「ああ、ではおじさん、さようなら」

戸口で天命堂と別れて、じぶんのすまいの表戸を、ソッとあけてはいっていった珠三郎は、

「姉さん、ただいま。親方さんは？」

「あ、珠ちゃん、いいところへ。……親方さんは、さっきから、急になんだかごようすが……」
いそいで出迎えて、ささやくようにそういったのは、姉の三葉、けだかくて美しい少女でした。
「えッ、わるいの？」
珠三郎はサッと顔をくもらせました。うすいふとんにくるまって、枯れ木のように横になっている親方の大月東吉老人は、このとき力ない声で、
「若、若が帰りましたか？　では、すぐここへ。わしの息のあるうちに、二人にぜひとも、話しておかねばならぬことが……」
みずから寿命のつきるときの近づいたのをさとったのか、東吉はなにかたいせつな遺言でもあるらしく、すこしの間もおしむようすなので、姉弟二人は、いそいで枕もとにすわりました。
「第一に、お二人の素性……。お父上は、山鹿士行様……、世になりひびいた大学者で、勤王のお志あつく、弟子は日本国じゅうから、二千人にあまって……。それが、勤王の同志とともに、幕府の手にとらえられなすったのは、今から十三年のむかし、三葉様が三つ、若が二つのときでした。同志のかたは、そのとき、みなきられておしまいなすったが、幕府でも、お父上ばかりは、きることのできぬ深いわけがあり、どこかの牢屋へ人知れずとらわれのまま、今もたしかに、生きてござるということです」
三葉と珠三郎は、はじめて聞くわが身のうえの秘密、それにもまして、生みの父の、奇怪ふしぎな運命、まだ生きて、どこかの牢屋にとらわれていられると聞けば、なつかしさ、あいたさに、胸がせまるような気がするのです。

こよりひもの大秘密

「お父上の高弟であったわしが、学問をすて両刀すてて、軽業師になったのは、一つには、おさないあなたがた二人のうえにせまってくる、幕府の捕り手、……わけても、お父上を召しとった、赤鬼という目あかしの、きびしい詮議の目をくらますため。また一つには、諸国をめぐり歩くうちに、その土地のうわさをさぐって、父上のおゆくえ、かくし牢のありかをさぐり出したいため。それにまた、捕り手に追われてついはぐれた、あなたがたのお兄上、弦一郎様にめぐりあうこともあるかと思ったため。……だが、わたしは今、死病の癌をわずらって、桜の花の散るまでももたぬ命。今のうちに、お父上からあずかった、たいせつなものを、若にわたして……」
東吉老人は、苦しい息の下からそういって、銀の針をたばねたような、わが頭のもとどりをむすんだ、長いこよりひもを、骨ばかりの指さきで、ていねいにときほどきました。
「このこよりに、よってある紙こそ、幕府の鬼どもが、お父上の命を取ることをえせぬ、大秘密……。この紙のありかを、今もなお、かれらはひっしでさがして……。若……、三葉様、これをたいせつに守って、お父上を牢から……、そして、弦一郎様にめぐりあって……」
癌の病い、のどが焼けるようにかわくので、東吉は思うようにことばが出せず、しきりにあせるようすでした。三葉がやさしく、水をのませてやると、一息ついた東吉、

「山鹿家ご先祖の、大軍学者、山鹿素行様のお筆……大日本、攻城、図説、と申す書物の、これは、江戸城攻めの巻、その中での急所といわれる、七つの抜け穴の図解、これがあれば、勤王倒幕のたたかいに、官軍がたが江戸城を攻めおとすこと、石で卵をわるよりもたやすく……」

つづけてなお、この大秘密について、説明しようとする東吉。姉弟は一ことも聞きもらすまいと、耳をすましていましたとき、ふいに、壁ひとえとなりの、天神ひげのヘボ易者、天命堂のすまいの戸口で、ドタバタというすごいもの音が起こったのです。

「どろ、どろ、どろぼうだあッ。長屋の衆、助けてくださいッ。どろぼうをつかまえたあッ。おであいくださいッ、助けてくださいッ。手をかしてッ」

とんきょうな声で呼びたてるのは、おくびょうな天命堂でした。それにまじって、あたりをはばかるように、

「はなせッ、ばか力のあるやつだ。はなせってば」

「どろぼうをおさえたッ、すけだちたのむッ。長屋の衆ッ、熊どのッ、八助どのッ、権さんいないかッ」

すると、長屋じゅうが大さわぎになりました。

「なに、どろぼうだッ。どこだ、どこだッ」

「どなってるのは天命堂だぞ。あの貧乏人をねらうなんて、まぬけなどろぼうだ。おもしろい。ひっしばって辻番へつき出してやれ」

ドヤドヤと集まってくるおおぜいの足音。

「ヤイヤイ、なにをするッ。赤鬼の弥太五郎親分の一の子分、三太兄いだぞ。見そこなうなッ。詮議の筋があって、この長屋へ出ばったのだ。御用のじゃまをしやがると、長屋じゅう縄つきにして引っ立てるから、そう思えッ」

おおぜいにとりまかれて名のりをあげたのが、目あかし赤鬼の子分と聞いて、いきおいこんだ天命堂や長屋の連中、びっくりしてしりごみました。

外のさわぎのさいちゅうに「赤鬼」という名を聞くと、東吉老人はハッとしたようすで、例のこよりひもを急いでしきぶとんの下へつっこみました。

とたんに、表戸をガラリとあけて、目つきのするどい、見なれぬ男が顔を出しました。

「大月東吉ってのは、この家かい？」

第二回　せまる白刃

しきぶとんの下

戸口に立って、ジロジロと家じゅうを見まわす、手先の三太のうしろから、天神ひげをはやした易者の天命堂が、心配そうな顔をソッとつき出しました。三太はふりかえってそれを見とがめると、

「ばかッ、のぞき見なんかしてると、てめえからさきにふんじばるぞッ」

と、どなりました。天命堂はびっくりして、あわてて首をひっこめました。三太は表戸をピシャリとしめると、立ちはだかったまま、

「もと軽業の太夫元、大月東吉ってのは、おめえだね？　生まれはどこで、年はいくつだ？」

東吉は目をとじて答えません。死病に苦しむいたいたしいその姿を見ても、三太は心を動かしたさまもなくて、

「こら、起きてちゃんと返事をしろ。御用でしらべるのだ。たぬき寝入りなどするなッ」

その失礼なあらっぽいことばを聞くと、きかぬ気の珠三郎は、カッとしました。

「なんだい？　おまえはだれだい？　だしぬけに人の家へやってきて、なにするんだいッ」

キッと三太をきめつけます。にぎりしめた手の中には、権次歩兵をへこませた銀針が、どうやらまた、かくされているらしい。

「珠ちゃん、お待ちなさい。……モシ、親方さんはご病気なんですから、静かにしてあげてくださいな。なにかご用でしたら、わたしがうけたまわりますわ」

三葉は珠三郎をなだめながら、そういいますと、

「フン、おめえたちは、姉弟なのか？」

「いいえ、ちがいますわ」

「でも、この子がさっき、おめえを姉さんといってたじゃないか？」

あ、三太め、立ちぎきしていたナ。

「それは、わたしが姉弟子だから、そういうんです」

三葉は、うまくいいのがれました。

「そうか。そんなことは、どっちだっていい。だが、さっき、おやじがしきぶとんの下へかくしたものは、あれはなんだ？　出して見せろ」

いけない。三太にたいへんなところを見られていた。もともと、三太が赤鬼親分からいいつかったのは、この家のようすをソッとさぐるだけのことだった。軒下にしのんでのぞき見していた

ところを、天命堂にどろぼうとまちがえられ、長屋じゅうの者からふくろだたきにされかかったので、苦しまぎれに十手を見せて、みなを追っぱらったのはいいけれど、ときのはずみで、東吉の家へ「御用」と、まともにとびこまねばならなかったのです。だから、なにを目あてにとりしらべていいか、心の内ではすこしもてあましていたところなので、さっきチラとぬすみ見たことを、いいかげんに持ち出してみると、珠三郎や三葉の顔色がサッと変わったので、「しめた」と思ったのです。

「ねえ、珠ちゃん、なにもかくしなんか……」

「そうとも、かくした物なんかありはしないよ」

ムキになってうち消そうとする二人のようすは、かえって、三太のうたがいをましました。

「フン、なにもかくした物がないなら、おれがそのふとんの下をさがしてみても平気だろうな」

いじわるくそういって、三太は今にも東吉老人の枕の下へ、手をつっこもうとしました。

最後の手品

「なにをするッ、いけないッ」

珠三郎はいっしょうけんめいでした。そのはずだ。ふとんの下には「七つの抜け穴の図解」四丁（八ページ）の、たいせつなこよりひもが、かくされているのです。

「親方さんのご病気にさわります。そんなことは、なさらないでください」

三葉もむちゅうでした。片手はふところの守り刀の柄を、しっかりにぎりしめています。

「おめえたちがそうムキになるのが、あやしいんだ。どけ、どうしてもしらべる。じゃまするとと、しばるぞ」

三太は、十手と捕り縄をとりだした。もうだめだ。そのとき、東吉老人が苦しい息の下から、

「これ、二人とも、おしらべのじゃまするな。……さ、お手先、ごぞんぶんに、おしらべなさい……」

「アッ、でも親方さん、それは……」

「な、な、なんにもいうなッ。……さ、どうぞ、おしらべなすって……」

東吉老人に目顔でたしなめられて、二人はしかたなくひかえました。が、まんいち、三太がこよりひもを見つけたら、この場去らずただ一つきと、三葉の短刀も、珠三郎の銀針も、二人の手の中で汗ばんでいるのでした。

「フム、親方はさすがに神妙だ。よし」

どんなたいした物がでてくるか？　三太は心をときめかしながら、ぶえんりょにしきぶとんの下をさぐって、やがてニタリと笑うと、なにやら長細いものを、ズルズルとひきずり出しました。

「スハ！」

二人が思わずキッとなったとたんに、三太は、顔色をかえて、その長細いものを、畳の上に投げ出してしまったのです。

「あッ、長虫だッ、ええ、気味のわるい……」
三太がさぐり出したのは、こよりひもとは似もつかぬ、長さ七十センチばかりのからす蛇だったのです。蛇ぎらいの三太が、ゾッと身ぶるいしたときに、表でいそがしくよびたてる声が聞こえました。
「三太兄い、今、親分が上野の山へ黒頭巾を追いこんで、大捕り物のさいちゅうだッ。早く、東照宮の鳥居前まできてくれろッ。たのむよッ」
「な、なんだとッ、だれだ、芳公か？　おい」
だが、外の声はそれきり聞こえませんでした。三太はあわてて、土間へとびおりると、すぐ外へ出てみたが、暗い路地には、人影も見えません。
「あッ、芳公め、もう行っちまったのか？　よし、ではおれも、すぐかせいにゆくぞッ……」
三太があわをくって長屋の路地口からかけ去ってしまうと同時に、長屋じゅうの者がニョキニョキと首をつき出して見送ります。
「アッハッハッ、こいつはおかしい。アッハッハ、まるでいだてんのばけものみたいに、かけ出していっちまったわい。アッハッハッ」
腹をかかえて笑ったのは、天命堂でした。長屋の熊さんは、あきれた顔をして、
「おい、天命堂さん、おめえかい、あんなでたらめをいって、手先をだまくらかしたのは？　あとで知れたら、ひどいめにあうぜ。とんだいたずらをしたねえ」
「アッハッハッ、熊どの、だいじょうぶですよ。アッハッハ、わしはもう、おかしくて、涙が、

アッハッハッ」
天命堂も、とんだいたずら者でした。赤鬼が黒頭巾をおいこんで、捕り物のさいちゅうだなどと、まっかなうそにきまっているが、三太はすっかり本気にして、上野の山まで息を切らしてかけていったことでしょう。
「あ、行っちまったわね」
「こよりひもがあぶないところだったけど、よかったねえ」
珠三郎と三葉とは、ホッとして顔を見あわせました。だが、ふしぎです。どうしてこよりひもが、からす蛇にばけたのでしょう？
「わ、若、こより、ひもは、ここに、ある」
東吉老人の骨ばった手が、ふとんの中から出ました。珠三郎はその手から、こよりひもを受けとると、たいせつにふところへしまいます。舞台で手品の種に使う、印伝皮で作った本物そっくりのからす蛇と、こよりひもとが、す早くふとんの下ですりかえられたので、三太は手もなくその手品にだまされたのでした。だが、このきわどい手さばきが、老人のこの世で最後の手品となりました。はりつめた気のゆるみか、急に出る息ばかりになった老人のようすに、珠三郎と三葉とは、たまりかねて、ワッと声をたてながら、右と左とからとりすがりました。
「親方さんッ、親方さんッ……」
その悲しい泣き声が聞こえたものか、しんせつ者の天命堂が、またあたふたと隣からやってきました。そして、東吉老人の枕もとへにじりよると、耳に口をつけるようにして、

「親方、わしだよ。天命堂だ。わかるかねッ」

老人はパッと目を開いて、ふしぎそうに天命堂の顔を見つめましたが、ふいに、その目の中に、生き生きした光がひらめきました。おどろきか。喜びか。ひどく心をうたれたようすで、なにかつぶやこうとしますが、のども舌もかわききって、もれるのは、ことばにも声にもならぬかすかな音ばかり。

「わかったよ。あなたのいいたいことは、よくわかった。二人の身は、この天命堂がひき受けたから、安心して往生なさい」

天命堂が力強くうなずいて見せると、それが通じたものか、うれしげにまたたき一つした東吉老人は、そのまま、苦しみ多かった一生をおえました。姉弟も天命堂も、いたましいその屍骸をかこんで、心から熱い涙をたむけます。

ためし切り

石どうろうの根方に固くしばりつけられ、頭から深編み笠をかぶせられた赤鬼の弥太五郎は、からだじゅうの血が、はげしい怒りと、うらみと、恥とに、にえかえるようでした。

人をしばるのが稼業の目あかしだから、ひととおりは縄ぬけの法も知っているかれは、いっしょうけんめいに縄をとこうとしましたが、黒頭巾のひにくなしばり方は、もがくほど縄目がしまるばかりなので、しまいにはあきらめてしまいました。夜がふけて、谷中の森では、夜たかかふくろうか、ものすごくなく声が聞こえます。

「夜が明けて、おおぜいの人にこのざまを見られたら、たちまちおれは、江戸じゅうのもの笑いだ。うぬ、黒頭巾め、今にうらみはきっとはらすぞ」

赤鬼は、血をはくようにつぶやきました。そのとき、竹の台の方角から、あたりはばからぬ高話の声が近づいてきました。その一人の声音を聞くと、赤鬼は深編み笠の中でそのすごい顔を、少女のようにまっかに染めてしまいました。

「あ、いけない。青江の殿様だ。どうか気がつかずに通りすぎてくれるといいが……」

けれども、話し声の主の二人の武士は、まもなく、赤鬼のすぐ目の前で足を止めました。

「清川、あれを見たまえ。石どうろうの根方に、しばられているやつがある」

そういったのは、三十七、八の、やせて背の高い、心持ち青白い顔の、りっぱな武士でした。八千石取りの大旗本で、青江下野といえば、幕府の老中なども一目おくほどのえらぶつで、日本じゅうの浪人の総取締役、ほのおのようにすごい人物です。つれは、出羽庄内の浪士で、天下に名のひびいた清川八郎という男。

「深編み笠をかぶっていますな。どれ、ひとつ、つらをあらためて見てやりましょうか？」

「よしたまえ。どうせくだらないやっこだろう。ああそうだ、先日手に入れた水心子の新刀、まだ切れ味がためしてない。なまじ笠の内を見てふびんをもよおさぬうちに、そやつの生き胴をためしてみよう。刀屋めは、二つ胴うけあいと申したが……」

青江下野は、白い柄糸のかかった大刀へ手をかけて、ズッと前へ進み出ました。赤鬼は、から

だじゅうをゾッと冷たいものが走った気持ち。だが、ジッと歯を食いしばってこらえます。もともと赤鬼は青江下野の命を受けて、黒頭巾をめしとろうと心をくだいているので、いわば主と家来に似た間がら。声をたてれば、すぐに縄もといてもらえるにきまっていましたが、それだけに、深く心に恥じて、いっそだまっていて、何者とも知られずにこの人に切られたほうが、まだしもだと、覚悟をきめているのでした。

青江下野は、間合いをはかって、静かに居合いのかまえをしました。すさまじい殺気に、風もないこずえの花が、ハラハラと散りました。

「御前のさえ業を拝見できますのが、水心子の切れ味を見るより、楽しみでござるよ」

清川八郎は、他人が切られるのだから、平気なもので、そんなおせじをいっている。

「これ、編み笠の男、遺言はないか？」

深編み笠が、二、三ど静かに横にゆれました。

「ない？　よい覚悟じゃ。……エイッ」

やみの中を流れる白い光。赤鬼のからだがガクリと前へのめりました。が、すぐにムクムクと起きあがって、パッと深編み笠を投げすてると、大地にピタリとひたいをつけたまま、はげしく肩をふるわせているのは、どうやら、恥と無念さとに、男泣きに泣いてるようす。

むろん、青江下野の手練の抜き討ちは、赤鬼のからだをしばった捕り縄を、パラリと切りといたばかりで、肌には毛すじの傷もつけてはいません。

「不覚者めッ、なんというざまだ。切ってすつべきやつだが、恥を知ったいさぎよい覚悟にめんじて、今夜はゆるす。ゆけ」

青江下野は、はきだすようにいいました。

へんな風むき

顔もあげずに、恥じ入っている赤鬼を見ると、青江下野も、さすがにこれいじょう、せめる気にもならないものか、

「弥太、黒頭巾はおまえらの手に合わぬのう」

「殿、一生の不覚でした。が、このつぎこそは」

「フン、それよりも、今一方の、さがし物のほうは、まだ手がかりがつかぬか？　このほうは、黒頭巾よりは手ごろだと思うが……」

赤鬼は、やっとわずかに顔をあげて、

「殿様、そのほうならば、かなりたしかな目星がつきました」

「なに、目星がついた？」

「ハイ、山鹿塾の師範代の、大槻と申す者が、十三年前に、おさない者二人をつれて、身をかくしたということを聞きこみましたので、だんだん糸をたぐってしらべましたところ、その者らはこの江戸に……」

「よし、のちほど邸へこい。くわしい話は、邸でゆっくり聞こう。……清川、さあゆこう。夜桜

もいいが、夜ふけはまだはだ寒いようだな」
青江下野は、なぜか赤鬼にみなまでしゃべらさないで、清川八郎をさそって、不忍の池の方へおりてゆきました。それと入れちがいに、バタバタとかけてきた者があります。
「親分ッ、黒頭巾はどうしましたッ、もうめしとってしまいなすったかねッ？」
「三太、そうぞうしい。静かにしろい」
赤鬼はふきげんでした。息せきかけつけたのは、だまされてとび出した三太でした。
「親分が呼んでるってから、わっしは大いそぎで、加勢にかけつけたんですぜ……」
「だれが、てめえなんか呼ぶものか。寝とぼけるなッ」
「アレ、へんな風むきだよ」
三太はめんくらって、目をパチクリしています。
「それよか、東吉のほうのようすはどうだった？」
「それがねえ、親分……」
三太は東吉のすまいでのことを、すっかり話しました。聞いてるうちに、赤鬼の顔は、にが虫をかみつぶしたようになり、からす蛇のところになると、とうとうかんしゃく玉を破裂させてしまいました。
「ばかッ、なんてまぬけだ。その老いぼれにうまく手品を使われたのを知らないかッ。ふとんの下へかくしたのは、ことによると、青江様がさがしていられる目あての品かも知れなかったんだ。ちぇッ、なんてとんまなことをしたんだッ」

「へえ、だってむりでさ、親分。あっしには、なにもいって聞かせてくれなかったんだもの」
「どじめ。聞かなくったって、それぐらいの機転はきかすものだッ。ええ、今夜はなにもかも、なんてまがわるくゆくんだろうなあ」
「じゃ、親分もなにか、しくじんなすったんで？」
「だまれ、やかましいやいッ！」

天命堂のうらない

幼いときから育てられた、父とも祖父とも思う東吉親方に死に別れた、三葉と珠三郎とは、やみ夜にともしびを見失ったような心細さです。とむらいは、天命堂はじめ長屋の人々のしんせつで、やっと型通りすませましたが、これからは、だれを力に生きてゆく身でしょう。
「お父様を、一日も早く牢からお救い申さねばならないけど、どうしてその牢のありかを、さがし出したらいいのでしょうね」
「弦一郎兄様が生きていなすっても、顔だって知らないんだから……」
「ごぶじなら、きっと二十か十八、九でしょう。どんなに力になっていただけるかしれないのにねえ」
「そうさ。天命堂のおじさんだっていい人だし、長屋の人たち、みなしんせつだけど、わたしたちの秘密をうち明けて、力になってもらえるほど、たよりになる人はいないからなあ。それに、

このあいだから、だれだかつけねらってるようで……」
「珠ちゃん、いっそ、この後どうやったらいいか、天命堂のおじさんに、うらなってみてもらったら」
「そうだ。それはいいくふうかもしれないね」
姉弟は、隣の天命堂のすまいへ出かけました。
「おじさん、今、おいそがしいの？」
「やあ、お隣さんかい。なに、どうせ貧乏ひまなしの手内職だよ。さあ、おはいり」
内職の絵馬をかいていた天命堂は、ニコニコして絵の具皿などかたづけます。天神ひげの先に青や赤の絵の具をつけて平気な顔でした。
「おじさん、おねがいがあってきたんだよ」
「なんだね？　また、すりこぎがいるなら、新しく買ったのがあるよ。持ってゆきな」
「そんなんじゃありませんの。わたしたち、これからさきどうしたらいいか、おじさんに一つ、易を見ていただこうと思って……」
「たずね人、どの方角か、見てくださいな」
「なに、易を？　アッハッハッ、あたるも八卦っていうが、おじさんの易は、あたらぬほうが多いらしいぞ。だが、よしよし、どうせ見料はいただかぬ。あたらなくても、もともとだと思ってくれ」
じぶんのヘボ易者をじぶんで広告しながら、それでも、天命堂はしかつめらしく、小机の前にすわって、ぜい竹をもみ、算木をおきならべて、首をひねっていましたが、
「ほう、地雷復と出たな。……この卦は、どうもあまりよくない。のぞみごとは、何度でもむだぼねを折ったのち、かなうとある。また、あぶない災難にたびたび出あうが、それは思わぬ人の助けで、ぶじにきりぬけられるのじゃな。たずね人うせ物は、ほほう、物の下にかくれていると……。地の底をさがせとあるわい。地の底をな……」
珠三郎と三葉は顔を見あわせました。
「姉さん、では、お父上の牢というのは、もしか地の底の土牢では……」
「アッ、珠ちゃん、めったなことを……」

二組のあめ屋

盛りをすぎたこずえの花は、うららかな春風にさそわれて、ふぶきのようにハラハラとみだれ散ります。ここは小石川茗荷谷、切支丹牢のいかめしい塀の外。長いこと廃牢だったこの牢屋も、十何年か前からまた手入れをして、おもに勤王の志士たちをおしこめるために使われています。
地獄のような牢屋も、塀ひとえ外は、のんびりした浮き世の春で、広い原っぱでは、落花をふんで、おおぜいの子どもたちが鬼ごっこをしていました。すると、原っぱのむこうから、ジャジャン、ブーッと、陣鉦やほら貝の、勇ましい音が聞こえてきました。
「やあ、きのうの戦人あめ屋がきたい」

「行ってみろ、行ってみろ」

子どもたちは鬼ごっこをやめて、その方へかけだします。まるで今の紙芝居みたいな人気。あめ屋は十五、六と十三、四の、まだ年若い姉弟でした。金や銀の紙で作った美しい鎧冑をつけ、紙と竹で作った馬の形を腰に結んで、太刀をはいたかわいい武者姿。きのうはじめてこの原っぱへあらわれて、あめを売りながら、おもしろい一騎討ちの立ちまわりなどして見せたので、たいへんな人気でした。

「みな、景気よくあめ買っとくれ。あとでまた、熊谷、敦盛一の谷の一騎討ちをやって見せるからな」

紙の冑の中でニコニコとそういったのは、珠三郎でした。熊谷のほうはむろん三葉です。八方から、一文つかんで小さな手が出る。あめはおもしろいように売れましたが、うれしそうにあめをしゃぶる子どもたちからはなれて、一人ションボリ指をくわえている鼻ったらしがいました。三葉はその子を見ると、ニッコリして手まねきます。

「ぼうや、いらっしゃい。あめをあげましょう」

すると、ほかの子どもが、

「だめだい。あの子、お銭持っていないよ。あれは牢番の子だもの」

牢番の子。三葉と珠三郎とは、目を見あわせました。三葉はその子のそばへよっていって、

「ぼうや、お銭はいらないから、これおあがり」

あめを二、三本、紙にくるんで持たせると、その子はうれしそうに、白い歯を出しました。

戦人あめ屋になった二人は、なんのために、この切支丹牢の近くをかせぎ場所にしたのでしょう？

ブーッ、ジャジャン、いよいよお待ちかねの、一の谷の一騎討ちがはじまろうとして、子どもたちがおさない胸をおどらせたとき、こんどは原っぱの反対がわで、ドドン、ドドン、ドーン、と、陣だいこの音が聞こえました。そしてまた一人、おなじような戦人あめ屋がやってきたのです。が、これは大人です。黒皮おどしの鎧冑に、白いひげのはえた面頬（顔かくし）をした、見るから強そうな荒武者姿ですが、いくら陣だいこを鳴らしても、子どもたちの人気は、一の谷のほうに集まっているので、一人だって新しいあめ屋の方を見むく者もありません。そのあめ屋はつまらなそうに、牢屋の塀にもたれたまま、ドドン、ドドン、ドーンと、陣だいこを鳴らしつづけています。

両雄の顔あわせ

すると、このとき、小日向台の方から、六、七人づれの武士がやってきました。切支丹牢に用でもあるのか、門の方へゆきかかる。この連中のうちに、ふところ手をした、めだってりっぱな武士、これは浪人目付の青江下野です。清川八郎の姿も見える。青江下野は、あめ屋の前を通りすぎようとして、ふと、あめ屋のたいこに耳をとめました。と、なに思ったか、ツカツカとあめ屋の方へ近づいていって、静かな声で、

「これ、お前はそこで、なにをしている？」
「へい、あめを売っておりますんで」
あたりまえだが、ぶあいきょうな返答でした。
「フム、あめ屋のたいこにしては、ちと念がいりすぎはしないか。山鹿流の法にかなったあいずのばちさばき。場所は切支丹牢の塀外か……」
青江下野の目は、キラリと光りました。
「あめ屋、肯と面頬とをはずして、顔を見せろ」
「へい、ごらんになりたきゃ、お見せ申しもしましょうが、あなたさまは、いったい、どなたです？」
無礼なことば返しをするあめ屋。清川八郎をのぞいた他の浪士たちは、目をいからしてその男をにらむ。が、青江下野は、切れ長い澄んだ目に、冷たい笑いを浮かべました。
「青江下野だ。お前の顔がぜひ見たいな」
すると、あめ屋もゆかいそうに笑い出しました。
「ハッハッ、お見せいたそう」
手早く、紙肯と面頬をかなぐりすてると、あらわれたのは、目ばかり光っている黒頭巾。
「ヤヤッ、黒頭巾だッ」
浪士たちは気色ばみます。が、青江下野は、あいかわらずふところ手をしたまま、ジッと相手の目を、そして黒頭巾の覆面の下にかくれたその正体を、見とおすようににらみました。

両雄は静かに、だが、ほのおのような殺気をおびて、にらみあってつっ立つ。原っぱはしんとして、虫のはう音さえ聞こえるようでした。が、やがて、青江下野、あごで相手をさしました。
「諸君、この曲者を、とりおさえたまえ」
「心得ました」
すぐに答えてとび出したのは、柔術じまんの森田という大男。黒頭巾の胸ぐらを、松の木のようなたくましい腕でつかんでしめあげたと思うと、「ウッ、ウウウムッ」大きなからだが、弓のようにそりました。森田は顔をまっかにしてりきんだが、たえきれずにドシンと地ひびきさせてしりもちをつく。黒頭巾のふしぎなすご業！　ほかの浪士どもはあきれて顔見あわせる。
「手にあまれば、切ってよしッ」
ついに、青江下野、冷たく命令しました。
「オッ」と答えて、急にいきおいづいた浪士たち、いっせいにギラギラとぬきはなしました。
「ワッ、切りあいだア」
白刃の光におびえたのは、一の谷の一騎討ちにむちゅうだった、原っぱのむこう側の子どもたち、ワッとくもの子を散らしたように逃げ出しました。
「あ、姉さん、黒頭巾ですよッ」
珠三郎もそのさわぎにふり返って、白刃にかこまれた黒頭巾の姿を見つけてさけびました。草双紙や錦絵、町々のうわさであこがれていた英雄黒頭巾。しかも、このあいだ、じぶんが助けられた深編み笠が、ひょっとしたらその黒頭巾ではなかったかと、あとで三葉とも話しあったほど

ですから、逃げ散る子どもたちと反対に、姉の手をひっぱって、原っぱをこえて切りあいの方へかけ出しました。

だが、このあいだの権次歩兵などとちがって、剣をとっては、いずれも一流の達人ぞろいの浪士たち。その上に、まだ剣こそ抜いていないが、抜けば天下に敵なしとおそれられる、青江下野と清川八郎の二人がひかえている。この強敵に対していかに勇猛なりとも、黒頭巾はよくその身をまっとうすることができましょうか。

あッ、なんという大胆、なんという自信。浪士五人の白刃を迎えながら、黒頭巾はまだ刀を抜いていないではありませんか。

第三回　煙玉

つぶての秘密

うしろは切支丹牢の高塀、目の前には、血にかわいた五本の刃の、氷のようなきっさきがせまる。黒頭巾の進退は、ここにきわまったと見えます。だが、当人はまったく平気なもので、目もとにいたずらしい笑いさえ浮かべました。そして、

「諸君、どうだ。あめを一つごちそうしようか」

といいながら、肩からさげたあめの箱へ手をつっこんで、白い粉のついたあめを二つ三つ、つまみ出して見せました。あまりといえば人をばかにしたふるまいと、短気者の平山という浪士が、まっかになっておこっちまって、

「だまれッ、その舌の根を……」

と、大上段にふりかぶって、ただ一撃とおどりかかったとたんに……、

「エイッ」

黒頭巾がてのひらのあめを、平山めがけて投げつける。パッと白い粉がみけんに散って、

「ギャアッ」

平山はガラリと白刃を投げ出し、バタリとたおれました。いれちがいに樋口某、ものをもいわず切りこもうとして、にわかに片手で目をおさえ、棒のように立ちすくんだと思うと、

「ウムムムッ」

と、地べたにひざをついてしまった。

「ハッハッ、あめの味はどうだったね？」

黒頭巾の高笑い。またたくまに二人をたおしたつぶては、鉄でも石でもありません。子どもらが喜んでなめる一文あめです。むかしシナにつたわった少林寺拳法のはじき玉の秘術以外に、ためしも聞かぬふしぎなさえ業です。残る三人もいささかひるみながら、なおもひっしにせまろうとするとき、

「諸君、待ちたまえ」

青江下野が声をかけて制しましたから、

「ハ……？」

「いや、わしが切ろう」

ひややかにいい切りました。浪士たちの腕前を心もとなく思ったか、または黒頭巾のふるまいを心にくくいきどおったか、青江下野はここではじめてふところの手を出すと、まだ切れ味をこ

ころみぬという水心子の柄を軽くにぎって、三浪士といれ代わるように、ズカズカと前へ出ました。剣をとっては旗本八万騎に肩をならべる者のない青江下野です。グイとななめに身がまえると、そのやせた五体から、おそろしい殺気が虹のようにわき出る。さすがの黒頭巾も思わずタジタジとなってうしろへさがります。あ、いけない！　黒頭巾の背がもう高塀におっついてしまいました。

思うつぼへ敵を追いこんだ青江下野は、ようしゃもない抜き討ちの一刀を、敵のまっこうからあびせかけようとして、その右ひじのあたりがわずかに動いた。ああ、絶体絶命、黒頭巾はここでまたもや、

「タハッ」

と、つぶてをとばす。が、もとよりその手は百もしょうちの青江下野、あざ笑いとともに、

「ヤッ」

抜く手も見せず、つぶてを宙ではっしと切りはらった。せつな！　ゴオッ、とすごい音がして、くだけたつぶてから、百千条のすさまじい光がひらめき出、白い煙がもうもうとうずまき、あたりをすっかり包んでしまいました。その光に目を射られながら、さすがは青江下野、ここぞと思うあたりをサッと切る。だが、その間髪をいれぬするどい一撃にも、ああ、なんの手ごたえもありませんでした。

塀の上の旗

原っぱのむこう側から、一の谷の一騎討ちをやめて、この場めがけてかけてくる熊谷の三葉、敦盛の珠三郎、この奇怪な光景を見ておどろくかと思うと、かえってホッとしたようすで立ちどまって、顔を見あわせました。

「あッ、珠ちゃん、今のは『煙玉』だわね」

「ウン、黒頭巾はもうだいじょうぶだ。よかったね」

軽業手品の小屋で育った二人には、黒頭巾が今使ったのが、西洋手品師が用いる「煙玉」という目くらましのしかけだと、早くも気づいたのです。いかがすみをはくように、飛行機が煙幕をはるように、「煙玉」を使った黒頭巾がいつまでそこいらにマゴマゴしてるはずもないことは、姉弟はちゃんと知っていました。

はたして、煙が散り、くらんだ目がもとに返ると、浪士たちはきつねにつままれたような顔で、

「ヤア、黒頭巾はどこへうせたッ」

キョロキョロと見まわすうちに、一人が、すこしはなれたところに立ってる姉弟を見つけて、

「オヤ、あすこにも武者あめがいるぞ。やつら、もしや黒頭巾の同類ではないか」

といって、そっちへかけ出そうとしたので、今までぬからぬ顔で見物してた清川八郎が、

「ハッハッ、あれはほんもののあめ屋だよ、きみ。黒頭巾はね、この塀を乗りこえて、牢内へ逃げこんだのだ。ほら、そこを見たまえ」

思いがけぬことをいいました。

「エッ、牢内へ？　……」

みなはおどろいて、清川の指さす方を見ると、地上三メートルの塀のてっぺんに、ついさっきまで黒頭巾が背にさしていた「むしゃあめ」と書いた小旗が、人をばかにしたようにつっ立っている。そればかりか、塀の根方には、平山の投げ出した白刃がさかさまに立てかけてありました。これは忍術者が塀をこえるとき、刀のつばをふみだんに利用する手を、黒頭巾ももちいた証拠だ。

青江下野はにがりきって「むしゃあめ」の旗をにらみます。なにしろ、あれだけ黒頭巾を追いつめていたはずです。たとえ相手が死にものぐるいにつぶてを投げてこようとも、苦もなくたたきおとして、返す刀でじゅうぶんに切ってすてるだけの、勝ちめは胸にあったのです。ところが、そのつぶてがあめでなく、まったく思いもよらぬあんな目くらましだったので、マンマと網の獲物を逃がしてしまった。

時も時、切支丹牢の塀の内から、聞きおぼえのある陣だいこの音が、まるで、外の一同をあざけるように、間のびた調子で聞こえてきました。ドドン、ドドン、ドーン。

「ヤヤッ、あのたいこの音は……」

浪士どもは、顔色をかえて目をみはりました。黒頭巾が、みなをからかっているのだ。

「ムッ、おのれ、にくいやつ」

青江下野は、かんしゃく玉を爆発させてしまいました。しかし、まさか塀を乗りこえるわけにもいかず、五十メートル近くはなれた表門さしてかけ出した。浪士たちもあとを追いましたが、清川八郎ただ一人、なにくわぬ顔であとに残りました。どこやら底知れぬ太さのあるこの男は、みなの姿が門内へ消えたのを見すまして、ニヤリと笑うと、三葉や珠三郎の方にむきなおりました。

関口の大滝

あめのつぶて、「煙玉」の目くらましと、つづけざまの奇計に、おそろしい刃のかこみを苦もなくのがれ、切支丹牢の塀の内へ姿を消した黒頭巾の、胸のすくようなはたらきに、むちゅうで見とれていた姉弟は、清川八郎がジロジロとこっちを眺めているのに心づくと、

「姉さん、なんだかきみのわるい侍だね」

「そうね。あやしまれるとめんどうね。それにあのさわぎでは、きょうはもうだめね」

「ウン、牢のようすをさぐるどころじゃないや。あしたまた出なおしてこようよ」

ささやきあって、そこをはなれました。原っぱをこえて、坂をおりるとき、なんだかあとをつけられてるような気がしたので、二人はかけ出すようにして音羽の通りへ出ると、木立のしげった関口の大滝の方へまがって、もうだいじょうぶだろうと思ってふりかえると、アッ、いけな

い！　ぬからぬ顔でここまでつけてきた清川八郎が、このとき、ニコニコ笑いながら、

「オーイ、敦盛卿、熊谷殿も、しばらくおん待ちそうらえ」

と声をかけます。姉弟はギョッとして、聞こえぬふりしてまた歩き出すのを、しいて追いかけようともしないのは、この道が、関口の大滝のところでゆきどまりだと知ってるからです。

「もし、心配はご無用ですぜ。わたしはあんたがたの味方だからな。わたしは山鹿先生の門人で、清川八郎という者だ。あんたがたは、山鹿先生のことが聞きたくござらんかな」

山鹿先生、山鹿先生と大声でいうのが耳について、姉弟の足が思わずにぶりました。それを見て、清川はニヤリと笑う。かれはどうやら、姉弟の素性さえ知ってるようすです。しかし、山鹿門下に清川八郎の名がないことは、姉弟は夢にも知りません。

いったい、清川八郎は、勤王の志士たちともまじわる一方、青江下野などともしたしみ、やがては佐幕派の浪士を集めて新徴組というものをつくり、その大将になろうとしている、じつに腹の底の知れぬ男でした。

清川八郎はとうとう姉弟に追いついて、

「お呼びとめして失礼。わたしは今いったとおり、山鹿先生の教えをうけた清川です。師範代大槻冬吉殿が、あなたがたをお育てしてることも、よくぞんじていた。なに、さっきも切支丹牢のそばでお二人を見かけたで、『ああ、父上のゆくえをさがしていられるな。あっぱれ孝子だ』と心に感じいっていたところでしたよ」

なにもかも知ってるようすです。それに、今思い出すと、黒頭巾にたいしても、この人だけは

刀もぬかなかったようだ。では、青江下野の一味でないのかもしれないな。姉弟は、よほど相手をうたがう心がとけてきました。

「では、おじさんは、その、山鹿先生って人の、ありかを知ってるんですか？」

珠三郎は、もしやこの人にたずねたら、それがわかるかもしれないと思うと、たまらなくなって、なにげなくたずねてしまいました。

「さあ、それは、知ってるとも、いないとも、ハッキリいえぬ秘密でな。めったなことをしゃべると、この首がとぶことでござるから……」

どうも気にかかることばです。

心ひく話

「でも、生きてはいらっしゃるんでしょうか？」

ああ、三葉までがつりこまれました。

「それはもう、りっぱに生きていられる。このあいだなど、わたしは……、オット、いやなに、生きてはいられると聞きましたよ」

みょうにことばをにごすのが、いよいよ姉弟の心をそそります。珠三郎はやっきになりました。

「ねえ、おじさんはこのあいだ、お父上にあったんですか？　教えてください。後生、おねがい

ですから」

「まあ、まあ、待ちたまえ。……いや、じつにあなたがたの孝心に感じいる。そこでな……」

清川はあたりを見まわしました。深い木立には人影もなく、ただ関口の大滝の水音が、大地をとどろかせているばかり。

「そこで、わたしもうち明けていうが、わたしもじつは、山鹿先生を牢から救おうと心をくだいてるのだ」

清川は、声をひそめていいました。

「今やアメリカ、イギリス、ロシア、フランス、などという異国がみなきばをといで、わが日の本をねらっている。かかるときに、山鹿先生のような大学者を、むなしく牢獄にうずめておくのは国家の大損失だ。今こそわが国民は、先生に国防の大方針をご指導あおがねばならぬときだ、という声が高まって、幕府もそれに耳をかたむけてはいるのだが、先生をときはなすには、一つの大きなさわりがござるのだ」

姉弟は、清川のことばに聞きいります。

「というのはだ。山鹿家につたわる、『大日本攻城図説』全十八巻という兵学書がある。その第一巻こそは『江戸城攻め』の巻。そのうちに、『七つの抜け穴』の秘密をくわしく記した図解が四丁（八ページ）ある。これは江戸城を守るにも攻めるにも、その死命をにぎる急所なのだ。しかも、太田道灌がつくった七つの抜け穴は、今ではどこにあるのか、幕府の重役さえ知っている者はいなくなったのだから、この秘密がまんいち敵の手にわたったら、城をふせぐすべもない。

ちかごろ、尊王倒幕の声が四方に高くなったので、幕府はいよいよ気にやんで、ついに山鹿先生をめしとり、『大日本攻城図説』をとりあげたが、しらべてみると、肝心の『七つの抜け穴の図解』四丁だけが紛失していたというわけだ」

東吉親方が、じゅうぶん説明しないうちに死んでしまった、こよりひもの大秘密というのは、これだったのです。姉弟は思わず顔色をかえて目を見あわせますが、清川は見ぬふりをして、

「だから、山鹿先生をゆるすことを、幕府ではどうしても聞きいれぬのだ。いや、それどころか、『どうさがしても、あの図解が手にはいらぬうえは、抜け穴の秘密を知ってるただ一人の山鹿士行を、いっそ殺して、永久に秘密がわからないようにしよう』という議論が、ちかごろ幕府で盛んになってきた。その下準備のためか、近日中に、先生を今の牢から、だれも知らぬよその秘密牢へ移そうとまでしているようすじゃ。そうなっては、いよいよわれらの力ではおよばない。だから、わたしはすこしも早く、あの図解をさがし出して、幕府にかけあい、先生を牢からすくい出したいと、あせっているところでござるよ」

清川八郎の話は、姉弟の心を、グイグイとひきつけます。

「わたしはふと、大槻冬吉殿、いや、大月東吉親方が、その図解のゆくえを知ってはいまいかと思いついて、たずねていこうと思ううち、ついこのあいだ死んだと聞いて、落胆しましたよ。だが、もしか死にぎわに、あなたがたに、なにかそんなことをいい残しはしなかったかな？　もしなにもいわずに死んだとあれば、先生を幕府の牢からすくいだす道は絶したも同然、いや、お命さえとりとめることはできぬのだ」

花見船

一本気の珠三郎は、それを聞くと、もうたまらなくなりました。

「おじさん、清川さん、もしもその図解が見つかれば、きっとお父上はすくい出せるんでしょうね？　図解だけとりあげて、お父上は許されぬなどと、幕府がたでいいはしないでしょうね」

「ハッハッ、だいじょうぶさ。清川八郎、幕府のそんな手にのせられはせんよ。だから、早くその図解を、こっちへよこしたまえ」

「エ、ではね……」

珠三郎が、ふところから守り袋をとり出そうとしたから、三葉はびっくりして、

「ア、珠ちゃん、ちょっと待って……」

「いや、心配無用、大船に乗った気でござれ。さあ、早く図解をこっちへもらおう」

清川ほどの男も、ここですこしあせりました。そのはずだ。この図解が手にはいれば、自分の権勢は、勤王がたに対しても、佐幕派に対してでも、すばらしいものになる。だから、いまさらたためらう姉弟のようすがもどかしくて、もうこうなれば力ずくでもとりあげようと、珠三郎めがけて進みよったとき、思いがけぬそばの木かげから、

「いよう、清川氏、うまくやるのう」

「子どもをだまして、そいつをまきあげるとは」

「いや、すごうで、すごうで。あっぱれ軍師でござるな」

二、三人でそういう声が聞こえました。ばあいがばあいだったので、天下の怪物清川八郎も、思わずあわてて、大刀に手がかかると、あやしい人声の聞こえた方をキッとにらみました。

「だれだッ、そこにいるのは、なにやつだッ」

すると、太い木かげから、ニヤニヤしながら出てきた三人づれ。だが、武家ことばには似もつかぬ、鼻かけ、目っかち、手棒の、それぞれきたないかたわこじき、このあたりでよく見かける顔です。

「へへ、お旦那さま、おありがとうございます」

「どうぞや、ごほうびをくだせえまし」

こじきどもはヌケヌケと、清川八郎の目の前へ、きたないかけわんをつき出しました。そうとう人をくった清川も、このきたない相手には顔まけして、拍子ぬけしたようすだったが、

「ム、さてはきさまら、だれかに入れ知恵されたなッ。さあいえ、だれにそそのかされた？　いわぬとおのれら、たたっ切るぞっ」

清川の権幕がはげしいので、こじきどもは、ヒャッとしりもちついて、はいつくばりました。

「へい、いいます。命ばかりは……」

「たった今、そこの関口八幡の前で、黒い頭巾のお武家さまにいいつけられまして……」

「これこれのことをいって、かげでほめろ。えんぎを祝って、きっと旦那さまからも、多分にごほうびがいただける。まちがわずにいってみろとね……」

こじきどものことばを聞くと、清川はくちびるをかんだ。こやつらに、武家ことばの口上まで教えて、じぶんをあざけり、きわどいところでじゃましたのが、あの黒頭巾のしわざであったとは……。

清川はふと気がついて、あたりを見ると、三葉も珠三郎も、こじきどものことばでようすをさとったものか、いつのまにか二十メートルばかりかなたを逃げてゆく。だが、二人もうろたえていたのか、行きどまりになってる大滝の堰の方へかけてゆくので、清川はニヤリとしました。

「フフン、袋のねずみだ。今につかまえてやるぞ」

姉弟も、堰のところで道が行きどまったので、ギョッとして立ちすくみました。

「姉さん、こまったねッ、どうしよう」

「ほんとに、こまったわねえ」

すると、大滝のしぶきの散る堰下の川の中で、

「やあ、珠兄さん、三葉どの、うまいところで出あったな。おじさんといっしょに、船で花見とやらかさないかね。どうだい、この風流は」

のんきに声をかけたものがありました。

「アッ、天命堂のおじさんだッ……」

「まあよかった。珠ちゃん、早くあの船へ」

土手下の小船の主は、思いがけぬ相長屋の天命堂でした。貧乏どくりをつみこんで、花見船としゃれていたのです。姉弟はころがるようにその小船へとびこむと、あきれて目を丸くする天命

堂にかまわず、三葉は綱をとき、珠三郎は水棹をふるって小船を岸からつきはなす。小船はグラグラゆれながら、はげしい水勢におし流されるとき、堤の上につっ立つ清川八郎の、無念げに大刀の柄をたたく姿が見えます。

「ウ、おどろいたね、どうも。いったいどうしたことだね、珠兄さ……。アッ、たいへんだッ、とくりがたおれて、お酒がみんなこぼれちゃったぞ……」

天命堂が、悲鳴をあげてうろたえました。

切り取り強盗

浅草鳥越のお天文台近くにある、天文床という髪床の昼すぎです。この近所に、三葉や珠三郎や、天命堂の住んでいる天文長屋があります。天命堂にいわせると、（わしの八卦が、天文地理なんでもよくあたるので、長屋の通り名になった）なんていばりますけれど、ほんとうは、（あまりボロで、屋根がやぶれていて、寝ながら、月でも星でもながめられるからだ）という悪口のほうが、ほんとうらしい。

この天文床に、五、六人のお客が番を待っている中に、ヘボ易者の天命堂もまじっていて、相長屋の熊さんが横町のご隠居とさすヘボ将棋を、のんびりとながめていました。

親方はかみそりの手も休めず、客を相手に、

「だけど、わたしは、そこが黒頭巾のえらいところだと思うんだ。あれだけすごい腕を持ちなが

ら、けっして人を切ったことがないというのだからね」

ひいきの黒頭巾のうわさに、むちゅうでした。

「そりゃえらいさ。第一、親方なんかみたいに、腕がいいのかわるいのか知らないが、むやみと人のおでこやあごを切るのは、たまらないからな」

だれかがまぜっ返したので、親方はふくれて、みなは大笑いしました。すると、このとき、表からブラリとはいってきた八助という男が、

「おい、親方、お前は、黒頭巾が人を切ったことがないないって、よくいうけど、黒頭巾がとう人を切ったぜ」

といったので、みなは八助の方を、びっくりして、ふりむきました。親方は、むきになって、

「なんだって？　そ、そんなべらぼうなことがあるもんかい。いったい、だれがそんなことをいいふらすのだな」

「ところが、ほんとうなんだ。ゆうべ末広町の質屋へ、黒頭巾がしのびこんで、質屋夫婦をたたっ切って逃げたんだ。検視やらなんやらで大さわぎだぜ」

「エッ、八つぁん、ほんとうかい？」

熊さんまでが、将棋をやめてのりだします。

「ほんとうとも。しばられた番頭や小僧が、赤鬼親分にけさ話したんだ。『わしは黒頭巾だ。攘夷の軍用金に三百両持ってゆく。さわぐと、ひきかえしてきてたたっ切るから、そう思え』といって、ゆうゆうと出ていったってんだ」

八助の話は、みなをおどろかせました。弱い者を助けて、悪役人や強い無法者をこらし、江戸じゅうの人気者になった黒頭巾が、強盗したり、人殺しまでしようとは！

「八つぁん、みなをかつぐんじゃあるまいな？」

親方は、どうしてもほんとうにできぬらしい。

「検視役の八丁堀のだんなと、赤鬼親分とが、夫婦の切り口を見て、『これほどみごとに切ったのは、黒頭巾ほどの腕前にちがいない』って、おどろいて話していたということだ」

「フーム、じゃ、黒頭巾ってやつも、案外のくわせものだったんだねえ」

と、すっかりふんがいする者もいました。

「しかし、ほんとうに攘夷の軍用金が入り用だったのかもしれないさ。『切り取りするは武士のなれえだ』という、芝居のせりふさえあるからな」

と、黒頭巾に同情する者もある。すると、今まで、片すみでだまってみなの話を聞いていた、天神ひげの天命堂が、急に笑い出しました。

「アッハッハ、みなさん、心配ご無用ですぞ。その黒頭巾は、たしかににせ者にちがいない。いや、とんでもないくわせものだよ。ひとつ、世間の人のために、わたしが天眼通でもって、そのにせ者のばけの皮をはがしてやるよ。いや、こいつはのんびり、ひげなどあたってるばあいじゃない。どれ、そのにせ者を一つ、とっつかまえてやろう」

そういって、表へとび出しましたから、みなはあきれてそのうしろ姿を見送りました。

「おい、おかしいぜ、天命堂のおやじめ、陽気のかげんで、気がへんになったようだぜ」

「へんなまねでもされちゃ、長屋じゅうのめいわくだ。わしがひとつ、ようすを見てくらあ」
熊さんも心配して、あとを追いかけます。

やみの駒形堂

黒頭巾が切り取り強盗をはたらいた！　というわさは、早くも大江戸市中にひろがりました。しかも、ゆうべ、末広町の質屋ばかりでなく、ほかにも二軒ばかり、黒頭巾におしこまれ、大金をうばわれたということが知れわたると、江戸の町々の人はみな、ふるえあがってしまいました。そのはずです。あれだけみずぎわだった腕前の黒頭巾があばれだしたら、どうしてふせぐことができましょう。錠もかんぬきも、なんの役にもたちますまい。
天命堂だって、あまりのおそろしさから、気がへんになったのかもしれません。日がくれると、江戸の町々では、大戸をバタバタとしめてしまいました。宵から泣きだしそうだった空も、夜になって、すっかり陰気なさみだれになりました。
ここは大川端、けむるようにふるさみだれのやみの中に、黒々と見えるのは駒形堂です。世間はしんと寝しずまって、軒の雨だれと、石垣をあらう大川の波の音ばかりが、ものうく聞こえるとき、なみ木の方角から、ピチャ、ピチャと、ぬかるみをふんでこちらへ近づく足音がありました。やみをすかして見ると、みの笠を身につけたくっきょうな二人づれ。みのからはみ出た長い刀のさやが、雨にぬれてキラリと光ります。

「では、貴公は三吉町の大口屋の寮だな」
「ウム、きみに蔵前の伊勢屋をたのもう。だが、あの家は雇い人の数が多い。用心したまえ」
「ハッハッ、何十人いてもかかし同然さ。一ど黒頭巾で包んだ顔を見せると、一ぺんにふるえあがって腰をぬかしてしまうからな」
小声でささやきあうことばは、奇怪でした。
「じゃ、ここで別れよう」
「うん、あとでまたあおうぜ」
駒形堂の前で、二人がたもとをわかとうとするとき、
「黒頭巾の名をかたるにせ者ども、待てッ」
低い力強い声が、やみの中から聞こえました。とびあがるばかりにおどろいたのは、あやしい二人づれ。刀の柄に手をかけながら、あたりを見まわしたが、ただまっ暗で、それらしい人かげも見えませんでした。
「はてな？　今のは空耳だったかな？」
「いや、だれかそのへんに、かくれているけはいがする。ゆだんするなッ」
さすがに、肝の太い二人の曲者、逃げ出すどころか、かえって度胸をすえると、手早くみの笠をぬぎすてて、身がまえた。だが、なんという奇怪さだ。二人とも、目ばかり光った黒頭巾。ああ、快傑黒頭巾は一人だと思ったのに、今見ると二人いる！
「アッハッハッ、世間をさわがすにせ者二人、よくもとうがんづらを並べたね。どれどれ、今こ

の天命堂が、天地を見ぬく眼力をもって、おぬしらの正体を見あらわしてくれん。エヘン」

ガサガサと駒形堂のとびらをあけて、堂の中からヌッと首をつき出したのは、ああ、とんでもない、まさしく天文長屋の主、ヘボ易者天命堂でありました。さっき熊さんたちを心配させたのはほんとうで、とうとう気がくるったものでしょうか。二人の黒頭巾はそれを見ると、

「や、そこにいたナ。切ってしまえ」

血相かえて、堂の方へかけよります。

第四回　ふしぎな囚人

黒頭巾三人

血相かえて、駒形堂の縁近くつめよったあやしい二人の黒頭巾の曲者を、とびら口につっ立った天命堂は、ちっともさわがず、手には人相見に使う大きな天眼鏡をななめにかまえ、いばりかえってにらみおろしました。あんまりたいぜんとしたそのようすに、さすが不敵な二人の黒頭巾どもも、天命堂の腕前のほどを判じかねて、うっかり切りこむこともできず、刀の柄に手をかけたまま、気合いをはかって身がまえます。

さみだれはなお降りしきり、あたりのやみはいよいよ濃い。そのやみの中から、また一個の人影が、魔のごとくに足音もたてず、駒形堂の裏手へしのびよったのを、天命堂も二人の黒頭巾も夢にも気づきません。これは、江戸一番の腕きといわれる目あかし、赤鬼の弥太五郎でした。むろん、二人の曲者のあとをつけて、ここまでやってきたらしい。すわれるように、縁の下へた

くみに身をひそめた赤鬼は、やみの奥で、すごい目を光らせながら、外のけはいに耳をすましま す。

（チェッ、もすこしで、御用とくらわすところを、とんだじゃまがはいっちまった。だが、とび出したのが、天命堂だとは大笑いだ。あいつ、身のほども知らずに出しゃばって、泣きつらをかくがいい）

赤鬼さえあきれるむてっぽうな天命堂は、しかし、相手が容易に手出しもしないようすなので、すっかりいい気になってしまったらしい。

「ハハン、天眼鏡をもって、つらつらなんじらの相を見るに、いよいよたしかに、黒頭巾のまがいもの、名まえかたりのペテンやろうに相違ないわい」

図にのって悪口をたたいたから、二人の黒頭巾どもはおこっちまった。

「こしゃくな、切れ！」

「うむ」

同時にギラギラ抜きはなつ。目の前にすごい白刃の光を見ると、とたんに、根がおくびょう者の天命堂、つけ焼き刃の勇気がいっぺんにけしとんだか、「ヒエッ」と奇声をあげると、あわてて堂の中へ逃げこんで、ガタンととびらをしめてしまいました。いきおいこんで縁へとびあがり、とびらロへおしよせた二人の黒頭巾どもは、

「おのれ、あけないかッ、ひきょう者ッ」

ガタガタと、とびらを内外からおしあう音がする。天命堂が、ありったけのばか力を出して、

とびらを内側からおさえているらしい。あまりのばかばかしさに、ゆか下でようすをうかがう赤鬼も、思わずにが笑いしかけたとき、

「天命堂、これ、天命堂」

ゆか板ごしに、ちょうど赤鬼の頭の上で、そういう声が聞こえました。

（アッ、あの声はッ……）

赤鬼のからだじゅうの血が、カッとにえかえった。

「天命堂、とびらをあけて二人を入れてやれ」

天命堂は、びっくりぎょうてんしたらしい。

「エッ、だれだ？　そこに、いるのは。だれだッ？　だれか、いるなら、ここへきて、加勢してくれ。このとびらを、しっかり、おさえてくれ……」

むちゅうでいきみながら、やみの中の意外な声の主に、救いをもとめる天命堂。やみの声はおちついて、

「天命堂、安心してとびらをあけろ。わたしは黒頭巾だ」

ああ、とびらの外にも二人の黒頭巾。堂の中にもまた、みずから黒頭巾と名のるふしぎな声の主。合わせて三人の黒頭巾のうちで、どれがはたして本ものの快傑黒頭巾なのか、これはゆか下にひそむ赤鬼が、だれよりもよく知っていました。一生忘れられない、うらみかさなる黒頭巾の声ですもの。

消えた快傑

「黒頭巾？　ほ、ほんとですかッ？」
「ほんとうだ。外のやつらは、わたしの名をかたる曲者だ。今そのばけの皮をはいで見せてやるから、早くとびらをあけるがいい」
　とびらの内側の問答は、堂の外の二人にも聞こえてきます。ギョッとしたらしい二人組の黒頭巾が、逃げ出そうとするとたんに、
「で、では、あけますぜ」
　ガタンととびらは内側から開かれる。もう逃げ出すひまはないので、やけぎみの二人組、
「ぬかるなッ」
「おおッ」
　切っ先をそろえて、まっ暗な堂の中へ、ダッと同時に切ってはいる。赤鬼が十手をにぎりしめながら、その活劇の物音に耳をすます頭の上で、ゆか板はあらあらしくふみならされ、土ぼこりが雨のようにバラバラと落ちてくる。
「エイッ」「なんのッ」「ウムッ」「おのれッ」
　短い、だが火をはくようなさけび、ズシン、ズシンと、ゆかの上で組み合うらしい物音。
「キャッ」

　とんきょうな悲鳴が一声まじったのは、まごまごして、そばづえでも食った天命堂らしい。
「ウウウムッ」
　しぼるようなうめきを最後に、ものすごい格闘のさわぎがピタリとやみました。
（よしッ、今こそ黒頭巾めを……）
　くだけるように十手をにぎりしめた赤鬼は、今こそほんものの黒頭巾をひっくくって、かねてのうらみをはらそうと、はやる心をおさえながら、ソッと、ゆか下からはい出しかけました。とたんに、すぐ頭の上のあたりで、
「ハッハッハッハ、赤鬼、もう出てきたらどうだ。世間をさわがす強盗浪士どもをひきわたしてやるから、これでもひきたてて手がらにするがよかろう」
　ひにくな黒頭巾の声がします。ああ、どうしてかれは、赤鬼がこのゆか下にひそんでいたことまで見ぬいていたのでしょう？　だが、赤鬼は今、そんなことを考える心のよゆうもなく、目もくらむほどのいかりに前後を忘れて、
「ウヌ、黒頭巾めッ」
　ゆか下から身をおどらせて、縁にとびあがる。だが、あたりはうるしのようなやみが、黒くうずまいているばかりで、黒頭巾らしい者の影さえ見えません。
（堂の中だ！）
　赤鬼は、たしかにそうと目星をつけると、じゅうぶん用心して、ソッと堂のとびら口から、中のようすをうかがいました。が、中はシンとしていて、はえ一ぴきひそみかくれているけはいさ

え感じられません。
（おかしいな？）
赤鬼は十手をかまえたまま、左手でふところから火うち石をとり出すと、いきなりガッと十手に打ちつけます。パッと赤い火花が散って、堂内のやみが、ほのかに明るく照らされました。その一瞬間に、赤鬼のするどい目は、堂のすみからすみまでをスッカリ見てとってしまいました。
ゆかのまん中には、あて身をくって気絶した二人の曲者が、黒い覆面をひっぱがれた顔をあおむけてたおれていたし、壁ぎわのところには、これも気絶したらしい天命堂が、はなはだだらしのないかっこうでのびていました。けれども、もう一人の黒頭巾の姿は、いつのまに、どこから立ち去ったものか、かき消したように見えませんでした。
「ハテナ、このとびら口しか出入口はねえのだが……」
赤鬼は思わず目をこすりました。夢ではないはず、たしかに黒頭巾の声を聞いたのに！

番町の青江様

つぎの日には、江戸じゅうがこのうわさでもちきりでした。わけても、きばつな一役をつとめた天命堂のところへは、その晩の冒険談を聞きに、入れかわり立ちかわりおおぜいおしかけてくるので、天命堂はすっかりとくいになって、手がら話をやります。
「イヤ、わたしは天眼鏡であいつらの人相を見たとたんに……」

「オッと待ったり。さっきの話では、その晩は一寸さきもわからぬやみ夜だったんじゃねえか」
「うーむ、なに、それがその、わたしの天眼通というもので……」
やじもはいって、なかなかにぎやかです。天命堂はいっしょうけんめい。
「一目で見やぶったから、『コラ、まがいもの、そこ動くな』と、天にもひびけと呼ばわった。相手はおどろいたらしいが、多勢をたのんで、太刀風するどく切りかかる。わたしは天眼鏡をかまえて、丁々発止、受けつ流しつ大奮戦のさいちゅう、ほんものの黒頭巾がかけつけてね。二人でなかよく一人ずつの曲者をとりおさえた。ところへきあわせた弥太五郎親分にそいつらをひきわたしたのは、いわば手がらをゆずってやったのだから、おくゆかしい話さ。にせものは攘夷の軍用金集めだと称して強盗をはたらく、ちかごろはやりの悪浪人どもさ。黒頭巾の名などをかたって、世間の目をくらましたつもりだったんだな。なに、わたしにそんなたいした腕前があるってこと、知らなかったって？　アッハッハッ、のうある鷹は爪をかくすってことわざを、さてはごぞんじなかったね。ハッハッハッ」
むちゅうでとびらをおさえていたり、そばづえくってたわいなく目をまわしてしまったことなど、だれも知らないから、いい気なものです。
その時分、このあいきょう者天命堂の隣のすまいでは、三葉と珠三郎とが、父山鹿士行や、兄弦一郎のゆくえをさぐるくふうに、おさない心をくだいていました。
あめ屋にばけた黒頭巾が、切支丹牢をさわがせてから後は、牢の用心がにわかにきびしくなり、うっかりよりつけなくなったのには、姉弟もとほうにくれてしまいました。

ある朝、二人が塗りのはげた膳にむかいあって、まずしい朝ご飯をたべていると、大家のばあさんがはいってきました。三葉はいそいで、立って迎えようとするのを、

「なにさ、かまわないでくださいよ。あのね、このあいだ、お三葉さんがいってなすった、旗本のお屋敷あたりへ奉公にあがりたいって話だが、いい口が見つかったよ」

姉弟は顔を見あわせました。二人がどんなに苦心しても、父のゆくえの知れぬのは、幕府の牢屋の秘密をさぐる手づるがちっともないためでした。「だから、わたしが幕府の役人か旗本へ奉公にはいりこんで、心をくばってさぐったら、どんなひょうしで、うまい手がかりがつかめるかもしれない。二人でべつべつにさぐったほうが、きっと早いわよ」と三葉がいいだして、しんせつな大家のばあさんに、奉公口のせわをたのんであったのでした。

「先様は、とてもご大身のお旗本で、まるでお大名みたいなおくらしむきだよ。わたしの姪が以前にあがってたお屋敷だから、よく知ってるがね、奥様がとてもおやさしい、いいおかたでねえ……」

「なんとおっしゃるお屋敷なんでしょうか？」

「ああ、それはね、番町でもって、八千石というたいしたご知行さ、青江下野様という……」

「えッ、青江下野様ですって……」

「オヤ、お前さん、青江様をごぞんじかえ？」

呼子笛

大家のばあさんがさんざんしゃべって帰ったあとで、姉弟はしんけんな顔をよせて相談をはじめました。

「珠ちゃん、きっとお亡くなんなすった親方さんのおみちびきだと思うわ。青江下野って、このあいだ、切支丹牢のところで見かけたあの人だわね」

「そうさ。でも、あんなすごい人のところへ、姉さん一人ゆかせるのは、心配だからなあ」

「だけど、奥様はとてもやさしいかただっていうし、浪人目付という重い役むきなら、お父上やお兄様のことなど、さぐり出すのに、きっとつごうのいい手づるがありそうじゃないの」

「姉さん、このあいだ、関口の大滝で、こよりをうばいとろうとした、あの清川八郎は、青江のところへ出入りするらしいから、もし、あいつが、姉さんの素性を、青江につげたらどうする？」

「アッ、それもそうねえ」

珠三郎のもっともな心配に、三葉も困りましたが、思いきるにはあまりにおしい口。

「こんないい手づるを、みすみす……」

「そりゃ、そのとおりだけど……」

姉弟しあんにくれたところへ、表からブラリとはいってきたのは、お隣の住人天命堂でした。

「きょうは二人とも出かけないのかね？　オヤ、どうしたね？　なにか心配ごとでも？」
すると、三葉が急に顔を明るくして、
「ねえ、珠ちゃん、どうきめるか、また天命堂のおじさんに、うらなっていただいてみましょうか」
「だって、おじさんのうらない、あんまりあてにはならないぜ」
人のいい天命堂は、おこりもせずに、
「これは珠兄さん、手きびしいごあいさつだね、ハッハッ。では一つ、おじさんのうらないのたしかなところを見せてやろう。ええッと、ムニャムニャ、いやわかった。三葉どのが番町の青江へ、奉公にあがろうか、どうしようか、という問題だろう。どうだ、おじさんの天眼通におどろいたかね」
「なんだい、おじさんは大家のおばあさんのおしゃべりを、聞いてたんじゃないか」
「や、あたった。こりゃ、珠兄さんのほうが、うらないがじょうずだぞ。アッハッハッ。いや、じょうだんはぬきにして、清川などのことは心配するがものはない。わたしが一つ、すばらしいお守りをあげるから」
天命堂は、たもとをさぐって、一個の小さな呼子笛を、もったいらしく、つまみ出していいました。
「このあいだ、わたしが黒頭巾に加勢しておおいに働いたろ。あの晩、黒頭巾がいうにはだ。『天命堂どの、今宵は貴殿のお助太刀のおかげで、せっしゃの名をかたる曲者どもをとっちめることができて、千万かたじけない。お礼に、この呼子笛をさしあげる。この後、なにかあぶない災難に出あわれたら、この笛を鳴らしてくれたまえ。いつ、どんな所へでも、きっと加勢にかけつける』と、ハッハッハッ、まるで魔法の笛みたいだが、まさか黒頭巾ほどのさむらいが、うそはつかぬだろう。だが、わたしにはべつに黒頭巾に助けてもらう必要もないから、三葉どのが奉公にあがられるなら、お餞別に、この呼子笛を進上しようと思ってね」
おとぎばなしじみた呼子笛など、どこまでが本当だかと思われもするが、姉弟は大喜びです。
「まあ、これが黒頭巾の……」
「貸してごらん、姉さん。ふいたらほんとうに、今ここへ、黒頭巾があらわれるかしら？」
「あッ、珠兄さん、およしよ。用もないのに黒頭巾を呼び出してはいけないよ。絶体絶命、危機一髪のときでなくちゃ、鳴らしてはいけないと、かたくわたしがいいつけられてるんだからな」
天命堂は、あわててとめました。

虎穴に入る珠三郎

話がきまって、黒頭巾の呼子笛というのを、たいせつに胸にしまった三葉が、青江下野の屋敷へ奉公にあがったあとには、珠三郎がただ一人、しょんぼりととり残されました。たったこのあいだ親方に死なれ、今また、おさないときから片時もはなれぬなかよしの姉に出てゆかれた珠三郎の心のさびしさは、なんとしてもまぎらせられません。

「わたしがいっちまうと、きっとさびしくなるでしょうけど、だいじな目的のためだから、しんぼうしてちょうだい。姉さんだって、珠ちゃんのことが気になって、胸がつぶれるようだけど、がまんしてゆくのですもの。ではね、わずらわないでね。そして、あなたも早く、お父上のゆくえをさがしてくださいな」

出がけに、涙をたたえてそういった、けなげな姉のことばを思い出すと、珠三郎も歯を食いしばって、さびしさをこらえます。

（姉さんにばかり苦労させちゃすまないや。よし、わたしだって……そうだ、今夜こそ思いきって、切支丹牢のようすをさぐってみよう）

さぐってみようたって、そばへ近づくのさえあぶない場所です。だが、珠三郎は、思いたったら、ぐずつかない気性でした。ひとりぼっちのさびしい晩飯をいそいですませると、使いなれた管ばしごの束をかかえてとび出しました。

六キロあまりの道を、若荷谷へ来たころは、もうすっかり日はくれはてて、やがて月でものぼるのか、東の空は明るく見えます。このあいだ、黒頭巾の目ざましい働きを見たあの原っぱを横ぎって、牢の裏手へまわりました。牢の四方をかこむ高塀のてっぺんには、今まではなかった忍びがえしがいかめしく作られ、するどい鉄くぎが地獄の針の山のようにすきまなく植わっていて、ものものしい用心ぶりでした。

「だから、管ばしごを持ってきたんだい」

あたりを見まわしておいて、手早く管ばしごを組み立てると、塀ぎわにおし立てた珠三郎は、

スルスルとてっぺんにかけのぼり、小手をかざして、塀ごしに牢内のようすを見おろします。なるほど、この手なら、塀の内側だっていくらでも見えるはずだ。すぐ目の前は、古い大木のしげった木立で、木の間から向こうに黒々と見えているのが、牢屋の建物にちがいない。

「あの中に、お父上がとらわれていらっしゃるのかもしれないのだな」

珠三郎は、なつかしさにふるえる胸をおさえて、くいいるように眺めていましたが、

「ああ、じれったい。ここからじゃ、なにもわからないや。どうかしてあのそばまで……。ああ、そうだ。思いきってやってみろ……」

急に、珠三郎のからだがつばめのようにひるがえって、はしごのてっぺんからはなれました。つぎのせつなには、忍びがえしの上をとびこして、猫のようにしなやかに、切支丹牢内の地面におり立っていたのです。だが、あまりにむこうみずな冒険ではないか？　もし見まわりの役人につかまったら、打ち首かはりつけか、命にかかわることだ。けれども、それをおそれていられぬほど、珠三郎の心は、まだ見ぬ父の面影恋しさでいっぱいだったのです。一足二足歩きだしたとたん、

「アッ、あぶないッ。こんなところに網を張っときやがらあ。うっかりさわると、鳴子がガラガラ鳴りだすしかけだな。じょうだんじゃないぜ」

ぬけ目なく心をくばりながら、木立のやみをたくみにぬって、牢屋の方へしのびよります。

薩摩武士

まもなく、丸い大きな月が、ポッカリと空にのぼって、あたりは昼のように明るくなりました。このとき、塀外の原っぱに、姿をあらわした三人づれの人影がある。短い紺がすりの着物に短い袴、おそろしく長い大小を横たえ、肩肘いからせた武骨な姿を見れば、三田四国町の薩摩屋敷の武士だということが一目でわかります。

そのころ、薩摩屋敷には、益満休之助という豪傑がいて、

「幕府をたおすには、まずひざもとの江戸市中をさわがせ、蜂の巣をつっついたようにするがいい」

という、まことにぶっそうな、人のわるい計画をたてて、おおぜいの若い命知らずの武士たちにいいふくめ、八方でらんぼうをはたらかせ、幕府をいやがらせることばかりやっていました。

今、切支丹牢の塀外に近づいた、この三人づれもまた、益満の内命を受けて、この切支丹牢にたいして、なにかおだやかならぬくわだてをいだいてやってきたらしい。

「チェッ、おそろしく厳重な忍びがえしを新調したものだな。こいつはちょっと、忍びこむのがやっかいだ」

「こんな地獄のようなところへ、勤王の志士たちをおしこめておくなど、まったくにくむべき幕府のやり方だ」

「裏手の方へまわってみよう。うまいはいり場所が見つかるかもしれんぞ。……オヤ、諸君、あれはなんだ？　……」

一人が指さしたのは、ほんのわずか前に、塀をこして牢内へとびこんだ珠三郎が、残していった例の管ばしごでした。

「ウム、はしごだな！　さてはわれわれより先へ、忍びこんだ者があるぜ」

「かもしれん。だが、このはしごは天の与えだ。こいつで、われわれもはいろうじゃごわせんか」

「よか。では、おいどんが先頭するぞ」

命知らずとむこうみずでは、けっして人におくれをとらぬ薩摩武士です。一人がいきなり、きゃしゃな管ばしごをふんで、のぼりはじめました。

「こいつは見かけよりじょうぶじゃ、諸君もこい」

てっぺんまで登りつめたその武士は、明るい月光の下をもはばからないで、大小をかかえるようにすると、いきなり、塀の内側めがけて、ドシンと大きな音を立ててとびおりました。つづいてはしごのてっぺんにあらわれたもう一人は、

「油どくりを受けとってくれんか」

「よか、よか」

一升どくりを、刀の下げ緒でしばってつりさげておいて、これもまた、不器用に大きな地ひびきを立ててとびこむ。牢番にさとられるのをおそれるようすもない、まるでむちゃくちゃなこの

連中。

ふしぎな囚人

心があせるので、つい塀外へおきざりにしてきた管ばしごが、こんなむてっぽうな連中のお役にたってることは夢にも知らぬ珠三郎は、たくみに木立のかげをつたって、いちばん手近な牢のすぐ近くまで、忍びよることができました。

牢には燈火一つともされていないが、明るい月影が軒からななめに牢格子へさしています。だが、そこまでゆく途中は、あいにくと木かげのないしばふが十四、五メートルもある。珠三郎は、さすがにドキドキする胸をおさえて、そっとあたりを見まわしました。

あまり明るい月夜なので、まさかこんな晩忍びこむような大胆者もあるまいと、牢役人どももゆだんしていたか、いいあんばいに見はりもやってこないようす。珠三郎は思いきって、木かげをとび出すと、しばふの上を飛鳥のようにかけぬけて、牢格子にピッタリと身をよせました。格子のすきまからのぞきこんだその一間には、冷たい板じきの上にむしろをひろげて、二十五、六と思われる囚人が一人眠っていました。

「ああ、きのどくだナ。あの人も勤王の志士なんだろう。だが、お父上は、あんなに若いはずはない。隣をのぞいてみよう」

珠三郎は、ソッとつぎの牢格子へ移りました。

「オヤ、からっぽだナ。イヤ、あの暗いすみっこのほうに、だれだかいるようだぞ」

月光のとどかぬ奥の方の暗いすみに、なんだか黒い人影が見える。よく見ると、その人は起きてすわってるらしい。だが、牢格子の外の珠三郎に気がついたかつかないのか、石のようにだまりこくっているのでした。珠三郎は、

「モシ、牢の中のおかた、モシ」

声をひそめて呼んでみました。

「……」

囚人は身動きさえしたようすはない。

「モシ、この牢屋のどこかに、山鹿士行という人が、とらわれているかどうか、知っていませんか？」

すると、石像のようだったその人が、かすかに身動きしたけはいがしました。

「だれじゃ。そこへきて、山鹿の名を口にするのは、だれじゃ？」

それは、地獄の底からひびいてくる亡者の声のように、ひどくおとろえて力ない声音でした。けれども、とたんに珠三郎の胸が、早がねをつくように、はげしく高鳴りをはじめます。

「わたしは珠三郎です。もしや、あなたはお父上……山鹿士行様ではありませんかッ」

「珠三郎？　聞いたことのない名まえじゃな。そなたは新規にきた牢番か？　どうやら、そなたはまだ、子どものようじゃな」

つぶやくように、半分ひとりごとのようにいいます。ああ、十三年のいたましい牢屋ぐらしの

ために、わが子の名さえ忘れはてるほど、からだも心もおとろえはてて、ふぬけ同然の廃人になったのではあるまいか？　それとも、父とはまったくべつの人だろうか？　相手がハッキリしてくれないので、珠三郎は泣きだしたくなります。

「もし、後生です。あなたのお名まえを、聞かせてくださいまし。あなたは、山鹿士行とおっしゃるおかたではないんですかッ？」

「山鹿士行……。おお、山鹿……。そういえば、わしはこのあいだ、山鹿流のあいず太鼓の音を聞いたと思ったが、……あれは空耳であったかな」

半分は口の中でつぶやくようにいう。だが、珠三郎はそれを聞いて、とび立つ思いでした。先日、黒頭巾があめ屋にばけて塀外に近づいたとき、うち鳴らした山鹿流の陣太鼓のばちさばきを、それと聞き分ける耳のあるこの囚人こそ、山鹿流の軍学にすぐれた人と思っていい。

珠三郎は牢格子にピッタリくっついて、この囚人のようすを見たいとあせりました。もしかすると、父上かもしれない、という気持ちがいよいよ強くなってくる。珠三郎という名は知らぬといったのも、とつぜん牢格子の外にあらわれたこの若者の正体を不審に思って、わざと空とぼけて見せるのではないだろうか？

「もし、わたしは、父上山鹿士行様にあうために、ようやっと、ここまで忍んできたのです。あなたが山鹿士行様のことをごぞんじなら、後生です。教えてください」

珠三郎は、いっしょうけんめいのばあいでした。胸にいっぱいこみあげてくる、問いたいこと、語りたいことを、いいつづけようとするとき、ガラン、ガラン、ガランと、どこかでけたたましく、鳴子が鳴りひびきました。

「ヤッ、曲者が忍びいったらしいぞッ」

「それ、おのおの、出あいたまえッ」

牢役人の詰め所の方で、ののしりさけぶ声が聞こえる。ああ、いけない。あの無謀な薩摩の連中が、うっかりと、いましめの綱にひっかかったものらしい。

「ヤッ、しまったッ」

珠三郎はギョッとしました。あとから管ばしごを使ってしのびこんだ者があるのは知らないから、てっきり、自分のことがばれたのだと、思いこんだのは、しかたがない。牢屋敷はにわかにものさわがしくなって、ちょうちんの火が右に左にとびちがいはじめました。そのうち、五つ六つのちょうちんは、早くも、この方角さして、かけつけてくるようすです。

第五回　切支丹牢猛火

出火だッ

「ちぇッ、もう一息ってとこだのに……、なさけないなあ……」

珠三郎は歯ぎしりします。病みおとろえたこの人の耳にも「山鹿」という名だの、山鹿流のあいずのばち音などは、なにかしら心をひくようにひびくらしい。きっと山鹿流に縁の深い人、ひょっとしたら、これこそたずねもとめるわが父上、山鹿士行その人ではあるまいか。

だのに、まだ思うことの百分の一も話さないうちに、鳴子の音で牢役人どもがさわぎだしてしまったのです。

「もし、あなたは山鹿士行様ですかッ？　ちがいますかッ？　たったひとことでいいから、ハッキリと聞かせてくださいなッ。早く、早くッ」

牢格子にすがりついて、気をあせる珠三郎の心を、この人はちっともさっしてくれないのか、

あいかわらずの無言です。いや、なにかつぶやいたらしいのだが、聞きとれませんでした。

「エッ？　なに？　なんですッ……」

なにしろ、昼のように明るい月光の中でした。牢格子の前でじだんだふんでいる珠三郎の姿は、早くも見つけ出されてしまいました。

「やッ、曲者はあすこにいるぞ」

「おお一番牢の前だなッ、とりおさえろッ」

もうだめだ！　しかし、ここでつかまったらはりつけものだ。このなぞの囚人に強く心はひかれながらも、珠三郎はあきらめて牢格子の前をはなれると、管ばしごをおいてある方へ逃げだしました。

「それ、曲者を逃がすなッ」

牢役人どもはバラバラと追ってくる。深い木立の奥へ逃げこんだ珠三郎を、みんなで四方八方からとりまいてしまった。そのままジリジリと追いつめられて、いよいよもうだめだ、と思ったとき、

「火事だッ」

「五番牢が出火だッ」

けたたましいさけびとともに、きなくさい風がサッと地をかすめて、五番牢のあたりがパッとまっかになった。おどろいたのは牢役人ども。もうにげまどう珠三郎など問題にしていられなくなった。あわてたかれらは珠三郎をうちすてて、われがちに五番牢さしてかけつけてみますと、

牢の前には燃えあがった火炎を背に、二人の武士が立ちはだかっていて、かけ集まる牢役人どもをにらみながらどなりました。

「こら、不浄役人ども、なにをさわぐ。出火を知らんかッ」

「早く牢の戸をあけて、囚人のときはなしをせんと、みな焼け死んでしまうではないかッ」

もっともらしい口をきく。だが、なにが出火だ？　火をつけたのは自分たちじゃないか。この人をくった武士たちこそ、あとから管ばしごで忍びこんだ、薩摩屋敷のらんぼう者、火つけの専門家だ。も一人はと見ると、どこから持ち出したか大槌をふるって、はっしはっしと牢の錠前をうちくだいては、かたっぱしから囚人たちをひき出しています。

「ヤヤッ、牢破りだッ、破牢だッ」

一番牢の囚人

牢役人どもは、この不敵な牢破りどもをとりおさえようとしましたが、腕前のすぐれた薩摩武士どものあらい太刀風と、見るまに燃えひろがる猛火のいきおいとに、すっかりもてあましてしまいました。一方、こんなことにはなれきってる薩摩の三人組のかけひきは、たくみなものです。一人が敵にあたれば、一人は牢をくだいて囚人たちを助け出し、そのひまに一人はつぎからつぎへと火をつけてまわる。四番牢、三番牢、二番牢さえ火の手がまわりました。

「こら、獄卒ども、なにをグズグズしとる。早く牢の戸をあけて、囚人たちを助けぬかッ」

薩摩武士の一人がまたさけぶ。こうなっては、切支丹牢も猛火の呪いから救う見こみはなくなってしまった。幕府の掟として、牢屋が火事のときは、どんな重罪人でもいったんはときはなして、命を助けることになっていましたので、牢役人どもも今はしかたがないと思ったか、いそいで各牢のとびらをあけました。囚人たちは籠から放たれた鳥のように、外へとび出します。

最後に残った一番牢も、やがては火の手がまわるにきまっているので、囚人たちのときはなしをしようと、二、三人の牢役人がかけつけると、そこの軒下には、この切支丹牢を支配する白川九十郎が、白刃をひっさげ、目をいからせて仁王立ちになっていました。

「おお、ご支配、早くなさらぬと、もうすぐ、これへも火の手がまわりますぞ」

牢役人の一人がそうさけんで、牢格子の方へかけよろうとするのを、白川九十郎は、おそろしい顔をしてにらみつけました。

「ならぬ。この一番牢にかぎり、ただ一人の囚人たりとも、ときはなしは無用だッ」

「えッ、でも、ムザムザ焼き殺しては、あとでもしおとがめが……」

「いうな。掟にそむいたおとがめは、九十郎身をもってひき受ける。よけいなせわをやくまに、早く火つけの曲者どもを討ちとってしまえ」

九十郎はきびしくさけぶ。あおざめた頬に炎の色がうつって、ものすごい形相だ。一人残らず焼き殺すとも、ときはなしはできぬという。よほどこの一番牢の囚人たちは、幕府にとって、重大なものらしい。

白川九十郎にしかりつけられて、牢役人どもはかけ去った。猛火はもう切支丹牢の棟々をすっ

かり包んでしまいました。こうなっては、なんとも手がつけられません。

煙にまかれる

雨のような火の粉が、一番牢の屋根にふりそそぐと、たちまち燃えついて、板びさしのあたりから真紅の炎がメラメラと舌をはく。だが、白川九十郎は、その場につっ立ったまま、眉毛一すじ動かしません。おそらくは、燃えおちるこの牢屋とともに、わが身もここで焼け死ぬる覚悟と見えました。

と、この場へ、鉄砲玉のようにかけつけた少年がありました。さっき木立の奥へ逃げこんだ珠三郎だ！　かれは白川の姿など目にもはいらぬようすで、なぞの囚人のいる牢格子のそばへかけよると、どこかでひろってきた石っころで、力まかせに、錠前をたたきはじめる。

「狼藉者ッ、なにをするッ」

うしろへ近づいた白川九十郎が、珠三郎のえりがみをつかんで、ひきずりのけました。

「アッ、じゃまするなッ」

珠三郎はまたすぐ牢格子へしがみつく。と、こらえかねた白川は、おどりかかって珠三郎をひきたおして、ひざの下に組みしいてしまいました。

「おのれ、不敵者、かくごせい」

右手の白刃をとりなおすと、その切っ先をグッと珠三郎の胸もとへさしつける。そこへ、とび

こんできた薩摩武士の一人が、

「鬼め、牢屋の鍵をわたせッ」

「なにをッ」

ふりむく九十郎のまっこうへ、サッとひらめく白刃。

「ウウウムッ」

ガッと骨のくだける音がして、むざん、白川九十郎は、血煙とともにたおれる。珠三郎はとび起きると、またも牢格子にかけよって、石をひろいあげてガンガンとたたく。と、さしもの錠もくだけてガチンとはずれ落ちました。

「しめたッ」

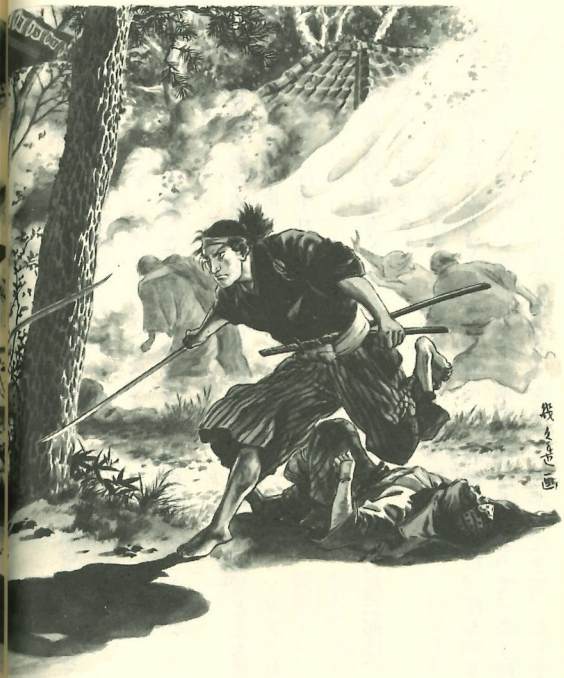
もうもうたる煙の中をくぐって、牢格子の内へとびこんだ珠三郎は、手さぐりに、目ざすなぞの囚人のそばへ近づきました。

「さあ、早く外へ、逃げましょうッ……」

だが、この人はこのときもなお、神経のない石像のように、ぼんやりとすわったままでした。煙にむせながら珠三郎は、この人の枯れ木のような手をとって、ひき起こそうとあせります。だが、このとき、ドッと濃い煙がうずをまいてながれてきて、たちまち二人を包んでしまいました。

「アッ、アッ、苦しい……ム……」

むざん！　珠三郎は煙にまかれて、なぞの囚人と折りかさなってたおれてしまった。



「オイ、この牢の人、早う立ちのかんと、焼け死んでしまうぞ」
牢格子の外から、薩摩武士らしい声が聞こえた。が、牢内がしんとして答えがないので、
「オヤ、だれもいないのかな？　さっき子どもがとびこんだのを見たように思ったがな？」
ふしぎげにつぶやくところへ、また一人かけてきて、
「オイ、逃げろ。新手がおおぜいおしよせてきたぞ」
ことばせわしくいいました。切支丹牢の火の手を見つけた町々の火の見やぐらの半鐘は、さっきからわれるばかりに打ち鳴らされ、火消しや役人どもは八方から、茗荷谷さしてかけつける最中なので、牢のまわりの高塀の上からも、おびただしくならんだ高張りちょうちんの火が見えます。
「通用門があけはなしだ。その方はまだ手うすだから、切り破って逃げろ」
ことになれた薩摩の三人組、ちゃんと逃げ道の見当までつけていた。だが、かれらがいそいで立ち去ったあとは、今にも燃え落ちようとする牢内に、珠三郎とあのなぞの囚人とが、煙にまかれたままおきざりにされたことを、知ってる者は一人もなくなりました。

火消しと赤鬼

月夜の空をこがして、みだれとぶまっかな火の粉。けたたましく鳴りつづける半鐘の音。龍吐水は死にものぐるいに水をはき、火消しのまといは熱風にあおられながら林のように立ちならぶ。火事装束の上役人や火消しどもは、猛火をくぐってたちはたらく。この勇ましい光景が、三どの飯よりすきだという、江戸名物のやじうまがまた、黒山のように集まってきて、ガヤガヤとおおさわぎです。
「火つけは、例の四国町の薩摩っぽだってな」
「ああ、すごい豪傑どもが、二、三十人、ダンビラをふりまわして、牢役人相手に切りあいながら、今裏門から逃げだしていったとさ」
「その連中の手引きをしたのは、なんでも、十三、四の子どもだというぜ」
「あきれたねえ。なんだってまた、そんな子どもが、火つけの手引きなどしたんだろうな？」
ワイワイいってるやじうまの間を、赤鬼の弥太五郎が、するどい目を光らせ、地獄耳をすまして、いそがしくとびまわっていました。
（ハテナ、薩摩っぽの手引きをした子どもがいたって。どんなやつだろう？　そいつをつかまえてみたら……）
だんだん裏手の方へまわった赤鬼は、ふと、そこの高塀に立てかけてある、きゃしゃなはしごを見つけて、そのそばへかけよりました。
「やッ、こいつは軽業の管ばしご……。さては手引きの子どもってのは、珠三郎だなッ……。こいつは、いいものが手にはいったぞッ」
ああ、わるい男に、わるい証拠をおさえられた。
珠三郎なら、牢へ忍びこんだわけもわかるぞ、と、赤鬼は心にうなずきます。と、また一人、

いせいのいい火消しの兄いがこの場へかけつけてきました。「め組」の印のはいった刺子半纏、火よけ頭巾をスッポリかぶったこの兄いは、赤鬼がひねくりまわしている管ばしごを一目見ると、ギックリしたようすで、

「しまったッ。ここにこのはしごがあるうえは、やっぱり珠三郎が……。ムッ、とんだことをしてくれたなッ……」

足ずりしないばかりにつぶやいて、ほのおのうずまく高塀のかなたを見つめて立つ。その姿を、食い入るようににらんでいた赤鬼は、なに思ったか管ばしごをはなして、猛然とその火消しにとびかかってゆきました。

「ヤイッ、おのれは、黒……」

「エエ、どけッ、ばかやろうッ」

兄いはまきじたでののしり返すと、組みつかれた腰を大きくひねる。と、赤鬼のからだはたちまち宙に浮いて、グウンと輪をえがいてケシとぶ。ズシン、四、五メートルかなたへ、犬ころのように投げとばされた赤鬼が、むちゅうで起きあがったときには、身の軽い火消しの姿は、管ばしごを一息にかけあがって、高塀のてっぺんにつっ立っていました。

「待ちあがれッ、黒頭巾ッ……」

赤鬼は管ばしごめがけてとびついたが、手にさわったのは高塀の白壁、管ばしごはそのとき早く、サッと高塀の上にひきあげられました。

「しまったッ、また逃がしたかッ」

赤鬼が、にえ湯を飲まされたような顔で、うらめしげに高塀をにらんだときには、もう、あのはしっこい火消しの兄いの姿も、管ばしごも、高塀の向こうへ、消えてしまったあとの祭りです。

猛火をくぐって

「珠三郎やーい、珠三郎はどこだッ。珠三郎ッ。珠三郎はいないかッ」

五番牢、四番牢の焼けあとのあたりから、今も燃えつづけている三番牢や二番牢の軒下を、声をかぎりに、珠三郎の名を呼びながらかけまわる火消しの兄いのものくるほしい姿は、たちまちに、上役人や火消したちに見とがめられてしまいました。

「ア、これ、おまえは、なにをいたしている？」

火事装束でみなをさしずしていた、真柴という同心が、あやしんでひきとめようとするのを、火消しの兄いは無言でふりはらって、一番牢の方へかけてゆきます。

「はてな、きゃつは気ちがいか？」

あきれて見送っているところへ、赤鬼の弥太五郎が、血相かえてかけつけました。

「おお、真柴様ッ、黒頭巾は、どっちへゆきましたッ？」

「なに？　黒頭巾がどうしたと？」

「へい、黒頭巾め、め組の火消しにばけて、たった今、あの高塀を乗りこえて、こっちの方へ」

「なにッ、め組の？　……アッ、では今の男が黒頭巾だッ。きゃつは一番牢のほうへいったぞッ」

「よしッ」

赤鬼は、火の粉の雨をくぐってかけだした。真柴同心も、黒頭巾があらわれたと聞くと、

「ソレ、弥太に加勢して、黒頭巾をめしとれッ」

十手をふって下知する。いきごんだ配下の手先たちや牢役人どもも、一番牢へかけつけました。

このとき、一番牢は燃えさかる最中でした。いつ、棟が焼けおちるかもしれないので、先にかけつけた赤鬼さえ、近づきかねて立ちすくんでいたが、ふと、うずまく猛火の中に、生き不動のように、め組の火消しの兄い、すなわち黒頭巾がつっ立っている姿を見つけて、こおどりしました。

「おのれッ、今度こそは逃がさぬぞッ」

防火のために運んであった手桶の水を二、三杯、ザブリと頭からあびた赤鬼は、まつげさえこげる熱いほのおと、黒煙とのただ中へ、いきおいこんでとびこみました。

黒頭巾はちょうどそのとき、床の上にたおれていた珠三郎をさぐりあてたのでした。煙であかぬ目をむりに開いて、それをたしかめると、

「アッ、珠三郎だッ……」

狂喜してさけびながら、グッとだきおこしたとたんに、珠三郎は、うわごとのようにいって手

さぐりしました。

「お父上、早く逃げましょう……」

「なに、お父上ッ？」

黒頭巾はギクッとしたようす。いそいであたりをさぐると、また一人のからだに手がさわった。が、煙に目を痛められて、その人の顔を見定めることもできない。けれども黒頭巾はためらわなかった。珠三郎を左にかかえ、その人を右脇にいだいて力強く立ちあがる。そのとたんに、

「黒頭巾、捕ったッ」

うしろから、ムズと組みついたのは、死にものぐるいの目あかし、赤鬼の弥太五郎です。

「アアッ、じゃまするなッ」

ふりはなそうとしたがいけない。両脇に一人ずつかかえて、たださえ働きにくいところを、江戸一番といわれる捕り物の名人赤鬼に、こうまで十分に組みつかれたのですから、さすがの快傑も、日ごろのあの胸のすくすご業を、今はほどこすべきすべもありません。

焼けおちた棟木

「どうだ、うぬッ、とうとう捕ったぞッ」

なかば煙にむせながらも、勝ちほこった赤鬼はさけぶ。かさなるうらみに、復讐の鬼となったかれは、たとえこのまま、黒頭巾もろとも焼け死ぬとも、組みついたこの腕はこんりんざい放す

まいと思い定めています。ああ、一度ねらった捕り物は、かならず逃がしたことのないのをほこる赤鬼は、ここにとうとう、めざす黒頭巾をつかまえることができたのだ。

だが、これほどの窮地におちいっても、黒頭巾は、あきらめということば、敗北という文字のあるのを知らぬ者のように、とりみだしたさまもない。

「なんのッ、おのれッ」

両脇に二人をいだいたうえに、ひっしで組みつく赤鬼までをうしろにひきずった黒頭巾、金剛力を出して、じり、じり、じり、牢格子のきわまでゆるぎ出たのは、まさしく人間業とも思えません。

牢屋の外では、手ぐすねひいて待ちかまえた、真柴同心をはじめ配下の手先ども、さすがにこの黒頭巾の鬼神をしのぐ働きに見とれて息をのむとき、

「ワッ、棟が焼けおちるぞッ」

と、さけぶ者がある。とたんに、ものすごい音を立てて、火炎につつまれた梁や棟木が、ドドッとくずれおちてきました。パッと舞い散る火の粉。人々は面をそむけてとびのいたが、ふりかえって見ると、焼けおちた燃え木の下じきにでもなったか、黒頭巾や赤鬼たちの姿はもうありませんでした。

「おお、今のでやられたらしいぞ」

「むごいことをしたなッ」

生きながら猛火に焼かれる四人の姿を心にえがいて、ゾッとして顔見あわせる人々の耳に、

「しまったッ、黒頭巾が逃げたッ。早く、早くきてくれッ……」
思いもよらぬ赤鬼の声が、燃え木の山のむこう側から聞こえてきました。
「アッ、赤鬼が呼んでるぞッ」
「それ、行ってみろッ」
真柴同心をまっさきに、みんながドヤドヤと焼けあとをよけてかけつけると、そこの地べたに、たおれたまま、起きあがろうともがいている、まっ黒こげの異様な坊主がいました。近づいた人々の足音を聞くと、そのばけ物が、
「うぬッ、黒頭巾めをまた逃がしたッ」
あ、まぎれもない赤鬼の声だ。髪は焼けちぢれ、顔は煙にすすけて、黒鬼になっていた。
「おお、弥太、黒頭巾はどっちへ逃げた？」
「真柴様かッ、残念ですッ、あっしは目が……」
煙にまかれて、目があいていられないために、黒頭巾のゆくえを見うしなったというらしい。
「オイ、だれか早く、弥太を医者へ運んでやれ。ひどい火傷をしてるようすだ。ほかの者は、手分けしてそのへんをさがしてみろ。黒頭巾だって二人も人をかかえているのだ。遠く逃げるはずはない。きっと、どこか、ものかげにひそんでいるぞ」
同心の真柴は、ぬけめなく一同にさしずをあたえました。

黒頭巾と珠三郎

黒白もわかぬ暗黒世界です。しんと静まりかえって、物音さえ聞こえない。草木も眠るという夜中か？　いやいや今夜はお月夜でした。地上の夜なら、これほど暗いはずはない。これほど静かなはずもない。では、ここは、死の世界ではありますまいか？
いや、地上の世界ではないが、むろん死の世界でもない。いつ、だれの手になったか知れぬ地下道の内部です。もっとハッキリいうならば、今なお燃え残りが煙をあげているあの切支丹牢の裏庭の、古井戸の底からななめに地の底へほりさげられた、古い抜け穴の中でした。
このやみの中で、シュッと小さな光がひらめいた。摺り火（マッチ）というめずらしい西洋つけ木で、だれかが火縄へ火をともしたのです。が、その光でよく見ると、それは、火消し装束を着た黒頭巾でした。かれは、抜け穴の壁からしたたりおちる清水をてのひらに受けては、しきりに両眼を洗っていました。
「ああ、やっと目があけられる。ひどいめにあった」
つぶやきながら、黒頭巾は火縄をとりあげました。そのかすかな火光が照らし出したのは、すぐそばの地べたに横たわっている、二人の人間の姿でした。おお、その二人こそ、黒頭巾が命がけで、猛火のうちから救い出し、古井戸の抜け穴へとびこんで、やっとここまでつれこんだ、珠三郎と、なぞの囚人だったのです。

黒頭巾は、火縄の火を珠三郎の顔の近くにさしよせ、のぞきこむようにしながら、片手をソッと胸もとへさし入れました。

「ウム、だいじょうぶだぞ。気を失っただけだ……」

つぶやく声に喜びがみちていました。黒頭巾は今度は火縄の火を、珠三郎とならんで寝かしてある、あのなぞの囚人のやせおとろえた青白い顔の上に移しました。

「あの子は、この人を『お父上』だとばかり思いこんでるらしいが、そんなはずは……。おお、やっぱりあの子の思いちがいだ。見るかげもなくおとろえはてて、相好も変わってはいるが、この人は山鹿門下の高弟の一人で、たしか長州の大村挽斎殿らしい。大村益二郎殿の兄者人で、すぐれた兵法家だと聞いていたが……。おお、もうだめだ。すっかり息がたえていられる。おきのどくな最期だったなあ……」

黒頭巾はしみじみとそういって、また両目をおさえました。長い牢屋の苦しみのあげく、むざんに世をおえたこの人の最期をとむらう涙を、ソッとおしぬぐった黒頭巾は、今度は珠三郎の正体のないからだを、膝の上にだきあげると、情にせまった声音で、

「この子が正気づいてから、これが人ちがいだったと知ったなら、かわいそうにさぞガッカリするだろうな。……だが、挽斎殿が死んだとあれば、かえって、人ちがいだったほうがしあわせか。……どれ、珠三郎を良伯医者のところへつれていって、手あてをたのもう」

グッタリとなった珠三郎を、しっかりと胸のあたりにだきしめたまま立ちあがった黒頭巾は、大村挽斎のむくろに目礼すると、かすかな火縄の火に足もとを照らしながら、うるしのような地下の抜け穴を、奥へ奥へとたどってゆきます。

腰元みどり

初夏の若葉かおる、番町の静かな昼です。八千石の大旗本、浪人目付青江下野の、大名屋敷におとらぬりっぱな邸内、広い庭にのぞんだ奥座敷の、障子の内でやさしい声が聞こえました。

「みどりや、みどりはいぬかえ？」

「ハイ、ただいま」

縁がわづたいに、納戸の方から姿をあらわした美しい腰元。よく見ると、それは珠三郎の姉の三葉でした。三葉はこの邸では、みどりと呼ばれているのです。

「お召しあそばしましたか？」

「みどり、双六を持ってきてください」

「ハイ、かしこまりました」

やがて、三葉は重い双六盤をかかえてくると、縁がわにそれをおいて、しとやかに障子をあけました。部屋の内では、気高く美しい奥方が、ほほえみながら、

「みどり、双六の相手をしておくれね」

「ハイ、ふつつかでございますけれど」

三葉も奥方のやさしさに、うれしげにそういいました。二人の間に双六盤がおかれ、馬がつま

れると、奥方は賽のはいった竹筒をとりあげます。腰元たちも多いのに、奥方は、新参のみどりがよほどお気にめしたようすです。

「みどりや、表座敷はご来客かえ？」

「ハイ」

「さ、今度はそなたの番ですよ」

やさしい奥方、縁がわにはのどかな日ざし、庭では小鳥たちもさえずっている。思いがけぬ平和な、しあわせな初奉公でした。三葉は振り筒を受けとりながら、ふと、ただ一人あとにのこしてきた、最愛の弟珠三郎のことを思い出しました。

（わたしは、こわいお邸だと思ったここで、こんなしあわせなご奉公をしてるのに、珠ちゃんは一人で、どんなにさびしがっていることだろう）

かわいそうな三葉、じぶんが奉公にあがったすぐあとで起こった、あの切支丹牢の大事件は、夢にも知りません。まして、今、表の客間で、青江下野と話している客が、真柴という同心で、昨夜の切支丹牢の一件の、くわしい報告をしにきてるのだとは、なおさら気がつきません。

その客も、やがて帰っていったとみえて、ふところ手をした青江下野が、庭づたいに、奥方の部屋をブラリとおとずれました。

「奥、双六かな？」

「おや、殿様、いつのまに……」

奥方も三葉もいそいで立ち迎えようとするので、青江下野は笑いながらとめました。

「いや、そのままでつづけなさい。さあ、わしが審判役をつとめよう。今度は、みどりの番だな」

一にらみで、敵も味方もちぢみあがる、ほのおのような青江下野も、家庭にあっては、春風のようにやさしい主ぶり。双六盤のそばへ三葉がすすめた厚いざぶとんに、むぞうさにすわると、

「みどり、つとめはつらいか？　宿の親たちが恋しくなりはしないかな？　ハッハッ」

「殿様、みどりには両親がございませぬそうで。……ふびんな者ではございませぬか」

奥方が、三葉にかわってそういうと、

「おお、そうであったか。では、奥、母親代わりに、よく目をかけてつかわすがよい」

三葉は、ありがたさに思わず頭をさげました。おそろしいお方だとばかり思っていた殿様が、奥方にもおとらぬ、なさけ深いお方だったとは……。

「さあ、双六をつづけるがいい。ちかごろ、役むきのことといえば、さつばつな話ばかりでな。たまには双六など見てのんびりといたしたいよ。ハッハッ。今も八丁堀の同心がきてな、ゆうべ、切支丹牢へつけ火をした曲者があった、などと、いや、気のつまる話ばかり持ちこんでまいるわ」

きょうは、なんというごきげんだろう。今までただ一どだって、役むきの話を奥方の前でなど、したことのない青江下野、どうした風のふきまわしなのでしょう？　だが、なにげなくいった「切支丹牢のつけ火」ということばが、三葉の耳には、おそろしい雷ほどにひびきました。

「ところがな、奥。火つけの仲間には、まだおさない子どもが一人まじっていて、なんでも、牢

内にとらわれている父親を助けたいために、仲間を手引きして、牢やぶりをくわだてたと申すのだが、その子どもは逃げおくれて、焼け死んでしまったそうだ。もっとも生きていて、おしおきを受けるよりは、そのほうが結句、しあわせかもしれぬがな」

聞いてるうちに、三葉のほおから、血の気が消えてゆきました。胸は大きな岩で、ギュッギュッとおしつぶされるように痛くなって、目がくらみそうです。

（いけないッ、ここでとりみだして、あやしまれては……。しかし、ああッ、もしや珠ちゃんが……）

おそろしい思い、悲しい思いが、一時に胸にこみあげてきて、あわれな三葉は、座にたえられなくなりました。けれども、あやしまれたらなにもかもおしまいだと、けなげに思い返すと、ひっしで、むなさわぎをこらえようとします。

その三葉のようすを、見ぬふりをしてチラチラと見る、青江下野の、その目つきが気にかかるではありませんか。

第六回　天井裏騒動

赤鬼が白鬼に

青江下野は、三葉が紙のように青ざめながら、とりみだすまいとひっしでこらえるけなげなようすを、ジッと見ていましたが、ことばはやさしく、

「みどり、どうした？　ひどく顔色がよくないようだが……」

すると、わけを知らぬ奥方もおどろいて、

「ほんにみどり、どうおしなの？　気分でもわるくなったのではないかえ？」

「い、いえ……」

三葉は、きえいるような声で答えました。

「時候あたりでもしたとみえる。奥、さげて休ませてやりなさい」

「そういたしましょう。これ、浅茅はいませぬか？」

老女の浅茅が、次の間へ手をつかえます。
「浅茅、みどりが急病のようすです。部屋へ寝かせて、医者にみせておやり」
「かしこまりました。……これ、みどりさん、どうしました。御前ですよ。心をたしかに持たねばなりませぬぞ」
「ハ、ハイ、殿様、奥方様、お許しあそばして」
三葉が両手をつかえてわびいるのを、
「辞儀はいらぬぞ。早くさがって養生したがいい。浅茅、いたわってやれ」
青江下野も、やさしく口をそえる。
三葉が浅茅につれられてさがると、入れちがいに庭の方から、用人の原口十太夫が出てきて、
「殿様、ただいま、弥太五郎がまいりまして、至急お目通りをねがっておりまするが」
「なに、弥太がまいった？　先刻の真柴の話では、かやつは大火傷したということだったが……」
「御意のとおり、いやもう、顔から頭から、まっ白に布でくるんで、とんと、白鬼とでも申したいようなかっこうでござりますわい」
「ハハハ、そうか。よし、居間へよこせ」
「はッ」
青江下野が、また庭づたいに居間へもどると、まもなくしきいぎわにかしこまったのは、十太夫がじょうだんに白鬼といったとおり、頭も顔もまっ白な布で包んで、膏薬のにおいをプンプンさせた、赤鬼の弥太五郎の姿でした。

「弥太、どうしたな？　ハハハ、やっぱり黒頭巾は、そちの手にあわぬかのう？」
青江下野、めずらしくきげんがいい。赤鬼はおそれいって、
「もう一息のところでございました。頭の上から棟木が燃えおちさえしなければと、残念でなりません」
「たった今、真柴がきて、その話は聞いた。あの男は、そちがよくあれまでやったと、ほめていたぞ。ハハハ、しくじってもほめ手もあるから、火傷くらいはがまんしろ」
「おそれいりました。で、真柴様は、つけ火の手引きをした子どものことも、おっしゃっていましたか？」
「ウム、弥太、その少年は山鹿のせがれだろうな」
「あッ、殿様はどうしてそれを……」
「切支丹牢へ大胆にしのびこむやつ、ほかにあるか」
「なるほど。いや、おそれいりました。あっしなどは、昨夜火事場で、証拠を手に入れるまでは、手引きの子どもがだれだなんて、見当もつかねえでおりましたが」

絵図面の木くず

「フム、証拠とは、どんな証拠だ？」
「へい、切支丹牢の裏塀に、しのびこみに使ったはしごが残っておりましたんで。そのはしごっ

てのが、軽業師の使う管ばしご、……見おぼえのある珠三郎のものでございました」
「フウム、では、やっぱり推量どおり、珠三郎にちがいないが、その珠三郎を、黒頭巾にさらわせたのは、まずいことをしてしまったな」
青江下野はグッと眉をよせました。赤鬼はひざを進めて、
「あっしも、火つけの手引きが珠三郎だとわかりましたんで、そいつはとり逃がしたが、その代わりに、姉の三葉をつかまえてやろうと、すぐにゆうべのうちに三太を鳥越の天文長屋へやりました」
「フム、フム」
青江下野は、うなずきながら聞きいるようす。
「すると、三葉の姿も長屋に見えねえんで、だんだんしらべてみますと、殿様、三葉めは、大家のばばの口ききで、さる思いがけないお邸へ、名まえをかえて腰元奉公に住みこんでいましたそうで……」
赤鬼がそういいながら、青江下野の顔を、意味ありげにジロリと見るのを、青江下野はあいかわらず上きげんでニコニコして、
「ハッハッ、弥太、そちは三葉の奉公先をわしにおしえに、わざわざきたのか？」
「ヘッ、では、殿様はもう……。こいつは大しくじりだった……」
赤鬼は、白布が染まるほど赤面しました。長屋じゅうをしらべて意外な三葉の奉公先を知り、青江下野にこの大発見を報告しようといそいできてみれば、さすがは青江下野、とっくに腰元み

どりの素性を見ぬいていたばかりか、三葉がどんな目的をいだいて、じぶんの邸へ住みこんだかということまで、さとっているようすでした。
（じぶんからわがふところへとびこんできた三葉、そ知らぬ顔でこの三葉をシッカリと手のうちににぎっていれば、やがては「七つの抜け穴の図解」を持っている珠三郎も、自然におびきよせることができる）と、腹の中のおそろしい思案は人に語らず、奥方にさえ、みどりの素性をさとった気ぶりさえ見せぬ青江下野でした。
「弥太、おとりはなるべくソッとしておかぬと、かんじんの獲物の鳥がよりつかぬぞ」
「へい、おそれいりました」
赤鬼は頭をかく。するとこのとき、青江下野は、かたわらの手文庫から、折りたたんだ一葉の絵図面をとり出して、ひざの前へひろげながら、
「小鳥といえば、例の親鳥、な。もし切支丹牢へおしこめておいたら、昨夜のさわぎで、今ごろはそれこそ籠をとび出して、どこの空へ逃げ去ったかしれない。いや、このようすだと、あの秘密牢でもじゅうぶん安心はできぬ。そこで、このさい、老中どもにもそういって、思いきって、ここへ移そうかと思っているのだがな」
青江下野は、考えこむような目つきをして、やがて、赤鬼に、
「弥太、もっとこっちへきてよく見ろ。ここへあの親鳥を、人知れず幽閉しておけば、もうだれも手が出せなくなるぞ。道中送りはいずれそちの役目だから、よく見ておけ」
「な、なるほど、ここならめったに……」

赤鬼も、その絵図面をのぞきこむ。と、ふいに、青江下野の顔色がサッとかわった。彼は絵図面上の一点を、焼きつくようなまなざしでキッとにらんだが、声をひそめて、

「弥太、これを見ろ。これはたしかに、天井から落ちてきた木くずだ。ムッ、さては天井板にあなをあけた大ねずみがいるなッ……」

とささやくと、片ひざ立てて、キッと天井を見あげた青江下野、その右手には、いつのまにとり出したか、キラリと光る最新式の短銃がにぎりしめられていました。

消えた曲者

「あッ、殿様、どうなさいました？」

赤鬼はびっくりして目をみはる。が、青江下野はそれに答えないで、短銃をピタリと天井に向けると、いきなり火ぶたを切りました。

ゴオッ、ビリビリッと、ふすまや障子をふるわせて、ひびきわたったのはものすごい銃声！

発！　やがて硝煙がうすれると、天井板の美しい木目を、むざんに打ちつらぬいた弾痕のやぶれ穴から、アッ、雨もりのあとのように、見るまににじみ出るまっかな血しお！　青江下野はそれをにらんで、青白い頬に冷たい笑いを浮かべました。

「ハハハ、大ねずみめ、思い知ったか……」

主人の居間の、ただならぬ銃声におどろいて、用人の原口十太夫をはじめ、家来どもや、日ごろ邸内に居候している、樋口、平山、森田などという血気の浪士どもまで、おっとり刀でかけつける。

「殿、なにごとが出来いたしましたッ？」

青江下野は、まだ糸のような白煙をはいている短銃で、天井の血のしずくをさしました。

「天井裏に曲者がひそんでいたのだ。さても大胆不敵なやつ。この青江下野の邸の天井にしのぶほどの曲者は、のう弥太、ほかにはないぞ」

「エッ、では殿様、黒頭巾が……」

赤鬼は、おどろき顔でたずねました。

「かやつにちがいない。今の一発でたぶん息の根はとめたはずだ。だれか、天井裏をしらべてみよ」

青江下野は、いよいよ上きげんでした。

「なんとおおせられます。黒頭巾めが……」

十太夫も居候の浪士どもも、あきれかえって目をまるくする中に、赤鬼ばかりは、こおどりし

て、

「では、あっしが一つ、見とどけてきましょうッ」

うらみかさなる黒頭巾の最期を見とどけようと、やがて持ち出されたはしごを壁に立てかけ、手燭片手に、天井板を一枚はずして、まっ暗な天井裏へ首をつき出しました。ほこりやくもの巣だらけの梁や棟木が、ガッシリ組みあっている天井裏の、見なれぬ景色は、手燭の明かりで照らし出されたが、血しおにそまってたおれているはずの曲者の姿は、どんなに目を皿のようにして見まわしても、どこにだって見あたりません。

ああ、いつかの駒形堂のように、またしても、煙のごとくに消えうせたものだろうか？

「弥太、黒頭巾めは死んでいるか？」

待ちきれないで、青江下野が下から聞く。

「殿様、奇態です。どこにも曲者の姿あ見あたりませんぜ」

「ばかな。そのおびただしい血のあとはなんだ？　よくしらべてみろ」

「へい」

赤鬼は、とうとう天井裏へはいあがった。下では青江下野がさすがにぬけめなく、家来や居候浪士どもにむかって、ふきげんな声で命じます。

「そちたちは手わけして、邸の四方や出入口を見はっていろ。あやしいやつを見かけたら、とりおさえてしまえ。早くゆけッ」

「ハッ」

みなは勢いこんでかけさった。たちまちに、邸の四方や、表裏の門口は、ありのはいでるすきもない、厳重な見張りの網がはられてしまった。

天井裏の怪

天井裏へあがった赤鬼は、弾のやぶれ穴のところまではいよってみました。そこには生々しい血が、かなりどっさりたまっていました。だのに、子ねずみの屍骸一つだってころがってはいない。

「ハテナ？」

赤鬼は手燭のあかりで、なおもあたりを見まわしていたが、ニヤリとすごく笑いました。

「フフン、このとおり、ちゃんと血のしたたりがついているぞ。さては手傷のからだをひきずって、逃げようとしているなッ。フン、この血のあとをつけていったら、苦もなくみつかるだろう。おのれ黒頭巾め、今度こそは……」

赤鬼の心は、復讐の喜びにもえあがりました。今こそ、重傷に弱って手むかう力のない黒頭巾めを、思いのままにとっちめることができるんだ。赤鬼は、点々としたたりつづく血のあとを道しるべに、暗いほこりっぽい天井裏を、どこまでもはってゆく。うっかりすれば頭を打ちつけそうな太い梁をいくつかくぐって、間数にして十間ばかりもきたと思うころ、あ、血のあとがフッツリととだえてしまった。

「ハテナ、どうしたろう」

赤鬼はきゅうくつな梁の間へ、わずかに身を起こしながら、手燭をあげて、あたりを見まわそうとすると、風もないのにフッと火が消えました。

「ヤッ、おかしいぞ……。ムムムウウムッ」

まっ暗な中から、ヌッとのびてきた腕が、赤鬼ののどにからんだ。さけぼうにも声が出ない。わずかに身をもがいた赤鬼は、やがてグッタリとなってしまった。

わずかなすきまをもれてさしこむ光でよくよく見れば、太い梁の上に寝はらばった黒装束の曲者が、赤鬼の首を片腕にかかえてしめつけていました。しかも、その男もよほどの手傷をおっているらしく、息もきれぎれで、赤鬼がグッタリとなると同時に、しめていた腕をはなしてしまいました。そして、天井裏のほこりの中へころがった赤鬼のそばへ、梁の上からやっとこさはいおりたその男は、やがて、奇妙なことをはじめました。

「ハハハ、赤鬼よくきたな、お主の顔へ巻いた布をもらうぜ」

ひどく力ない、ふるえる手先で、赤鬼の頭を持ちあげてひざにのせると、顔じゅうを包んだ膏薬くさい布を、クルクルとときほどきはじめる。その姿を見ると、目ばかり光った黒覆面。おお、青江下野のするどい眼力が見ぬいたとおり、この手傷になやむ屋根うらの曲者は、まさしく快傑黒頭巾だったのです。

「ム、重い、この頭がひどく重くこたえるぞ。ああ、じれったい。からだの血があんなに失われたので、力がなくなったのだな。なにくそッ……」

黒頭巾は、赤鬼の頭の布をとくだけのことさえ、せい一ぱいらしいおとろえようだ。だが、いったいその白布で、なにをするつもりでしょうか？

このとき、青江下野の居間あたりの天井裏へ、ちょうちんの光があらわれました。おおかた、あまり赤鬼のおとさたがないので、だれかようす見にあがったらしい。黒頭巾はギョッとしました。

「や、こいつはいけない。こんなおとろえたからだで、今見つかったら最後だぞ。よし、逃げられるだけは逃げてみよう」

膏薬くさい白布をたいせつそうにふところへしまった黒頭巾は、暗い天井裏を、またも苦しげにソロソロとはい出しました。ああ、屋敷の四方にきびしく張りまわされた見張りの網を、どうきりぬけてのがれるつもりか？　おそろしい敵のただ中に、重傷をおった黒頭巾の運命こそ、思えばあやういかぎりではありませんか？

呼子笛の奇蹟

すこし前に、老女浅茅につれられて、部屋へさがった三葉は、医者を呼ぼうというのをことわって、じぶんで寝床をのべると、はりつめた精も根もつきはてて、その上にたおれるように横になりました。目をつむっていると、枕が底知れぬ深い深いならくへおちてゆくような気持ちがして、このまま、気が遠くなるのではないかと思いました。

「ああ、珠ちゃんは、ほんとに焼け死んでしまったのかしら？　切支丹牢の父親を救うために忍びこんだ子どもといえば、どう考えても、珠ちゃんに相違ない気がするけれど、もしかしたら、ほかにもおなじような身のうえの子どもがあって……。いえいえ、珠ちゃんにきまってる。ああ、珠ちゃんが、ほんとに死んだのなら、どうしましょう」

重い石の板でしめつけられるように、胸苦しくなった三葉は、思わず、両手で胸をおさえると、フト、手にさわった小さな固いもの。

「あッ、これは、天命堂のおじさまが、黒頭巾の呼子笛だといって、餞別にくだすったのだわ。こんなとき、黒頭巾様を呼び出して、この苦しい胸の内を打ち明けてご相談したら……」

三葉は呼子笛をくちびるにおしあてようとして、すぐ、ハッとしてやめました。

「いけないわ。ここは黒頭巾様のおそろしい敵のお邸だもの、もしほんとうに、呼子笛が黒頭巾様をさそいだして、まんいち、みなさまに見つかろうものなら、それこそ申しわけのないごめいわくを、黒頭巾様にかけねばならないのですもの……」

ああ、あてにもならぬ天命堂のでたらめを、三葉は心から信じていて、呼子笛をふくのを思いとどまりました。が、そのときでした。主人青江下野の居間で、轟然たる一発の銃声が、すさまじくひびきわたったのは！

「まあ、なにかしら？」

ハッとからだを固くしたとたんに、邸内がにわかにさわがしくなりました。やがて物におびえた朋輩の腰元たちが、ふすまの外の廊下を走る足音、話し声。

「まあ敷妙さん、どうしましょうねえ」
「お邸へ、黒頭巾が忍びこんだなんて、ほんとにこわいじゃございませんか」
三葉はびっくりして、寝床の上に起きあがりました。たった今、じぶんがあの呼子笛をくちびるへさしあてたばかりで、もう黒頭巾があらわれた！
「曲者は殿様が、短銃でうちとっておしまいあそばしました。みな、たちさわいでは、おしかりを受けますぞ。静かにおちついていますように……」
老女浅茅が、腰元たちをしずめる声も聞こえる。
「アッ、では黒頭巾様が殿様に短銃で……。まあ、わたしは、とんだことをしてしまいました……」
三葉は、とり返しのつかぬ後悔に、小さな胸がさけるようでした。黒頭巾があらわれたのは、どこまでも呼子笛のせいだとばかり思いこんでいるのです。
「ああッ、わたしが、この呼子笛を、こうしてくちびるへあてたばっかりに……」
三葉は、邸内のさわぎに耳をかたむけながら、じぶんではなにをしているかもわからずに、またとり出した呼子笛をソッとくちびるにさしあてると、思わずかすかなため息をふきこみました。
ピリピリッ、うらめしい呼子笛は、小さな、けれども澄んだ音を立てて鳴りました。すると、このとき、思いもよらぬことが起こりました。
「三葉どの、三葉どの」

夢かうつつか、どこかでじぶんを呼ぶ低い声が、しかし、ハッキリときこえてきました。
「ハイ」
三葉はそう答えて、あたりを見まわした。みどりと呼ばずに、三葉と呼ぶ人はだれでしょう？
「三葉どの、おどろいて声をたててはなりませんぞ。わたしは、黒頭巾だ」
あっ、なんという奇蹟だ！　呼子笛は、とうとう黒頭巾を呼び出した！　三葉のおどろき！　それにもました喜びはどんなだったでしょう？

やさしい黒頭巾

「三葉どの、そなたにたのみたいことがある。その部屋には、ほかの者はいないだろうね？」
「ハイ」
「わたしは、おしいれの天井裏にいるのだ。すこし手傷をおって弱っている。天井裏もまもなく、くまなくさがされるだろう。それまでに、わたしはこの邸の外へぬけ出したいのだ」
三葉はハッと胸をつかれるおもいです。おしいれの、天井裏から聞こえる黒頭巾の声の、なんといういたいたしさでしょう。だが、この邸をぬけ出すといっても、今姿をあらわせば、すぐ見つかってつかまるにきまってる人を、か弱い自分の力で、どうしてぶじに逃がすくふうがありましょう。
「いや、邸を出るくふうは、わたしの胸にある。だが、そなたに手つだってもらわねば……。三

葉どの、わたしは今おしいれの中へおりてゆくから、そなたもこのおしいれの中にはいって、ふすまをしめてくれ」

「ハイ」

三葉はいそいで、おしいれのふすまをあけると、夜具のかさなっている上の段へ、むちゅうではいあがって、いそいでうしろのふすまをしめました。すると、頭の上の天井板が一枚めくれて、まっ黒い姿の人が、足の方からおりてきました。

ああ、快傑黒頭巾です。しかも、いつか切支丹牢の塀外で見たときのような、あの勇気と力にみちあふれた黒頭巾ではなくて、大病人のように、身動きさえも重苦しげな黒頭巾です。三葉は、まぶたの裏が熱くなりました。

「ああ、三葉どの、ここに白い布がある。これで、わたしの目だけ残して、頭と顔とを、グルグルまいてもらいたい」

「ハイ」

三葉は、いわれるままに、膏薬くさい白布で黒頭巾の頭と顔とをすっかりまきはじめました。

「三葉どの、珠三郎どのはぶじだ。焼け死んだなどということばにまどわされて、とりみだしてはなりませんぞ」

黒頭巾は、三葉の耳にささやきました。

「えッ、珠ちゃんが……まあッ……」

布をまく三葉の手先が、はげしい喜びにふるえました。胸をしめつけていた悲しみが、すっかり消えてしまいました。

「あの珠ちゃんは今、どこにいましょうか？」

「あの子は、わたしがあずかっている。あの子のことよりも、三葉どの、そなたは気をつけて奉公なさい。もしまんいち、あやうい運命におちいったときには、えんりょなくその呼子笛をふくがよい。きっと、わたしがとんできて、そなたの力になってあげる」

黒頭巾のことばには、やさしい情愛がこもっていました。三葉はいい知れぬ心強さ、うれしさをおぼえました。すっかり頭の布をまきおえると、黒頭巾は、

「ありがとう。では、わたしはこの胸の傷の手あてをしに、医者へいってくる。三葉どの、さきにおしいれを出て、だれかくるといけないから見はっていてください」

まるで、おそろしい敵のただ中にいる人とも思えぬおちつきぶりです。

「はい。でも、今、出ていらっしったら、もしかだれかに……」

「ハハハ、だいじょうぶだよ」

三葉はいそいでおしいれから外へ出ると、ソッと廊下のようすをうかがって、いそいでもどってくる。

「今、お廊下にも、だれも見えませんけど……」

「よし、では出かけよう」

黒頭巾は、おしいれからはいだしました。見ると、頭と顔をまっ白い布で包んだ白頭巾だ！

力ない足どりで、部屋を出てゆこうとするので、三葉が心配して見送ろうとすると、黒頭巾はや

さしく手をふってこばみました。
「いけない。そなたは知らぬ顔で寝ていなければ。まんいち、かかりあいになってはならぬ」
「ハイ、では……」
三葉は、強く心を残しながら、すなおに居間に残りました。黒頭巾は、よろよろと廊下の壁をつたいながら、勝手の方から、裏口へ出て、裏門の方へゆこうとするとき、あたりを見まわり中の、柔術自慢の森田、一刀流の平山という二人の居候浪士どもに、バッタリと出あってしまいました。

かごに乗って

なんたる不運だ。今すこしというところで……。しかも、この連中には、かつて切支丹牢の塀外で、黒頭巾は顔をあわせて、二人とも手ひどくやっつけたことがある。いわば仇どうしだ。今、一歩で裏門を出ようというところで、この屈強な二人に出あったのは、黒頭巾の運のつきでした！　立って歩くさえやっとの黒頭巾です。
だが、あくまで大胆不敵な黒頭巾は、あえて逃げ出そうとさえしないで、かえって両士の方へ近よると、こちらから声をかけました。
「おお、森田様、平山様、黒頭巾めは、まだ見つかりませんか？」
すると、二人も、おどりかかってくるようすもなく、

「おお、赤鬼か？　じつにふしぎじゃ。黒頭巾は天井裏にもいなかったかな？」
「へい、とんだむだ骨をおりましたよ」
「赤鬼、どうした、ひどく苦しそうだな？」
あッ、黒頭巾が三葉に、膏薬くさい白布で顔を包んでもらったしゅこうはこれだ！　白布の下に黒頭巾の正体があるとは夢にも気づかぬ浪士たちは、すっかり彼を赤鬼だとばかり思いこんでいるのだ。あいかわらず、すごいほどさえた快傑黒頭巾の頭のはたらき！
「あっしはね、火傷が急に痛み出して、がまんがならなくなったんで、ちょっと医者へいってきます。なに、辻かごにのっていきますからね。殿様がおたずねになったら、すぐもどってくるとおっしゃっておいておくんなさい」
「よしよし、早く療治してもらってこい」
「あ、赤鬼、ひどく歩きにくそうだ。門のところまでつれていってやろう」
顔にあわぬ親切な平山が、肩をかす。黒頭巾はその肩につかまって、裏門を出ました。
「おお、からかごがきたぞ。おいおい、かご屋や」
森田が通りかかったかごを呼びとめてくれました。黒頭巾は、目の前にかきすえられたかごにのると、二人の浪士に、
「たいへんおせわさまでした。殿様によろしく。……おい、かご屋。酒代ははずむぞ。小石川まで大いそぎでやってくれ」
「あい、がってんだ」

黒頭巾をのせたかごは、まっしぐらにかけだしました。ごていねいな浪士二人は、あと見送ってやがてひき返して青江下野の居間の方へもどってゆくと、そこでもまた、大さわぎがはじまっていました。

「おーい、だれかきてくれッ、赤鬼がこんなところで、のびてしまっているぞッ」

天井裏で、だれかどなっている。

「なに、赤鬼が？　や、なるほど。……かつぎおろして、手あてをしてやれ」

やがて三、四人の手で、天井裏からかつぎおろされたのは、火傷だらけの顔と、焼けちぢれた頭髪とを、むき出しにしている赤鬼でした。

「弥太め、天井裏で黒頭巾にしめ落とされたと見える。樋口、活を入れてみろ」

青江下野のいいつけで、樋口というのが赤鬼をだき起こしてグッと活を入れると、ウムとうめいて目を開いた赤鬼が、

「おのれ、黒頭巾ッ」

むちゅうではね起きようとして、だきとめられました。このありさまを、庭先から見た森田、平山の二人が、おどろいたのなんのって、

「アッ、こりゃおかしいぞッ」

「ここにも赤鬼がいるではないか……」

あきれて顔見あわせるのを、あやしんだ青江下野。

「君たち、なにをそんなにおどろいているのだ…」

「ハッ、いや、なに、なあ、平山」

「ウム、さっき裏門から、かごに乗っていったのも、たしかに赤鬼だったがのう」

青江下野、それを聞くと、ひたいに太いかんしゃくすじを浮かべました。

「なに、裏口から赤鬼がでていった？」

「ハッ、たしかに、顔じゅう白布でグルグルまいた、赤鬼が……」

「現に拙者とも、ことばをかわしましたが……」

「ばかッ」

雷のような青江下野のいかり声。

「この赤鬼を見い。顔の布をはぎとられているではないかッ。黒頭巾めが、その布で赤鬼にばけて逃げ出したのだ。それを見やぶれぬとは、ふしあな同然の目玉だぞ。すぐかごのあとを追えッ」

「ハッ」

「かごはどっちへいったか、見ていたろう」

「はい、小石川の方角へ……。よし、きっと追いついて、ひっとらえます」

「ひどく弱っていた黒頭巾、かごからひきずりおろして、ひっ立ててきますッ」

二浪士は、血相かえてかけだした。居候浪士や家来どもも、おどりあがってそのあとを追います。まだそれほど遠くは行っていないあの辻かごは、どうやらすぐにも、この勢いこんだ連中の足に追いつかれそうです。

赤鬼もまた、つづいてかけだそうとするのを、青江下野は、ふきげんに呼びとめました。
「弥太、貴様までうろたえてどこへゆく」
「へい、あの黒頭巾めを……」
「フン、すてておけ。あのおとりを、しっかりこっちでつかまえてさえおけば、黒頭巾は今に、すてておいても、じぶんから舞いもどるわ」
「エ。おとり？　では、あの三葉を……」
「弥太、きさまはまだ気がつかぬか？　黒頭巾めの正体を……」

第七回　珠三郎よ　いずこへ？

悪夢

日ぐれ方でした。ガチャッと錠のあく音がして、重い戸を開くと、うす暗い牢屋の中へ、赤鬼の弥太五郎を先に立てて、青江下野がズッとはいってきました。赤鬼は、冷たい床板の上に力なく横たわっている囚人の枕もとを、あらっぽくふみならして、
「起きろ、青江の殿様のご巡視だぞ」
「ウム……」
わずかに身動きして、顔を起こしたのは快傑黒頭巾です。見るかげもなくおとろえ弱っています。
「どうした、黒頭巾？　からきし意気地のねえざまだな。もうこうなれば、生かそうと殺そうと、こっちの量見一つなんだ。ヤイ、よくもたびたび、おいらに赤恥をかかしやがったな。その仕返

しを腹いっぱいするから、覚悟してやがれ」

赤鬼は、土足をあげて黒頭巾の頭をふみにじろうとしました。と、今までだまって見ていた青江下野が、ひややかにおしとどめて、

「待て、弥太。わしがじきじき、そやつにたずねることがあるのだ。これ、黒頭巾、上においてかねて詮議中の『七つの抜け穴の図解』を、どこへかくした？　しんみょうに白状せい」

「知らぬ。わしは知らぬ……」

黒頭巾が力なくそういうのを、青江下野はひにくな目つきでジッと見おろしながら、

「よし、あくまで強情をはりとおす気なら、見せてやるものがある。弥太、そやつを起こして、外の仕おき場を一目見せてやれ」

「へい、承知しました」

赤鬼は黒頭巾の頭をあらあらしく持ちあげました。見ると、牢格子の外には、いつのまにか三本のはりつけ柱が立ちならんでいて、それにむごたらしくしばりつけられた三人の姿。

「あれが、だれとだれだか、ぞんじているか？　右は山鹿士行、中が三葉、左のはしは珠三郎だぞ。そのほうが、『図解』のありかを白状せぬと、どこまでも強情はるなら、あの三人の命も助けてはおけないのだ」

「ムッ、おのれ、あくまでもッ……」

無念の歯がみしてはね起きようともがく黒頭巾を、青江下野はにくさげににらんでいたが、

「しぶといやつ、こうしてくれるぞ。どうだッ」

いきなり大刀をぬきはなすと、黒頭巾の胸もとへその切っ先をおしあてる。あッ、焼きつくように胸が痛む。黒頭巾のむざんに苦しむさまを、こころよげに見つめていた青江下野は、

「おのれ、どうあっても白状せぬな。ウム、その頭巾の下にかくされたおのれの面を見てやりたい。弥太、頭巾をひっぱがしてみい」

「がってんです」

赤鬼の手が頭巾をつかむ。ああ絶体絶命！　頭巾に包まれた快傑のなぞの正体は、今、むざむざと敵の目前にさらされようとする。黒頭巾はひっしでもがきあらそいました。すると、つきつけられたするどい切っ先は、そのたびに胸をえぐって、たえがたい痛みは、いよいよはげしくなりました。

「ウウウムッ、ムムッ……」

思わずうめいたじぶんの声に、ハッとおどろいてわれに返った黒頭巾は、総身に冷たい汗をかいて、あたりのようすを見まわした。雨戸はしめきってあってうす暗いけれど、ここは牢屋などではありません。やぶれた壁、ほこりだらけの古畳、どうやらひさしく人の住まぬあき家らしい。

「今のは夢だったか？　ああ、いやな夢を見た」

黒頭巾は力なくつぶやきます。あのいまわしいはりつけ柱など、あともなく消えうせたが、胸の痛みばかりは、夢がさめてもハッキリ残っています。おとといか、青江下野にうたれた鉄砲きずが、夢うつつの間にも痛むのです。

あのとき、不敵な計略で、青江の邸の警戒の裏をぬけて逃げ出したが、すぐあとから追っ手がせまるのをさっしたかれは、はげしい苦痛をこらえて、途中で三、四どもかごをとりかえて、スッカリ追っ手をまいてしまったが、目あての医者のところまでかごを乗りつづける気力もなくなって、やっとこのあき家へころがりこみ、きのう一日は、飲まず食わずに生死のさかいを眠りとおしたのでした。

これが、ただの人間なら、とっくに命を失ってるはずだが、鋼鉄のようにきたえぬいた黒頭巾のからだと、なによりも強い精神の力が、これほどの苦痛にもうち勝たせたので、今はもう、かなり元気もとりもどしていました。

「とにかく、珠三郎をあずけてある良伯医者のところへ行って、わしも傷の手あてを受けなくては……」

黒頭巾は、古畳の上によろよろと立ちあがりました。

権次歩兵

黒頭巾が、おとろえたからだを運んで治療を受けにゆこうと目ざすのは、江戸の西北、閑静な雑司ヶ谷鬼子母神の森かげに住む、蘭法外科の名医、杉良伯老先生の宅でした。

そこでは、ちょうどそのころ、一室の障子をあけて、あごひげが雪のように白い小柄な老人、すなわち良伯老先生が姿をあらわしました。老先生は、部屋の内にむかって声をかけます。

「では、珠どの。愚老はちょっと、目白の病人を見まってくる。あいにく権助も他出ちゅうだで、珠どの、よく気をつけて、おとなしくるすいをたのむよ」

「はい、先生、行っていらっしゃい」

「このへんへは、めったに人のくる気づかいもないが、もし、だれかたずねてきても、うかつに障子をあけて応対したり、顔を見せてはいけないよ。そなたの身は、黒頭巾どのからくれぐれもたのまれてる、たいせつなあずかり物だからの」

「はい、だいじょうぶです」

良伯老先生は、部屋の内へよく念をおしてから、障子をしめきって、庭からしおり門の方へと出ていってしまいました。

この良伯老先生も、快傑黒頭巾のためにあぶない難儀を救われたおおぜいの人々のうちの一人で、あの切支丹牢の抜け穴から黒頭巾がかつぎこんできた珠三郎の手あてをも、恩返しのつもりで、喜んでひき受けたのでした。今は息子に世をゆずって楽隠居の身分だが、近くの貧乏な病人などを、毎日親切に治療して歩くのが、なにより楽しみだという、神様のような心持ちの老先生でした。

この老先生が出ていっちまうと、障子の内側では、ときどき草双紙のページをめくる音や、つまらなそうなあくびが聞こえるばかりで、ひっそりと静かな午後。

しばらくすると、高田の馬場の方角から、ピーヒャラ、ドンドコドンと、節おもしろい行進曲が聞こえて、しだいに坂をこっちへのぼってきました。やがて、疲れた足をひきずった四、五十

人の歩兵どもが、鉄砲を肩にゾロゾロと行軍してきて、垣根の外のすずしい森かげへはいったとき、

「小隊イ、とまれい」

隊長の号令で列がとまりました。つづいてまた、

「銃を寄せあわして、休息いたせ」

今なら「組メ銃、休メ」とくるのだが、どうも間のぬけた号令だ。歩兵どもは思い思いの木かげにはいって、腰をおろして休憩します。

「いやはや、べらぼうにのどがかわいたぞ」

「ごめん、井戸はどこだね？」

水を飲みたい歩兵が三、四人、ドヤドヤと、しおり門をくぐりました。

「ごめん。オヤ、だれもいないのかな？」

勝手に庭の奥へふみこもうとしたとき、障子があいて、顔を出した少年がある。珠三郎でした。切支丹牢の大火でも、たいした傷もしなかったらしく、あいかわらず玉のような美少年。

「おお、子ども、井戸はどこだね？」

「ウン、裏だよ。そこの角をまわるとすぐだ」

歩兵どもは教えられて裏手へまわる。そのときまた一人、ノッソリとはいってきた大男の歩兵がありました。この歩兵と珠三郎とが、なにげなくヒョイと目を見あわせると、双方ギョッとしたようすで顔色がかわった。

「アッ、権次歩兵ッ……」

「ム、しめたッ。おたずね者め、こんなところにかくれてやがったんだナ。こいつは見のがせねえ」

ああ、いけない。悪いやつに見つけられてしまった。珠三郎はいそいで障子をピッシャリとしめきったが、もうまにあいません。

目つぶし

「もう逃がさぬぞ。赤鬼親分からたのまれて、つかまえれば五両になる代物だ。ヤイ、珠三郎、どこへうせた？」

権次歩兵は土足で縁がわへとびあがって障子をあける。かねて赤鬼から、五両の懸賞つきでたのまれていたさがし物だ。運よく見つけたうえは、どうしてもひっとらえる気の権次歩兵。珠三郎はあわをくって裏から逃げ出そうとすると、井戸ばたにいた三、四人の歩兵どもが、けげんそうにふりむく。権次歩兵は、すかさず声をかけて、加勢をたのみました。

「同役、その小せがれを逃がさぬようにたのむッ」

珠三郎は進退きわまってひき返すと、こんどは良伯老先生の居間へとびこんでしまった。

「待てッ、小せがれめッ……」

「なんだ？　同役。どうしたのだ？」

権次歩兵のうしろから、三、四人の歩兵どももドヤドヤとついてくる。絶体絶命の珠三郎は、大きな調薬机のむこう側へ逃げこむと、机の上にあった紙袋をむちゅうでつかんで身がまえます。切支丹牢の塀外でいつか見た、快傑黒頭巾のつぶてのすご業を気どるわけでもないが、ほかに敵をふせぐ武器も方法も見あたらない苦しまぎれです。

「ヤイ、小せがれ、おとなしくしないと、あとでひどいぞ」

おどしながら権次歩兵は大手をひろげて、調薬机をおどりこえようとします。身にせまる危機！

「ヤッ」

珠三郎はむちゅうで紙袋を投げつけた。風を切ってとんだ紙袋は、みごと権次歩兵の鼻柱に命中して、袋がさけると、パッと赤黄色の粉が、まるで爆弾の煙のようにとびちりました。

「あッ、おのれ……。フワッ、フワッ、フワックショイ、フワックショイ……」

「ヒック、フワック、ヒックショイ」

権次歩兵をはじめ、その粉を鼻からすいこんだ歩兵どもは、つづけざまにおそろしく大きなくさめをしました。なんの粉薬だか知れないが、細かい粉はまた目の中にもはいって、歩兵どもをにわかめくらにしてしまった。珠三郎はそのすきに、す早く唐紙をおしたおして、庭さきへとび出しました。

「あッ、逃がしてなるものか、待てッ……」

なにしろ五両の懸賞つきだ。目はあいていられなくても、欲と二人づれの権次歩兵、早くも気づいて、手さぐりに追いかけてくる。

「なんだ？　なにごとだ？」

そこらあたりで休憩していた歩兵どもが、おどろいてこっちを見る。権次歩兵は豆つぶほどの涙をボロボロとこぼしながら、

「つかまえてくれッ、その小せがれを……、泥棒だッ」

さっそくの機転で「泥棒」とどなったのは、なによりもききめがありました。

「なにッ、そいつが泥棒だと？　ふといがきだッ」

「逃がすなッ、つかまえてやれッ」

みなバラバラと起きあがって、追いかけてきます。珠三郎はすぐ近くの鬼子母神の境内へ逃げこみました。なにしろ切支丹牢の一件からまもない、病みあがり同然の身なので、しだいに息が切れ、目がくらんでくる。

「ソラ、堂の床下へもぐったぞ」

「裏手へまわった。そっちから追い出してくれ」

おおぜいだから、かなわない。権次歩兵はとりわけしんけんになって、まっかな目をこすりながら、しゅうねん深くどこまでも追ってくる。珠三郎は死にものぐるい、ある茶店の表から裏へかけぬけると、そこの原っぱに、一頭の駄馬がはなされて、無心に青草を食べているのが目にはいりました。

「ありがたいッ、青や、たのむぜッ」

おさないときから、曲馬のはだか馬に乗りなれた珠三郎、いきなりそのたてがみにしがみつくと、ヒラリと背にとび乗って、かかとでやたらに太腹をけりました。おどろいたのは馬で、ぶえんりょな乗り手にあきれながら、カパカパとかけだしました。

もしや兄では……

「ヤッ、馬で逃げるぞッ……待てッ……」

歩兵どもののしり声をうしろに聞き流して、人も駄馬も無我むちゅうで、半刻（一時間）近くもかけつづけると、駄馬はとうとうへたばって、太腹に大波をうたせながら、動かなくなってしまいました。

「ああ、もうだいじょうぶだッ。青や、ありがとうよ」

珠三郎も息を切らしていました。いくら駄馬でも馬の足にはかなわなかったので、しゅうねん深い権次歩兵らも、途中であきらめたか、もう追っ手の影も見えない。珠三郎は駄馬の背からはいおりると、汗だらけの平首を、いたわるようにたたいてやりながら、はじめて気をおちつけて、あたりの景色を見まわしました。

広いたんぼのむこうに、見おぼえのある、青いいらかや五重の塔がそびえているのは、浅草の観音様にちがいない。綿のようにつかれた珠三郎は、たんぼのあぜにごろりと横になると、

「あれが観音様だから、ここは三ノ輪のたんぼだ。ずいぶん遠方まで、むちゅうで逃げたもんだ

な。……だが、まったくおどろいた。あんなところで、権次歩兵に出っくわそうなんて……」

じぶんであきれたように、つぶやきます。

さっきの権次歩兵のことばから考えると、赤鬼は方々に手をまわして、厳重にじぶんのゆくえをさがしているらしい。あのかくれ家を見つけた権次歩兵は、きっと赤鬼に話して、おおぜいで待ちぶせしているにちがいない。そこへ帰っていったら、じぶんがあぶないばかりでなく、良伯先生や黒頭巾のおじさんに、どんなめいわくをかけるかしれない……と思うと、珠三郎は雑司ケ谷の方角へもどる気にはなれないのでした。

（いっそひさしぶりで、天文長屋へ帰ろうか？　でも、おれはおたずね者だから……。そりゃたのめば、あの天命堂のおじさんなら、一晩や二晩はかくまってくれるだろうけどなあ……）

親切な天命堂の、人のいい顔なども思い出されるが、その天文長屋へもうかつには帰ってゆけぬ、おたずね者の身の上だ。珠三郎はこんなことを思いつづけて、ボンヤリと白い雲の動くのを見つめているうちに、はげしい疲れがいっぺんにでて、グッスリ寝入ってしまいました。

だが、ちょうどそのころ、重傷になやむ身を、やっと雑司ケ谷までたどってきた快傑黒頭巾が、これも病家からもどった良伯老先生と顔見あわせて、るす中に起こった大騒動にあきれ、珠三郎のゆくえについて、心をいためているさいちゅうだったとは、かんじんの珠三郎は夢にも知りません。

やがて、目をさましたときは、もう夕方でした。駄馬は、珠三郎が眠っている間に、うまやが恋しくなってひとりで帰っていったらしく、あたりに姿も見えない。だが、帰る家も、だれをた

よってゆくあてもないのが今の珠三郎。

涼しい風がたんぼをこえて、にぎやかな見世物小屋のはやしの音を運んでくるのを、ぼんやり聞いていると、むかし、大月一座のさかんだったころや、東吉親方、三葉姉さんのおもかげが、それからそれへと思い出されます。なんとなく心がひかれて、フラフラと立ちあがった珠三郎の足は、すいよせられるように、ひとりでにぎやかな奥山のざわめきの方へとむいていました。

（あ、こんなときに、弦一郎兄さんがいてくれたら、どんなに心じょうぶか知れないんだがなあ。いったい、どこをどうさがしていいのか、わからないんだから、いやンなっちゃう）

父をさがして、命がけで忍びこんだ切支丹牢の大冒険も、けっきょくは残念な人ちがいだったし、姉の三葉のところへは、めったに近づくこともできない。こうなると、どうしても思い出されるのが、死んだ親方に名まえだけ聞いてて、顔さえ見知らぬ弦一郎という兄のことだ。

（いったい弦一郎兄さんは、この江戸にいるんだろうか？　もしかすると、兄さんの方でも、おれたちをさがしているかもしれないなあ）

その弦一郎兄さんは、どんな人だろう？　もしたずねあてたら、父上のおゆくえを、二人で力をあわせてさがすことができるんだが……。珠三郎は、まだ見ぬ兄のおもかげをなつかしがりながら、人ごみにもまれてボンヤリと歩いているとき、

「ワーイ、けんかだッ。行ってみろ」

「聖天の子分たちと、やまかんのげんいち兄ちゃんとが果たし合いだッ。行ってみろ、行ってみろ」

耳のはたでわめきながら、かけてゆくやじうまども。盛り場ではめずらしくもないけんかさわぎだが、珠三郎は思わずハッとして顔色をかえました。

「アッ、今、たしかに山鹿、弦一郎っていったようだが、……山鹿弦一郎といえば兄上とおなじ名だッ。……ひょっとしたら兄上に……。よしッ、行ってみよう」

たった今も、心にあこがれていた人の名まえを、たしかに耳にした珠三郎、もう胸がドキドキして、やじうまについて、けんかの起こった場所へむちゅうでかけだします。

すごい力、すごい業

本堂の裏手は、黒山の人だかりだ。

「ちぇッ、なにも見えないや。管ばしごでもあるといいんだけどなあ」

ワッワッという見物のどよめきは、よほどけんかに花がさいたようすだ。気のあせる珠三郎は、人だかりのうしろから、頭をつっこんでグイグイとくぐりはじめました。

「ヤイヤイ、らんぼうなやつだな、あれッ……」

苦情の出るのを聞き流して、前へとび出してみると、なるほど、こいつはたいへんな大げんかだ。素人角力で大関といわれる聖天の弟子とも子分ともつかぬ四人の大男と、にらみあっているのは、これもふとった色の白い十八、九の若者。

「さあこい、ふんどしかつぎども。一人と一人の土俵の勝負では、とても勝ち目がないのを知っ

て、四人がかりでとびつく気か。おもしろいや、腰っ骨のぬけるまで、たたきつけてくれるから」

若者は、ニッコリ笑って大手をひろげる。

「えれえぞ。やまかんの兄ちゃん」

「げんいち兄い、しっかりやれッ」

やじうまどもは、みんな若者に声援する。どうやら土俵のもつれから起こったけんからしい。

珠三郎は一目見て、この若者がすきになってしまいました。

「なにを、なまいきなやまかんめッ」

「たたきのめしっちまえッ」

多勢をたのむ四人が、いっせいにとびかかるのを、

「ドッコイ、野郎めッ」

「ワッ」

若者の片手突き、おそろしい力だと見えて、胸をつかれた聖天がたの一人が、あおむけざまにひっくり返る。と、横から組みつくほかの一人を、体をかわして泳がせながら、背中をはたきつけると、そいつはバッタリと前へのめって、砂の中へ顔をつっこみます。つづいてまっこうから打ちかかる一人のこぶしをくぐって、ふところへとび込んだ若者の頭突き一発、そいつはひとたまりもなく四、五メートルうしろへケシとぶ。息もつかせず最後の一人が、うしろから組みつくのを、腰をひねって大きくはねとばしてしまいました。すごい力。目ざましい早業。

やじうまどもは、ただもうむちゅうで喝采する。珠三郎も、すっかりうれしくなっちまった。

(強いなあ。この人がほんとに兄上だったら、うれしいなあ。そうだ、思いきって、たずねてみようか……)

年ごろも三葉姉さんより三つか四つ上でした。それに、まるで黒頭巾のおじさんみたいな強さだもの。珠三郎はいよいよこの若者が、兄弦一郎にちがいないように思われてきたので、思いきってそばへ近づいて声をかけようと思ううちに、けんかに勝った若者は、みだれた着物の前をかきあわせ、たおれてる相手には目もくれずに、

「どいてくれ、みんな、通してくれ。急用をかかえて、いそがしいからだなんだ。ホイ、ごめんよ」

笑いながらそういって、サッサと人ごみの中へ姿をかくしてしまったのは、けんかなれた、あざやかなひっこみぶりでした。

(あッ、行っちまった……。どうしても追っついて、聞いてみなくちゃ……)

珠三郎はあわててあとを追って、やっと人がきをおしわけて外へ出てみると、どこへ行ったか、もう、あたりにはあの若者の姿が見えません。

「しまった。どっちへ行ったんだろう?」

ほんとの兄だったかもしれないのに、姿を見失ったのはとり返しのつかぬことでした。珠三郎はガッカリして、ぼんやり立っている耳のそばで、

「モシ、珠太夫、珠兄さんじゃありませんか」

なれなれしく声をかける者がありました。ギョッとした珠三郎は、いざといえば逃げ出す気で、キッとふりかえって見ると、

「あ、やっぱり珠太夫でしたね。しばらくぶりでござんしたねえ。あっしですよ、むかしなじみの、新公をお忘れなすっちゃひどいねえ」

いやしいせじ笑いをするこの男。

新公という男

「あ、なんだ、新公かい。ああ、おどろいた……」

珠三郎もホッとする。おそろしい赤鬼や三太などでなくて、もと大月一座の楽屋で下足番などしていた小者の新公でした。

「いいところでお目にかかりやしたよ。で、珠兄さんは、これからどちらへ？」

どちらへゆくあてもない珠三郎でした。

「ウン……今のあのけんかに勝ったほうの人に、ちょっと話があるんだけど……」

「けんかに勝った人？　ハハア、ではあの、山勘の兄ちゃんにですかい？」

新公がそういったので、珠三郎は喜んで、

「お前、あの人の家を知ってるの？」

「へい、そりゃもう、知ってるだんじゃありません。ご用によっては、あっしがおとりつぎもしやすがね。いったいどんなご用なんで……」

ずるそうな目を光らせながら、うわべはどこまでも親切げにいう新公。

「ウン、その用事ってのはね……」

だが、めったな人にはうち明けられない身のうえの秘密なので、珠三郎はさすがにためらいました。それと見ると、新公はなにげなく、

「いやなに、兄ちゃんにおあいなさるなら、あっしがお手引きしてさしあげますよ。だがまあ、なにしろひさしぶりだ。いろいろお話ししたいこともありますから、ごいっしょに、そこいらまでゆきましょうよ」

珠三郎も、新公をあまり虫のすく人間とも思わないが、この男がさっきの若者をよく知ってるらしい口ぶりなので、ふりきって別れる気もしなくて、さそわれるままに、肩をならべて歩きだします。

「ときに、親方さんはお元気で？　へえ、お亡くなんなすった！　それはどうも……。三葉太夫も武家奉公に？　……なるほど、それじゃあ、珠兄さんもさびしいわけですね。それで、山勘の兄ちゃんには、どんなご用が……、ヘエヘエ、なるほどね、おさないときに別れた兄さんらしい気がなさる？　……山鹿弦一郎とおっしゃるお方で……。なるほど、それじゃあきっと、そのさがしていなさる兄さんにちがいないや。あの兄ちゃんも、もとはりっぱなお侍の子だったってえことを、いつか、たしかに聞いたことがありましたぜ」

「ほんとかい？　新公」

それならいよいよ兄上だ。珠三郎は、もううれしさに胸がおどるばかりです。珠三郎の心の用心は、いつのまにかゆるんで、新公が根ほり葉ほりたずねるのにつりこまれて、話してさしつかえのない身のうえ話は、おおかたはうち明けてしまいますと、新公はたいそう同情したようすで、

「ようがす。では、あっしが、きっと兄ちゃんにあわせてさしあげます。だが、なにしろ先方のつごうを聞いてみますから、とにかく、きたねえところだが、あっしの家までいらっしゃい。なに、遠くはねえ、すぐそこですよ」

とうとう新公にひっぱりこまれたのは、浅草たんぼの、たおれかかった一軒のあばら家。

「じゃ、一走り行って話をつけてくるから、どこへも行かねえで、珠兄さん、きっと、待っていてくださいよ。よござんすかい」

雨戸を引きたてて、新公が行っちまうと、ただ一人とりのこされた珠三郎は、すすけたあんどんの光で、家の中を見まわしました。これでも人間のすまいかと思われるほど、きたない貧乏ずまいです。でも、なつかしい兄上に、まもなくあわれるのだと思えば、そんなことは気にもならない。だが、どう話が長びくのか、新公はなかなかもどってきませんでした。

あいに行く

珠三郎が、いいかげんしびれをきらして、ジリジリしてるころ、やっともどってきた新公。

「や、すまねえ、すみません。つい話が長くなっちまってね。……さあ、珠太夫、さきではお待ちかねだ。すぐ出かけやしょう」

プンプン酒のにおいをさせながら、せきたてる。

「じゃ、あの人はやっぱり……」

「ああ、そのことですかい。山勘の兄ちゃんは、『なにしろ、おさないときのことだから、そんな弟や妹があったような気もするが、ハッキリとはおぼえがねえ。おっ母さんに聞けば、すぐわかるから、じゃ、その子をつれてこい。おっ母さんのところで待ってるから』と、こうなんですよ。でも、なんだか、なつかしがって、早くつれてきてくれっていってましたよ」

「エッ、おっ母さんが？　……」

思いがけないことでした。

(東吉親方は、母上のことについては、なにもいってくれなかったが、あれは死にぎわのことだったから……。ああ、もしかほんとうに、母上が生きていられ、あの人もほんとの兄上で、名のりあうことができたら、どんなにうれしいことだろう。姉さんにも教えてあげたら、キット、大喜びするだろうなあ)

母上と兄上とに、一時にめぐりあえるとは、なんというれしいことでしょう。珠三郎は、もう矢も楯もたまらない気持ちで、立ちあがりました。

「新公、早く行こう。すぐつれていってくれ」

珠三郎はもう土間へおりていました。

「いそがしい人ですね。おや、はだしだね。じゃ、この草履をはいて、こっちへきなせえ」

新公は先に立つ。珠三郎は小走りにいそぐ。胸がドキドキして、うれしいような恥ずかしいような、あまずっぱい気持ちで、足がひとりでに動きます。二人は肩をならべて観音様の境内をなめに通りぬけると、本堂の横から、仁王門の方へさしかかる。気がせいている珠三郎は、なんの気もつかないが、その仁王門の軒下に、机と床几をおいて、「神易天命堂」と記した弓張りちょうちんが、ぼんやりとあたりのやみを照らしていました。これはいうまでもなく、例の天文長屋の住人、ヘボ易者の天命堂のおじさんが、ここに網をはって、いい椋鳥のかかるのをぼんやり待っているところだ。

いや、いるぞいるぞ。天命堂は門の柱にもたれて、いぎたなく居眠っている。勇士はくつわの音で目をさますが、天命堂は椋鳥の足音に夢からさめて、フト目を開くと、おどろいたようすで、思わず机の上に身をのりだしました。

「あッ、珠兄さんだッ……。これ、珠兄さんや」

三、四メートルもゆきすぎた珠三郎、わが名を呼ばれて、ギョッとしてふりかえりましたが、

「あ、天命堂のおじさんですか？」

「さようさ。天命堂だよ。いいところであったね。わしは珠兄さんの居所をさがしていたよ。まあいったい、どこへ雲がくれしていたんだね」

切支丹牢のつけ火一件から、おたずね者になって、ゆくえをくらました珠三郎でした。お隣の親切者、天命堂のおじさんが、そのゆくえを心配してさがしていたのは、もっともなことです。

だが、珠三郎は、今、まだ見ぬ母や兄の所へ、分秒もおしんであいに出かける途中だったので、

「おじさん、あとでゆっくり話しにゆきますよ。今はとてもいそいでるんだから……」

そういう間も立ちどまらないでゆきすぎる。新公もよけいなじゃまがはいったという顔つきで、ソッと珠三郎の手をひっぱって、

「珠太夫、先方はお待ちかねだ。早く、ね」

ソッとささやく。珠三郎もうなずきます。

「あっ、待ちたまえ……珠兄さん、いったいどこへゆくんだね。おいおい、これこれ……」

天命堂はあきれて見送りました。まるでじぶんに呼びとめられるのを、おそれるように、どんどん行っちまった。

「ハテナ、あのつれの男は、浅草たんぼの新公という、よからぬやつだが……。どうも気になる。よし、ひとつあとをつけていってみよう」

天命堂は、床几から立ちあがりました。かぜでもひいて、からだのぐあいが悪いのか、ひどく元気のない足どりで、算木もぜい竹もほったらかしたまま、ちょうちんだけさげて歩きだしました。だが、これはすこし天命堂式だ。人のあとをソッとつける者が、わざわざ目印になるちょうちんをブラさげてゆくなんて。

第八回　怪船怪人

芦間の怪船

新公と珠三郎が、ソッとふり返って見ると、二、三十メートルもあとから、天命堂のちょうちんがノコノコとつけてくるのが見えますから、

「ちぇッ、ヘボ易者め、なにをとまどってるんだろう。珠太夫、めんどうだから、いそぎましょうぜ」

珠三郎も眉をひそめる。天命堂のおじさんも気がきかない。こんなにいそいでるものをひきとめて、てまどらせなくても……という気持ちだから、立ちどまって待つ気はありません。

だが、天命堂はひどく元気がありません。まるで病人みたいな足つきで、しだいにおくれます。珠三郎たちが東橋を向島土手へわたりきったころ、やっと橋の中ほどまできた天命堂は、このときはじめて、目印になるちょうちんをわざわざブラさげていた、じぶんのまぬけさに気がつ

いたらしく、橋の上に立ちどまると、

「どうも、ちょうちんがちと目だつようだね。よしよし、帰りまでここへこうしておくかな」

たもとから手ぬぐいを出して、ちょうちんの柄を欄干にしばりつけておいて、こんどは手ぶらでまたあとをつけはじめます。向島土手をいそぐ二人は、ふりむいて見ると、ちょうちんは橋の中ほどにとまって、いつまでも動きだすようすがないので、

「へへへ、やっと、やっかいばらいをしましたねえ」

新公はニヤリと笑って、すっかり気をゆるしたらしく、足どりもいくらかゆっくりしてきました。まっ黒い空は今にもふりだしそうで、ときどき、青白いいなびかりが遠方でひらめくほかは、まったくのやみ夜でした。土手には人通りもなく、すごいほどさびしい中に、虫の鳴き声ばかりが悲しく聞こえます。

「新公、いったい、どこまでつれてゆくんだい？」

「なに、もうすぐですよ」

新公は口数をきかなくなりました。三囲稲荷をすぎて、白鬚近くまできかかると、

「さあ、こっちです。すこし足もとがあぶないから、気をつけておくんなさいよ」

新公はさきに立って土手をおりて、身のたけより高い芦のしげみの中へ、ゴソゴソとはいってゆこうとしたので、珠三郎はあやしみました。

「おい、新公、川の中に家はないだろう？　お前、きつねにばかされてるんじゃあるまいね」

「じょうだんでしょう。お母さんも兄さんも、お上の目をしのぶために、こんなところにかくれ

ていなさるんだ。でも、あなたがこわくてゆけないのなら、しかたがないからひき返しますかね。へッへッ」

新公が、いやみな口をききました。

「いつ、だれがこわいなんていったい？」

「えらいね。では、あっしについていらっしゃい」

珠三郎はしゃくにさわって返事もしないで、新公についてゆく。芦のしげみをぬけると、目の前の州に、黒い大きなものが横たわっていた。

「さあ、きましたぜ。珠太夫、あれですよ」

それは、州に乗りあげたまま、見る影もなくかたむきこわれかかった一そうの廃船で、艫の方半分は水につかっていました。

「エッ、あれがかい？」

珠三郎は、目を見はります。なつかしい母上や兄上が、こんな奇怪なところに住んでいられようとは、あまりにも思いがけないことでした。

（ああ、幕府の詮議がきびしいので、こんなところにかくれていなすったのか。おいたわしいなあ）

珠三郎は胸がいっぱいになって、廃船のそばへかけよろうとすると、新公がひきとめて、

「待った。うっかり近よると、見はり番に鉄砲でやられますぜ。今、あっしがあいずするから……」

新公は指を口にくわえると、グワッ、グワーッと、じょうずに五位さぎの鳴きまねをしました。

昇天斎雲龍

すると、ギャッ、ギャーッ、と、廃船の中からも、あやしいかわうその鳴き声が聞こえました。

「あいずがあった。もうだいじょうぶ、ゆきましょう」

新公は珠三郎の手をひいて、船のま下へ近づくと、船の上から、いきなりパッとまぶしい龕燈の光を二人に投げかけました。

「やあ、新の字、玉はうまくくわえてこれたか？」

船の上からそういうと、新公があわてて、

「シッ、ン、その玉……珠太夫を、おつれ申したんだから、早くはしごをたのむぜ」

ふなばたをつたって、スルスルとさがってきた縄ばしご。

「珠太夫、どうぞおさきへ……」

新公にいわれるまでもない。母上、兄上にあいたさいっぱいの珠三郎は、はしごにつかまると身軽によじのぼる。が、やっと手が甲板へとどいたとき、だれかがいきなり太い腕をのばして、珠三郎のえり首をつかむと、ごぼうぬきにひっぱりあげて、しかも、甲板へグイとねじふせま

した。

「アッ、なにするのだいッ。……新公ッ、早くきてくれッ……」

珠三郎はおどろいて、身をもがく。

「これ、ジタバタしてもだめだから、おとなしくしてろ。……オイ、龕燈を見せろ」

らんぼうなこの男は、そういって、ほかの男に龕燈を照らさせながら、珠三郎の顔からからだじゅうをジロジロ見まわすと、まんぞくそうにいいました。

「新公、これはなかなか上玉だのう」

新公もこのとき甲板へあがってきていましたが、珠三郎をかばうどころか、かえってじまんらしく、

「どうですね、親方。この子がさっきお話しした大月一座の若太夫珠三郎なんで。器量なら芸なら、たいした値うちもんでさあ。こんなとびきりの上玉は、金のわらじでさがしたって、そうザラに見あたる代物じゃありませんからね」

それを聞くと、珠三郎ははじめて、新公に一ばいくわされたことを知って、歯がみしました。

「アッ、新公、おっ母さんや兄さんのところへつれてゆくなんて、お前はおいらをだましたんだナッ」

「へへへ、そんなこわい顔しなさるな。お前さんのあいたがってる山勘の源一兄いには、今にまちがいなくひきわせてもらえますよ。それに、親切な親方さんは、あなたを赤鬼たちから、かくまってくださろうとおっしゃるんだからね」

珠三郎は、くやしさに歯がみする。だが、たびたびのおそろしい災難が、珠三郎を、ただの少年とはくらべものにならぬほどに、大胆にしていました。だから、今も、すきさえあれば逃げ出すつもりを色にも見せないで、ソッとようすをうかがいます。

じぶんをとりまいてるのは、親方という大男はじめ、四人のあらくれ男だ。なかには鉄砲さえ持ってる者があり、船の中にもまだおおぜいの仲間がいるらしいから、逃げ出すことはなかなかの大冒険でした。

しかし、親方は珠三郎がすっかり気にいってしまったらしく、ことばもやさしくなって、

「これ、珠太夫とやら、わしは南京手品の昇天斎雲龍だ。お前は今夜からわしの一座にはいったんだが、おとなしく働きさえすれば、芸と腕しだいで若太夫にとり立てて、だいじにしてやるぜ。聞けば、お前は牢破りのおたずね者だそうだが、わしの一座にいさえすれば、赤鬼などには指もささせぬから安心しろ。おれたちは近いうちに、アメリカ国の興行師ペンクッという毛唐人に買われて、洋行する話がついてるんだ。いくら赤鬼だって、アメリカまでは追ってこれねえから、大船に乗った気でいるがいいぜ」

珠三郎は、意外なその話にびっくりしました。開港条約が結ばれ、横浜村には異人町ができて、黒船が何ぞうもわたってくる世にはなっていても、遠いアメリカまでつれてゆかれたら、それこそ生きて帰れるかどうかわからない。

地獄で兄上に

そのころ、アメリカ国のシカゴに、万国大博覧会が開かれるので、その余興にひともうけ思いついたのが、名高い興行師ベンクツです。はるばると日本へわたってきて、珍しいチョンまげ頭の芸人どもをつれて帰り、物見高いヤンキーの人気を集めて、大もうけをするつもりだったが、きてみると、攘夷の声はさわがしく、外国の事情はなにひとつ知らぬ日本の役者や芸人は、何千両もらっても洋行などする勇気のある者は一人だっていないありさまです。

弱りきったベンクツが、やっと見つけたのが、表看板は南京手品の一座だが、そのじつは黒船相手の密貿易団のかしらの、この昇天斎雲龍という男だったのです。

雲龍はベンクツに大金をもらったので、大乗り気になったが、なにしろ密貿易が本職だから、一座にはろくな芸人がいない。そこで、急に八方へ手をまわして、目をつけた芸人たちをさらったり、かどわかしたりしてきて、やっと頭数がそろいかけたところでした。だから、雲龍の手下の新公が浅草で珠三郎を見かけると、むろん見のがすわけはなく、口さきでうまくだまして、ここまでつれこんできたのでした。

「どうだ、珠太夫。いまさら不承知だなんていっても通らないんだから、おとなしく仲間入りするほうが得だぜ。わかったろうな？」

「わかったよ。しかたがないから仲間入りするけど、そんなに強くおさえつけられちゃ、苦しくって死んじまいそうだよ」

珠三郎の返事を聞くと、雲龍親方は、ゆかいそうに大笑いしました。

「ワッハッハッ、話さえわかれば、なんのひどいめにあわせるどころか、だいじにしてかわいがってやるよ。さあ、起きるがいい」

上きげんで、おさえていた手を放して、ひき起こしてくれました。だが、珠三郎がねらっていたのはこのすきだ。小さいからだをつばめのようにひるがえして、親方のそばをすりぬけると、ふなばたの方へかけ出したから、みなはおどろきました。

「アッ、ふといやつだッ、待てッ」

親方はじめ、ドタバタと追いかける。

（つかまったら、おしまいだッ）

身の軽い珠三郎は、勝手のわからぬ、まっ暗な甲板の上を、りすのようにすばしっこく逃げまわる。だが、ふと板のくさったところへ乗っかったからたまりません。ベキベキッという音といっしょに、珠三郎は船底めがけて石のように落ちました。しかし、さすがは軽業できたえたからだだ。宙でクルリと、猫のようにからだをひるがえした。とたんに、なにやらやわらかいものの上にドシンと落ちたのです。

「アッ、痛いッ、だれだッ」

ひどくおどろいたらしいねぼけ声がして、ムックリ起きあがった者がある。珠三郎はどうやら、胴の間でねていた男の足の上に落ちたらしい。

「しまったッ」

ギョッとして、逃げ出そうとする珠三郎の、帯のあたりをグッとつかんだ腕の強いこと！　ふりはなそうとして、船玉様の燈明の光で、チラと相手の顔を見た珠三郎は、思わず声をはずませて、その人にすがりつきました。

「アッ、あなただッ、あなたにあいたかったッ。助けてくださいッ……」

なんという思いがけないことだ。地獄で仏でなくて、もっとなつかしく、もっとたのもしい人に出あったのです。珠三郎は、この人にあいたい一心から、新公の口車にのせられて、このあやしい古船につれこまれるようなはめになったのではありませんか。

いい気持ちで夢を見ていたところへ、いきなり人間がふってきて、「兄さんたすけて……」とすがりつかれたのだから、おどろいて目をまるくした、この男こそ、あのキビキビした、めっぽう強い若者、山勘の源一兄いだったのです。

よし、安心しな

「なんだと？　お前はいったい、だれなんだい？」

「あなたは山鹿弦一郎、もしや、もしや、わたしの兄上ではないでしょうかッ？　わたしは、小さいとき別れた珠三郎です」

ことばせわしく問いかける珠三郎のことばを、この若者も聞きちがえてしまいました。

「なに？　山勘の源一ってなあおいらだが、お前、よくおれの名を知ってたな？　だが、おいらには、珠三郎なんて弟は……」

源一兄いが、ふしぎそうにいいかけるところへ、雲龍親方を先に、新公や他の連中が、ドヤドヤとはしごをつたっておりてきました。

「おお、源一兄い、つかまえたか。ふとい小童だ。性根がなおるまで、すのこ巻きにして水責めのお仕おきをしてくれよう」

親方は、おそろしい顔をして珠三郎に近づきます。

「アッ、助けてッ……」

珠三郎は、源一兄いの広い胸へしがみつく。そのいじらしいようすに、若者は心を動かしたらしく、珠三郎をかばうようにだきしめて、片手で親方の近づくのをさえぎりました。

「待った。親方、これはどうしたことなんだ？」

「ウン、裏切りだ。ふとい小童だから、一折檻しなきゃ、仲間のしめしがつかないんだ」

「仲間だって？　この子は、おいら、今はじめて見る子だぜ。ははあ、またどこかの小屋から、かどわかしてつれてきたんだな」

若者は、とがめるような口ぶりです。さすがの親方も、この若者には一目おいてるようすで、にが笑いしてると、そばから新公が口を出しました。

「源兄い、こういうわけだ。この子は、お前を小さいとき別れたじつの兄貴だと思いこんで、ほんとうをいえば、お前にあいたさにここへきたんだ。なにしろ、大月一座の若太夫だった子だか

ら、アメリカ行きの一座にぜひとも一枚くわえたい花形なのさ。ねえ、源兄い、お前はたしかに、この子の、ホラ、じつの兄さんにちがいないだろう？　この子は、兄さんのお前がすすめさえすれば、アメリカへでも、イギリスへでも、きっといっしょに行ってくれるんだ。ね、ね、だから、じつの兄さんのお前の口から、この子になっとくさせておくれよ。ねえ、親方、そうですね」

新公は、しきりに目にものをいわせて、山勘の源一兄いをくどきました。

「ふふン、じゃあ、新公、お前の小刀細工だな。だが、おいらをダシに使って、この子をだましてつれてきたと聞いては、だまっていられない。おいらは、そんなまがったことはだいきらいだ。第一、おいらはこの子の兄貴じゃない。おいら、珠三郎なんて弟は、持ったおぼえがないんだ」

源一兄いは、こんな仲間にいながら、まっ正直な若者らしい。

「フン、またいつものがんこなお株がはじまったな。おい、源一兄い、なんでもいいから、とにかく、その子をこっちへよこせよ」

親方がにがりきって、そういいました。

「いやだ。思いちがいにしろ、だまされたにしろ、おいらを兄貴としたって、ふところへとびこんだこの子は、だれにもわたされるもんかッ」

男らしい一言です。親方は、ギロリと白い目玉をむき出した。

「フン、わたされない？　じゃ、お前は、その子をどうするつもりなんだ？　まさか仲間の掟を

裏切って、逃がしてやる気じゃあるまいな」

「ウムッ……」

若者はことばにつまる。仲間のきびしい掟を裏切ったときの、仕返しのおそろしさは、若者もじゅうぶんに知っています。この見ず知らずの子どもをかばって、仲間の仕返しをまねくようなことは、かるがるしくできるものではありません。

だがしかし、この子は、じぶんを真実の兄と思いこんだばかりに、こんなおそろしいわなにおちたのだ。それを見殺しにするのは、持って生まれた俠気がすたる。源一兄いは考えこんでしまった。

珠三郎は、この若者がどうやら弦一郎兄上でなかったらしいので、ガッカリしてしまいましたが、鬼のようなこの仲間の中で、救いをもとめるのは、ただこの若者一人だと思うと、

「お願いです。助けてください。わたしは大望を持っているんです。アメリカなどへは、殺されたってゆけない身のうえなんですから……」

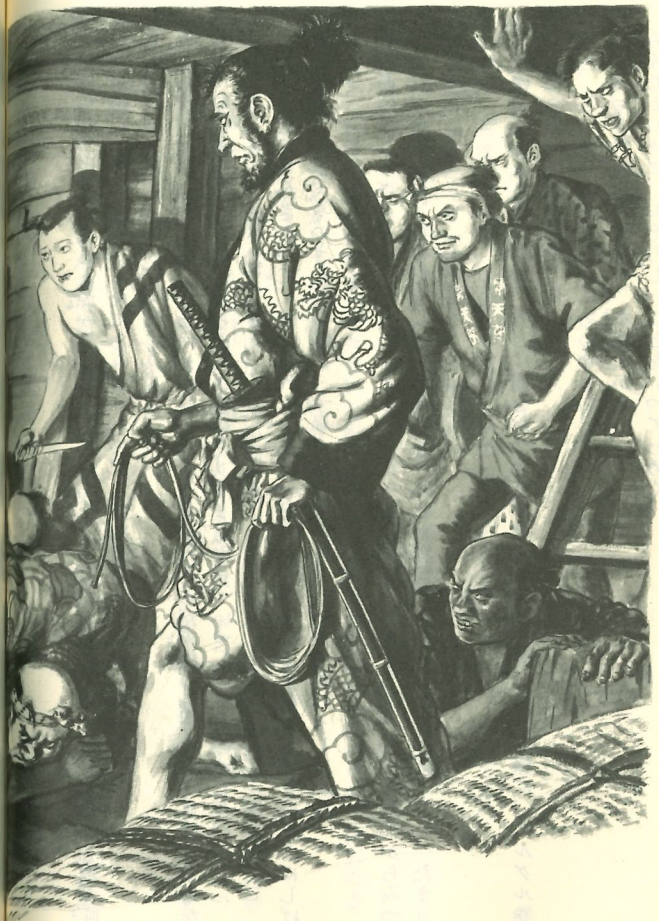
珠三郎の顔に浮かぶ、しんけんな色をジッと見ていた山勘の源一兄いは、

「よし、わかった。安心しな」

ああ、キッパリといいきった。この少年を救うためには、どんなおそろしい仕返しともたたかう、いさぎよい決心をかためたのです。

「源一兄い、じゃあお前は……」
親方の顔色がサッと変わった。
「ウン、おいらはこの子を、土手まで送っていってやるつもりだ。みんな、のいてくれ」
だが、親方の目にすごい殺気がひらめきました。
「おい、みんな、裏切り者だ。源一をぶちのめせ」
「がってんだッ」
さきほどから、まわりに集まってきていた船の中のあらくれ男ども二十人ばかりが、親方のさしずで、一時に若者めがけてとびかかってゆきました。
「よいしょッ、くるかッ」
珠三郎をうしろにして、仁王立ちになった山勘の源一兄い。この一座では曲持ち力持ちの花形太夫だし、下谷浅草界隈では素人角力の大関といわれるだけに、すごい怪力と早業とで、組みついてくる男どもを、かたっぱしから、パンパンパンと鉄砲の突き手ではじきとばします。多数をたのむ連中が、かえってひるむようすを見ると、
「どけ、おれがとっちめる」
雲龍親方は、みんなをどかせて前へ出ました。手には、親方が舞台で使う十八番の投げ縄がに

ぎられている。それを見ると源一兄いも、しんけんなようすで身がまえます。風を起こし雲を呼ぶ龍虎の戦い。息づまるようなにらみ合いから、ふいに親方が、ヤッとさけぶ。
「しまッたッ、やられたッ」
無念のさけび声は源一兄いでした。キラリとまっこうへとんだ手練の投げ縄が、さけるまもなく、源一兄いの五体に、蛇がからんだようにキリキリとまきついてしまったのでした。
「それ、みんなしておさえてしまえッ」
おおぜいは折りかさなって、まだあれくるう源一兄いを、いよいよ身動きもできぬほどにしばりあげてしまった。そのさわぎの間に、す早く逃げ出そうとした珠三郎のうしろから、
「待てッ、どこへうせるッ」
親方ののしる声とともに、またもとんできた一条の縄が、たちまち珠三郎の両足にからみつきました。なにしろ、荒牛をもしばりとめるといわれた雲龍親方じまんの投げ縄だから、たまりません。
「アッ……」
バッタリたおれる珠三郎を、親方は縄をたぐってひきよせると、源一兄い同様に、グルグル巻きにしばりあげてしまいました。
「親方、こいつらはどんなめにあわせるんだ？」
「さかさづりのお仕おきか？　水雑炊か？」
みんなが口々に、おそろしいことをいってわめく。



「待て待て、今夜はそんなことにかまってる間はないんだ。夜の明けぬうちに、一伝馬、沖へ積み出す荷物があるからな。そいつら二人は、荷役がすむまで、逃げ出さないように、船艙へとじこめておくがいい」

「おいきた、がってんだ」

五、六人で、身動きもできぬほどきびしくしばりあげられた二人をひっかつぐと、急なはしごをつたって船底へおりてゆく。船艙の厚い仕切り戸をあけると、山と積まれた梱包みやつづらの間へ、二人をドシンと投げこむと、また仕切り戸をしめて、外からガチンと錠をおろした連中の立ち去ってゆく足音が聞こえます。

あとは鼻をつままれてもわからない、まっ暗な船艙の中です。しばらくすると、すみずみからはい出してきたねずみどもが、チチッチッと鳴きさわいで、あたりをあばれはじめます。

手や足にくいいるようなきびしい縄目、身動きさえ容易でないので、珠三郎はころがされたまま横になって、ジッと目をつむっていました。

が、すこしはなれたところに投げ出されている源一兄いのほうは、さっきから、とてもジッとしていないようす。暗くてなにも見えないが、しきりにゴリゴリいわせたり、ひとりごとをいったり、りきんでみたり。

「ウウムッ。……エイッ。……なんのッ。……だめだな。これが鉄のくさりなら、ウムッ、かえってちぎれるコツがあるんだが。……エイッ。……どうしても切れないな、ウムッ、……ちくしょうッ……」

やみの中の友情

しばらくはひとり角力みたいにりきんでいた源一兄いも、あきれたようにぼやいて、りきむのをやめましたが、こんどは、暗がりの中から、珠三郎の方へ声をかけました。

「オイ、子ども。どこにいる？」

「ここです」

「こわいかい？」

「こわかないよ」

源一兄いは、度胸のいい珠三郎の答えに、満足したらしい。

「お前、さっき、おいらを、兄さんじゃないかといったねえ。どうしておいらを、お前の兄貴とまちがえたんだい？」

そこで、珠三郎は、おさないころ別れたきりで、顔はもとより、生死さえ知らない弦一郎兄上をたずねていることを、あらまし話して聞かせました。

「ははあン、山鹿弦一郎と、山勘の源一兄いと聞きちがえたというわけか。そいつは、とんでもないまちがいだったなあ。ハッハッ、新公がおいらを侍の子だなんて、でたらめをいったのか。悪いやつだなあ。なに……、兄貴ばかりじゃない……、十三年も牢屋にとらわれている父っさんのゆくえをたずねてる？　感心だな……。フン、切支丹牢の火つけはお前だったのか……。

えらいなあ、おいらはなんだか、お前が無性に気に入っちまったぜ。おいらは、小きみのいいやつが大すきなんだ。ウンウン、ここの雲龍って親方は、投げ縄は名人だが、腹がよくねえ。おいらもいや気がさしてたところだ。それに、お前は父さんを牢から助け出す大仕事があるんじゃあ、アメリカなんかへつれてゆかれちゃたいへんだ。よし、おいらがお前を、キットぶじに、ここから助け出して逃がしてやる。だが、この縄がとけなくちゃあ……。それに、今のうちになんとかして逃げ出さなくちゃ、あいつらは鬼のような……」

といいかけて、源一兄いはフトロをつぐみました。鬼より無慈悲残酷な、この一味の連中の、おそろしい折檻ぶりなど、うかつに話して聞かせたら、たいがいの子どもはおそろしさに目をまわしてしまうだろう、と、かしこくも考えたからでした。だが、いつまでも、縄がとけないでいると、今に、荷役のおわった後には、鬼のような連中のおそろしい手が、二人の身にせまるのは知れていました。

「ハテナ、なんとかいいくふうは……。あ、そうだ。待て待て、今、おいらがお前のそばまでころがっていって、お前の縄をといてやろう」

自分の縄さえとけぬのに、どうして他人の縄がとけるだろう？　だが、若者は、やみの中を、いも虫のように、ゴソゴソとからだをうねらせては い進みながら、珠三郎のそばへやってきた。

「さあ、手のところはどこだ？　こっちへ出しな。うんよし、わかった。今、おいらが縄をかみ切るから、しばらくジッとしてしんぼうしてるんだぜ」

若者は、珠三郎の手首のあたりをしめた縄に、ガッチリとかみつきました。石のように固い麻

縄を、歯でかみ切ろうとするのです。話し声がやむと、ねずみどもはすぐに、二人のそばまで出てきて走りまわります。大胆なやつは、からだの上へさえかけまわる。気味がわるいったらないのだが、身動きしては源一兄いにわるいから、珠三郎はからだを固くしてジッとしていました。

「ベッ、ベッ、おそろしくがんこな縄だなあ。珠太夫、もすこしだ、がまんしろよ」

「ええ」

源一兄いは、また無言になりました。珠三郎の手首には、源一兄いの熱い息がかかる。しばらくすると、源一兄いが、

「しめたッ、とうとう切れたぜッ。珠太夫、縄がとけたろう？　手を動かしてみな」

「アッ、とけたよ、兄さんッ」

「じゃ、こんどはおれの縄を、お前がとく番だ」

「あいよッ」

珠三郎は、やっと自由になったからだをとび起きると、いそいで源一兄いのからだへさぐりよりました。なでさぐって、やっと手にさわった結び目を、力いっぱいとこうとするが、捕り縄の名人雲龍が本気でしばった結び目だもの、子どもの知恵や力では、どうしてといていいやら、わからない。

「まだとけないかい？」

「ン、なかなか、固い。でも、今に……」

珠三郎がしきりにあせっているとき、ふいに、船の中がものさわがしくなってきて、かけちが

う人々の足音や、ののしりさわぐ人声が、あわただしく聞こえ出しました。
「おや、なんのさわぎだろう？」
「どうしたってんだろう？」
やみの中で、二人は思わず耳をかたむける。とたんに、甲板のあたりで、するどい銃声が二、三発、ものすごく鳴りひびきました。いよいよただことでないようすだ。

燃えゆく口火

「みんな、たいへんだッ、役人の手がまわったぞッ」
「鉄砲持って船やぐらへ集まれッ」
「土手はいちめんの御用ぢょうちんだッ。伝馬で逃げ出すしたくをしろッ」
口々にののしりさわぐ一味のさけび声。耳をすまして聞いていた源一兄いは、
「おお、珠太夫、あれを聞いたかい？　密貿易の悪事がろけんして、上役人がおしよせたらしいぜ。こいつは、ひょっとすると、おれたちの運がむいてきたなッ」
もし、上役人どもがこの一味をしばりあげるか、船から追っぱらってしまえば、かえってこの二人は、一味の非道な仕おきの責め苦からのがれられるかもしれません。だが、そうなると、おたずね者の珠三郎は、一つの難をのがれても、こんどは役人につかまってしまわなければなりません。

「アッ、そうか、お前は上役人につかまると、まずかったのだな。じゃあ、おいらをほっておいて、早く逃げ出すがいい」
「だって……」
死にものぐるいでじぶんの縄をかみ切ってくれた、この親切な若者をすてて、じぶん一人で逃げ出すなんて、そんな義理も恩も知らないまねは、珠三郎にはできません。
「とくよ。いそいでこの結びっ玉をとくから、兄さんもいっしょに逃げよう」
珠三郎は、爪の先の痛むのもかまわずに、固い結び目をとこうとあせります。そのとき、厚い仕きり板のむかい側へ、ドヤドヤとはいってきた二、三人の足音がしました。
「おい、こう四方八方、御用ぢょうちんにとりまかれたら、船を見すてて、大川へ逃げるよりしかたがない。だが、この船の金目のかかった積み荷を、ムザムザ役人どもにもってゆかすのは、いまいましいからな。甚六、喜運次、その煙硝樽のかがみをぶちぬけ」
雲龍親方のおちついた声。
「じゃ、この火薬を……？」
「そうだ。口火に火をつけておいて、逃げ出すのだ。今に役人どもが、この船に乗り移ったころ、ドカンと一発、みんなふきとばしてしまってやるんだ」
おそろしいことをいう。やがて、そのおそろしいしたくができたか、雲龍たちは、いそぎ足に出ていってしまいました。
仕きり板のすきまから、火縄の焼けこげる、かすかなにおいがしてきはじめました。ああ、

とんでもない。口火が刻々に火薬樽へ燃えてゆくしるしだ。珠三郎と源一兄いとは、しばらくはことばも出ないほどのおそろしさに、息をのみこみました。仕きり板一枚へだてたむこう側で、火薬樽が爆発したら！　だが、それを消しとめる手段はないのです。

「珠太夫、おいらのことはかまわずに、早く、早く逃げなきゃいけない。お逃げったら」

源一兄いは、この場にのぞんでも、じぶんのことはいわないで、珠三郎の身を案じている。なんという美しい心の若者だ！

「もうすぐだ。すぐ縄がとけるから、いっしょに逃げようよ」

珠三郎も、若者におとらぬ美しい心持ち。しかも、どうあせっても、なかなかすぐにとける縄でないことも、知りきっているのですけれど。

雲龍親方たち一味は、早くも伝馬でこぎ去ったらしく、船の中はにわかにしんとしてきました。するとこのとき、船艙のすぐ上の、胴の間あたりで、しきりに人を呼ぶ、しかし、どこか間ののびた声が聞こえました。

「おーい、珠兄さんやーい、珠兄さんはどこにいるウ、天命堂が加勢にきたぞオ」

あ、天命堂の声だ。珠三郎のあとをつけて、ノコノコとここまでやってきたのであろうか？

それにしても、おそろしい火薬樽に、今にも口火が燃え移ろうとしているのを、夢にも知らないで、船の中をうろつきまわっているお人よしの天命堂のおじさんの運命も、船艙の中の二人同様、身の毛もよだつようなあやうさではないか。

こういう間にも、口火はどんどん燃えてゆきます。

第九回　みどりの運命

大爆発

「珠兄さんやーい、おーい、珠兄さんはどこにいるッ？　珠兄さんやーい」

おそろしい火薬樽に、今にも口火が燃えうつろうとしていることは、ヘボ易者身のうえ知らずで、天命堂のおじさんは夢にも知らないのです。新公と珠三郎のあとをつけて、とうとうこの古船をかぎあてたらしいが、どう立ちまわったのか、捕り方役人どもにもあやしまれず、雲龍親方の一味の者にもとがめられないで、この捕り物さわぎのドサクサにまぎれて、うまく船の中へもぐりこんだ手なみは、天命堂としてはめずらしい大できでした。

船艙の中にからだを固くして、最後のときを待つ思いの珠三郎の耳に、頭の上あたりで呼びたてるその声が聞こえましたから、われを忘れて、

「あッ、天命堂のおじさんだッ。おーい、天命堂のおじさんッ、おいらはここにいるよッ」

と、あおむいてどなりました。
「あッ、いたかーッ。……この下だなッ。よし、今おりてゆくぞッ」
急なはしごをかけおりる足音。
「どこだ？　どこだ？　珠兄さん」
「ここだよ」
「あっ、わかった。ほい、錠がおりてるな」
天命堂は、厚い仕きり板の錠を、ガチャガチャさせていたが、どんな手ぎわを使ったものか、すぐ仕きり戸をあけて、暗い船艙の中をのぞきこみました。
「さあ、戸があいたよ、珠兄さん出ておいで……」
「あッ、戸があいたな。さあ、珠太夫、逃げるんだ、早く今の間に逃げないとあぶないぞッ」
源一兄いは今もなお、珠三郎の身を気づかいます。
「あ、だれだね？　そこにいるのは？」
「おお、おじさん、おねがいです。この人の縄を、といてあげてください。わたしには、どうしてもとけないんだ」
「なになに、よろしい。どれ、どこだ？」
天命堂は手さぐりに近づいてゆこうとする。
「だめだッ、二人とも、早く逃げないと、殺されるぞッ」
源一兄いは、気ちがいのようにさけぶ。

「いや、まだだいじょうぶだよ。役人衆はな、伝馬で逃げた連中を追って、川下の方へ気をとられてるから、縄をとく間ぐらいは……。や、これはこったしばり方だな。……ほい、とけたよ。兄さん、……手足をのばしてごらん」
天命堂は、名人雲龍が結んだ縄目を苦もなくといてしまって、得意そうです。だが、手足が自由になった源一兄いは、船板の上にとび起きると、ものをもいわず、珠三郎と天命堂とをだくようにして船艙をとび出しました。
「あ、どうしたのだナ、なにをそんなに……」
「煙硝樽に火がはいりかけてるんだ。早く船の外へ逃げなくちゃ……」
「なにッ？　あッ、こげくさいのは口火のにおいかッ。そいつはたいへんだッ」
これには、のんき者の天命堂も、思わず声をつつぬかせます。今までも、かすかな火縄のこげるにおいが、鼻についていたところなので、おそろしいきけんにぎょうてんしたようす。三人は暗い船底から一かたまりになって、急なはしごをかけのぼって甲板の上へ出ました。
土手にはいちめん、ほたる火のように御用ぢょうちんがならび、川下の方には、大捕り物のさいちゅうらしく、火影が入りみだれ、ののしりさけぶ声がさわがしい。だが、分秒を争う三人は、そんな景色も物音も、目にも耳にもはいるはずはない。
「さあ、早く艫から川へとびこんだッ」
天命堂がそういって、三人むちゅうで艫の方へかけ出したとたんに、足でふむ船板が、にわかにあやしい震動をつたえたとみるせつな、ごおッ、天も地もくだけるような、すさまじいひびき

が起こって、船底からまっかな火柱が、甲板をふきぬいてひらめきたち、あっというまもなく、この古船は、三人を乗せたまま、木っ葉みじんに、くだけ、さけ、とび散ってしまったのです。

遠まいていた捕り手の人数も、このすさまじい爆発の光景に、思わずワッとときの声をあげて浮き足立ちます。

たのもしい友情

密貿易の昇天斎雲龍一味の大捕り物と、古船大爆発のうわさとが、ひとしきり江戸の町々をにぎわしましたが、七十五日たたぬ間に、おおかたの人から忘れられてしまいました。

するとまもなく、焼きつくような炎熱の夏がきて、おそろしい疫病が、江戸の市中へひろがりました。

ここは隅田川のほとり、石浜のやぶかげに、近ごろできた一軒のかまぼこ小屋。今、その小屋のたれむしろをあげて半分姿をあらわしたのは、あの大爆発に運よく死にもしなかったか、山勘の源一兄いの、あいかわらずの元気な姿でした。

「珠太夫、苦しくてもじッとがまんしてなよ。今、熱さましの妙薬を煎じてのませるからな」

小屋の中へ、やさしくことばをかけながら、やがてあたりの土をほり返して、地中から見つけ出したのは、大小五、六びきのみみずでした。源一兄いはそのみみずの泥をしごいて、欠け土瓶に入れると、石を集めてきずいたかまどにのせて、枯れ木を燃しつけます。

「今すぐ薬ができるぜ。なに？　汗が出て気持ちがわるい？　よし、今ふいてやるよ」

情愛のあふれた看護ぶりです。小屋の内の病人は、珠三郎でした。

「兄さん、ありがとう」

珠三郎は熱でうるんだ目で、この親切な若者を見つめながら、心からうれしそうに礼をのべます。

「なんの、礼などいうやつがあるものか。どうだな、ちっとは気持ちがよくなったかい？」

「エエ、きょうはたいへん気分がいいの」

「そうかい。なにしろ、あぶない峠はもうこしたんだからな。これからは、なおる一方さ」

「ねえ、兄さん」

「なんだい、珠太夫」

「あのとき、天命堂のおじさんは、死んじまったのかしら？」

「そうだなあ。とっさの場合でむちゅうだったが、大川ン中でふしぎにもお前とおいらとは、うまく同じところへはねとばされて、命びろいしたけんど、あの易者はひょっとすると、助からなかったんじゃないかと思うよ」

「助かってるといいんだけどねえ」

「ウン、ことによったら助かってるかもしれないがなあ」

源一兄いは、口ではそういったが、あのときも、しきりに川の中を見まわして、さがしもとめた天命堂の姿がどこにも見あたらなかったのを思い出すと、しょせん助かってはいないような気

がしてなりません。
「珠太夫、早く元気になっとくれ。そうしたら、お前の父っさんのゆくえをさがす大望に、おいらもどんなにだって力を貸してやるからな」
「ありがとう」
なんというたのもしい若者の心持ちでしょう。おそろしい生死の間をくぐりぬけてきた二人の間には、真の兄弟のような情愛さえできていたのです。
「そうそう、おまえが守り袋の中にしまってるといった、『なんとかの図解』というやつなあ。もしかすると、父っさんのゆくえを知る、手がかりになるしろ物じゃないのかい？」
「あ、ほんとうにそうだ。あの『七つの抜け穴の図解』のために、お父上は幕府ではとてもたいせつな囚人なのだというから、もしか、あれをしらべてみたら……」
「ウン、なにかうまい手がかりがわかるかもしれないな。ひとつ、しらべてみないかい」
「じゃ、兄さん、守り袋の中にはいってるから、出してみておくれよ」
「いいとも。おお、これだな、守り袋は」

ぬすまれた図解

源一兄いは、珠三郎のふところから、ソッとたいせつそうに守り袋をひき出しました。
「三葉姉さんが、糸でもって縫いこんでくれたの。糸をといてみてください」

「よしきた」
源一兄いは、かたくとじた糸をひきといて、守り袋の口をあけ、中をのぞきましたが、みょうな顔をして、
「おや、珠太夫、お守り札のほかには、なにもはいっていないぜ」
「エッ、そんなこと。……たしかにはいってるんです。こよりひもになってるんですよ」
「ないよ。ほら、これを見な」
珠三郎は守り袋を受けとって、中をしらべてみていたが、サッと顔色がかわりました。
「あッ、ほんとだッ、なくなったッ」
珠三郎は、急に目の前がまっ暗になったような気持ちでした。あの図解がこっちの手にあるうちは、幕府でお父上のお命を、どうすることもできないばかりか、お父上を幕府の手からとりもどすことのできるのも、天地の間に、ただあの図解があるばかりだとは、死ぬまぎわの東吉親方からも、いつかの清川八郎からも聞かされていたのです。そのたいせつな図解のこよりひもが、知らぬ間に紛失していた！
「兄さん、だれかにぬすまれたんですッ」
珠三郎はオロオロ声でいいました。
「えッ、ぬすまれた？　ぬすんだやつの心あたりはないのかい？」
「心あたりって、わたしは眠った間でも、人が守り袋にさわれば、すぐ気がつくように、はだへ固くゆわえつけておいたんだから……。アッ、あの切支丹牢で気を失っていたとき、もしや…

…。でも、まさか黒頭巾のおじさんが、そんなことを……」

じぶんが気のつかぬ間に、守り袋の口があけられ、またもと通りぬいなおされたとすれば、たった一つ思いあたるのは、あのときばかりです。雑司ヶ谷の良伯医者の家で、正気にかえったときまで、どこをどうつれてゆかれたか、とにかく、じぶんといっしょにいたのは、死んだと聞かされた牢の中の奇妙な囚人と、あの快傑黒頭巾とよりほかにはないのだから、しかたがない。

「いや、珠太夫、そりゃあおまえが知らぬ間に、黒頭巾がぬきとったにちがいないぜ。黒頭巾がおまえを、かげになり日なたになって助けたというのも、どこかでその図解のことをかぎつけて、手に入れる折をねらっていたにちがいない。清川八郎ってやつだって、やっぱりその図解に目をつけてたって、おまえ、きのうも話してたじゃないか」

源一兄いは、キッパリいいきりました。人は見かけによらないっていうけれど、ほんとに、そうかもしれない。しんせつらしく見せかけて、あやうく図解をあざむき取ろうとした清川八郎のような者もいたのだから、……源一兄いが黒頭巾をうたがうのもむりはない。

だが、ほんとうに、あのなさけ深くて、正しくて強くて、男らしい武士のかがみのような黒頭巾のおじさんが、「七つの抜け穴の図解」に目をかけて、ぬすみ取ったのかしら？　そう思っても、なぜか、うらめもしないし、にくめない、あのなつかしい快傑黒頭巾。珠三郎はわけもなくなさけなく悲しくなって、自然に涙が目がしらににじみでました。

「珠太夫、なにもそう、ガッカリすることはねえ。黒頭巾のやつが、どれほどすごい腕前か知らないが、おいらがお前に力を貸して、きっと、こよりひもはとり返してやるから、気を落とさな

いで、早くじょうぶなからだになるんだぜ」

「ああ、だけど……」

珠三郎は考えこんでいましたが、ふと、いきおいづいていいました。

「ねえ、おいら、こう思うんだけど、……三葉姉さんが、黒頭巾を呼び出す呼子笛を持ってお邸へあがってるから、一度その笛を借りてきて、黒頭巾のおじさんを呼び出して、たずねてみたら、ほんとうのことがわかるかも……」

「ふん、そんな笛があるなら、ひとつ、やってみるかな。……アッ、さっきの薬が煮つまッたッ……」

ぬすみ聞き

青江の邸につとめている三葉のみどりは、黒頭巾を助けて、ソッとお邸から抜け出させたあの当座は、今にも、そのことが露見しはしないかと、安らかな気持ちはしませんでした。殿様はじめ、用人や老女の目までが、じぶんの秘密を見通していそうに思えてなりませんでした。

でも、あのやさしい黒頭巾の口から、珠三郎が生きてると、ハッキリ聞いたときのうれしさは、天にものぼるばかりでした。

その後の三葉は、奉公第一に心がけて、いよいよ身をつつしんで働きましたので、かえって殿様のおめにかなったのか、やがて、表づとめにまわされることになったのは、しあわせでした。

浪人目付のお役柄だけに、このごろのように世がみだれさわがしくなると、来客の出入りも、めっきりふえました。その来客に、お茶やおたばこ盆、お膳部などを運ぶのが、三葉のつとめなのですから、ゆだんなく気をくばっていたら、どんな拍子で、お父上のゆくえを知る手がかりが聞き出せるかもしれません。

三葉は、お茶など運ぶとき、ふすまごしに聞こえる話し声に、どんなに小さな胸をおどらせたことでしょう。けれども、ふすまの外の立ち聞きなどという大胆なことは、とてもこわくてできません。

きょうのお客人は、殿様の上役にあたる、陸海軍奉行、勘定奉行という重いお役を二つも兼ねた、小栗上野介というえらいかただと聞いて、そこつのないように気をつけながら、お茶碗を目八分にささげて近づくふすまの向こうから、

「では、『抜け穴の図解』は、山鹿のせがれのゆくえとともに、知れなくなってしまったといわれるか」

という、はげしい客の語気が雷のように三葉の耳を打ちました。ハッと思って思わず立ちすくむとき、主人の声で、

「いや『図解』はこの小せがれの手から、もっとほかのものの手に移っていると思えるふしがござる」

ああ、たいへんな密談を聞いてしまいました。三葉は、そのまま立ちすくんで動けなくなりました。大胆不敵な立ち聞きを、あえてするのではない。出るに出られぬ気持ちで立ち往生したので、いやでもつぎのことばも耳にはいります。

「そりゃまたいったい、何者の手にな？」

客のことばには、うれいのひびきがこもって聞こえる。

「おそらく、『図解』は山鹿の小せがれの手から、かの黒頭巾の手にわたったのではないかと思われます」

「なにッ、黒頭巾の手に？　……」

客もおどろいた声音だが、三葉もさらにハッとする。そのとき、ふすまごしに、主人のするどい声音が、氷の切っ先のようにとんできて、立ちすくんだ三葉の耳をさしつらぬきました。

「だれじゃ？　ふすまの外にいるのは」

「ハ、ハイ……」

三葉は思わず答えてしまいました。からだがこおりのようにふるえだす。それでもお茶をこぼさぬよう、そこつをしないようにと、ひっしで茶たくをささげながら、ふすまの外へひざをつきました。

「みどりじゃな？」

「ハイ」

「なにをいたしておった？　ふすまをあけてみい」

だが、青江下野の声音には、ちっともけわしさがない。三葉がふるえる手でふすまをソッとあけて頭をさげると、四つのするどい目が同時にその姿を見つめました。

「おお、お茶を持ってまいったか。よしよし」
青江下野は、目で客人の前をさす。それに力を得て、三葉はいっしょうけんめいで、やっと上座の小栗上野介の前へ、お茶をさし出しました。
「みどり、ただいまはちと内々の要談中じゃ。次へさがったら、だれにも、呼ぶまでまいってはならぬと申しつたえい」
「ハ、ハイ」

百虫館

からだじゅうに冷たい汗をかいて、まだドキドキする胸をおさえながら、三葉は腰元部屋へさがったが、すわったり立ったりして、おちつきません。
「山鹿の小せがれ」というのは、弟の珠三郎のことではないか。
「抜け穴の図解」といい「黒頭巾」といい、みなわが身に深いかかわりのあることばかり。ああ今、お客様と殿様とが、じぶんのさぐり聞きたいことを話し合っていらっしゃるにちがいないのだ。「抜け穴の図解」が問題にされているいじょう、お父上のことが、二人の間に語られてるにちがいない。とすれば、あの密談が、ソックリぬすみ聞かれたなら、きっとお父上の秘密牢のありかも知れる。
——でも、さっきこそ、ことなくすんだけど、今度ぬすみ聞きしているところを見とがめられたら、それこそ、のがれることのできぬ身の破滅。
——でも、珠ちゃんはあの幼い身で、お父上をお救いするために、おそろしい切支丹牢へさえしのびこんでいったのだ。わたしだって、お仕おきをおそれて、たいせつな手がかりの話を聞きのがしては、珠ちゃんにはずかしい。
三葉は、思いきって立ちあがりました。
(ああ、だけど、天井裏の黒頭巾様をさえ、すぐお見ぬきあそばした殿様のご眼力だもの、ぬすみ聞きなどしていても、さっきのようにすぐ見とがめられてしまうのは知れている。……でも、こうしてるうちに、たいせつな話を聞きもらしたら……)
三葉はひざから下の力がぬけてしまったような気持ちで、思わずそばの柱にとりすがりました。
三葉が、腰元部屋でただ一人、小さな胸を苦しめてハラハラしているその時分、客間では主人と来客との間に、たいせつな密談が、ズンズン進められていました。
「黒頭巾が『図解』を持っているとすると、うばいもどすのは容易であるまいの？」
幕末の英傑といわれた小栗上野介さえ、黒頭巾の名には、ただならず心をいためるらしい。しかし、青江下野はひややかにほほえみました。
「いや、『図解』のありかが知れぬときよりは、むしろしまつがよろしい。それに『図解』がまんいちにも、薩摩の西郷(隆盛)とか、長州の高杉(晋作)とかいう連中の手にわたると、幕府三百年の礎をあやうくするほどの働きもするであろうが、たかが黒頭巾のごとき……」

青江下野は、眼中に快傑黒頭巾なきようすです。だが、小栗上野介はやはり不安そうに、
「しかし、黒頭巾も西郷、高杉におとらぬ男じゃよ。しかも勤王党に心をかよわすきゃつだから、『図解』を西郷らに手わたさぬとはいいきれまい」
「そのご心配は当分無用です。というのは、あの黒頭巾めは、十三年幽囚の山鹿士行を、われわれの手からうばいかえすために、あの『図解』を手にいれたのでござるから、その目的をはたさぬうちは、『図解』を他人の手にわたす心配はぜったいにござるまい。ところが、その山鹿士行は、ご承知のごとくに、なん人もふれることのできぬ、不落の要害ともいうべき、あの百虫館の秘密牢につないであるのですから、百万の番兵をつけておくよりもっとたしかです。そのうえ、黒頭巾めも近いうちにおびきよせて、からめとる秘計も、ちゃんとこの胸にござれば」
青江下野は、虹のような気焔をはきます。

破滅の淵へ

死にものぐるいの勇気と決心とをふるい起こして、三葉が、このおそろしい密談をぬすみ聞きするために、ふたたびそっとふすまの外へ忍びよったちょうどそのとき、青江下野のこの最後のことばを聞いたのでした。
(ひゃくちゅうかん？　ひゃくちゅうかんとは、いったいどこのお城なのだろう？　それさえ知れれば……)

三葉は小さい胸をとどろかせました。ああ、よかった。父上の秘密牢のある要害の名が、ひゃくちゅうかんということだけは知れたのだ。
だが、「ひゃくちゅうかん」とは、聞いたこともない名でした。むろん、いくら考えても、その場所さえ見当がつきません。もしかその場所の話が出るかと、耳をすましていると、青江下野は、急に話題をかえてしまいました。
「ときに、清川八郎から、陸海軍奉行のお手もとへ、近く募集した新徴組隊士ご検閲のことを、ねがいでてまいりましたかな？」
「ウム、手もとへ書類が出ておったよ。だが、わしは、どうも、あの清川八郎という男は気にくわん。みょうに陰険なところのある男じゃよ」
「まったく、大事をたくすべき人物ではありませんな。どこかゆだんのできぬところがあるし、才気にまかせて小細工をやりすぎます」
話は、だんだんと三葉の目的に縁遠いほうへはいってゆくようすでしたから、三葉は人目にかかってあやしまれぬうちに、ソッとそこをはなれようと、心のうちで幾度も「ひゃくちゅうかん」の名をくり返しながら、ガクガクする膝をふみしめて、一足二足、しきいぎわを立ちのこうとしたときでした。
「これッ、そなたはそこで、なにをしているッ。あやしいやつめがッ」
縁がわの方で、白髪頭をふり立てながらどなる、用人原口十太夫の声が、あわれな三葉の肝をひやしました。

「なにごとじゃ？　十太夫」
ふすまの中から、青江下野の声がする。三葉はサッと血の気を失うと、おののきふるえて、生きた心持ちもなく、その場へくず折れてしまいました。
「殿様、このふらち者めが、ふすまのかげにいて、ご内談をぬすみ聞きいたしておりましたわ」
十太夫がにくにくしげにいいますと、ふすまがサッと開いて、しきいぎわにスラリと高い青江下野の姿があらわれました。あの青白い顔に、怒りの色がうす赤く浮かびあがっています。
「ウム、みどりじゃな」
「……」
客座の小栗上野介は、するどくみどりの方を見やると、
「その少女は、さいぜん茶を運んでまいった者のようじゃな？」
「さよう。おおかた乱心でもいたしたものと思われます。十太夫、あとで わしが仔細を吟味する。それまでそやつを、物の具庫へでもおしこめて、きびしく見はらせておけ」
「ハッ。これ、みどり、太いやつだ。さあ、立たぬかッ」
三葉は、紙のように青ざめてはいましたが、このときはもう、覚悟をきわめて、とりみだした見苦しいさまもなく、十太夫にひき立てられて、さがってゆきました。
（小娘ながら不敵な曲者。小栗上野介様と殿様とのご内談をぬすみ聞きするとは、あきれはてたやつだ。ことによると、薩摩か長州の勤王党のやつらのまわし者で、幕府の機密をさぐりに、当邸へ腰元にばけて住みこみおったのかもしれん。いや、このあいだ殿様お居間の天井裏へ、黒

頭巾めが忍びこんで大さわぎしたためしもあるのだから、小娘だといって、ゆだんはならぬ。うかつなことをして、とり逃がしでもしたならば、しわ腹をかき切っても、申しわけが相立たんわい）
忠義一徹な十太夫は、心の中でそう思いました。そこで、物の具庫へも、じぶんがひき立ててゆき、じぶんが見はりするつもり。

笛の責め苦

なにしろ、八千石の大旗本の青江です。庫の中の武器の類はたいしたものでした。鎧櫃、槍、刀、弓矢、鉄砲、馬具や指し物の類が、ギッシリとつまっています。重いとびらを引きたてると、明かりとりの小窓からうす明るい光がさしこむばかり。樟脳のにおいとかびのにおいがしめっぽく鼻をついて、あまりいい気持ちの場所ではない。
三葉を板の間におしすえると、十太夫は、すぐその鼻の先へ、鎧櫃を一つひきよせて腰をおろし、まるでにらめっこでもはじめるようにがんばりました。
少女ながらも、山鹿士行の血をうけた三葉です。今はもう、覚悟をきめて悪びれたさまもありません。
（ああ、覚悟していた運命が、とうとうきてしまったのだわ。このお邸へあがるときから、きょうの覚悟はしていました。たとえ手討ちにされても、悲しいとは思わないけれど、でも、やっと

のことで、お父上の秘密牢のありかが、「ひゃくちゅうかん」というところだと、殿様の口からたしかに聞き出していながら、それを珠ちゃんにも、黒頭巾様にも、知らせることもできないで、死んでしまうのがくやしい。もし御用人にすきでもあったら、死にものぐるいでつきたおしてでも、逃げ出してみるんだけど、ああ、だめだわ、あんなに用心していられては……）

まったく、肩肘いからせた十太夫の姿が、すぐ鼻さきにあるだけに、どうすることもできません。

今まで、快傑黒頭巾に救われたり、天命堂のおじさんの思わぬ助けで、いくたびかあやうい運命をも、ふしぎとくぐりぬけてきた身だけど、今度ばかりは、助かるすべもありません。

この絶体絶命のばあい、まんいちの神だのみとも思われる望みは、あの呼子笛を鳴らして、黒頭巾を呼び出し、救いをもとめてみることだけど、それはこの前に一度、ウッカリふいたばかりに、黒頭巾にあれほど重い手傷をおわせてしまった、にがい思い出があるのですもの。

（今度こそは、死んでもこの笛はふいてはならない。それに、この間のおけがのあとだって、どんなことになったのやら……）

どんなに心細く悲しいことがあっても、この笛はふくまい、ふくまい、と、けなげにも三葉は思いきめたのです。

ほどなく、小栗上野介が帰っていったらしく、青江下野が、庫の戸口に姿をあらわしました。

「おお、殿様、小栗の御前は？」

「今帰られた。十太夫もうよい。わしが吟味するから、そちはさがって休息しろ」

「ハッ、それでは御意にしたがいまして」

出てゆく十太夫と入れ代わって、青江下野は悠然と鎧櫃に腰をおろしました。

「みどり、顔をあげい」

射通すような目の光。三葉は五体がすくむような思いです。

「そなた、めずらしい肌守りを持っているそうだな。これへとり出して見せぬか？」

ぬすみ聞きのことは一言もしからずとがめず、いきなり青江下野が意外なことをいいましたので、三葉は急にはそのことばの意味がのみこめないでいました。

「ハハハ、肌守りではなかったかな。とにかく、笛だよ。そちが人に秘してたいせつに持っている呼子笛だ。その笛の音色が聞きたい。ふいてみよ」

あッ、青江下野の、三葉にたいする責め手は、あまりにも思いがけないものでした。しかも、三葉にとって、これほど痛い急所はないのを、青江下野はどうして見ぬいていたのでしょう？

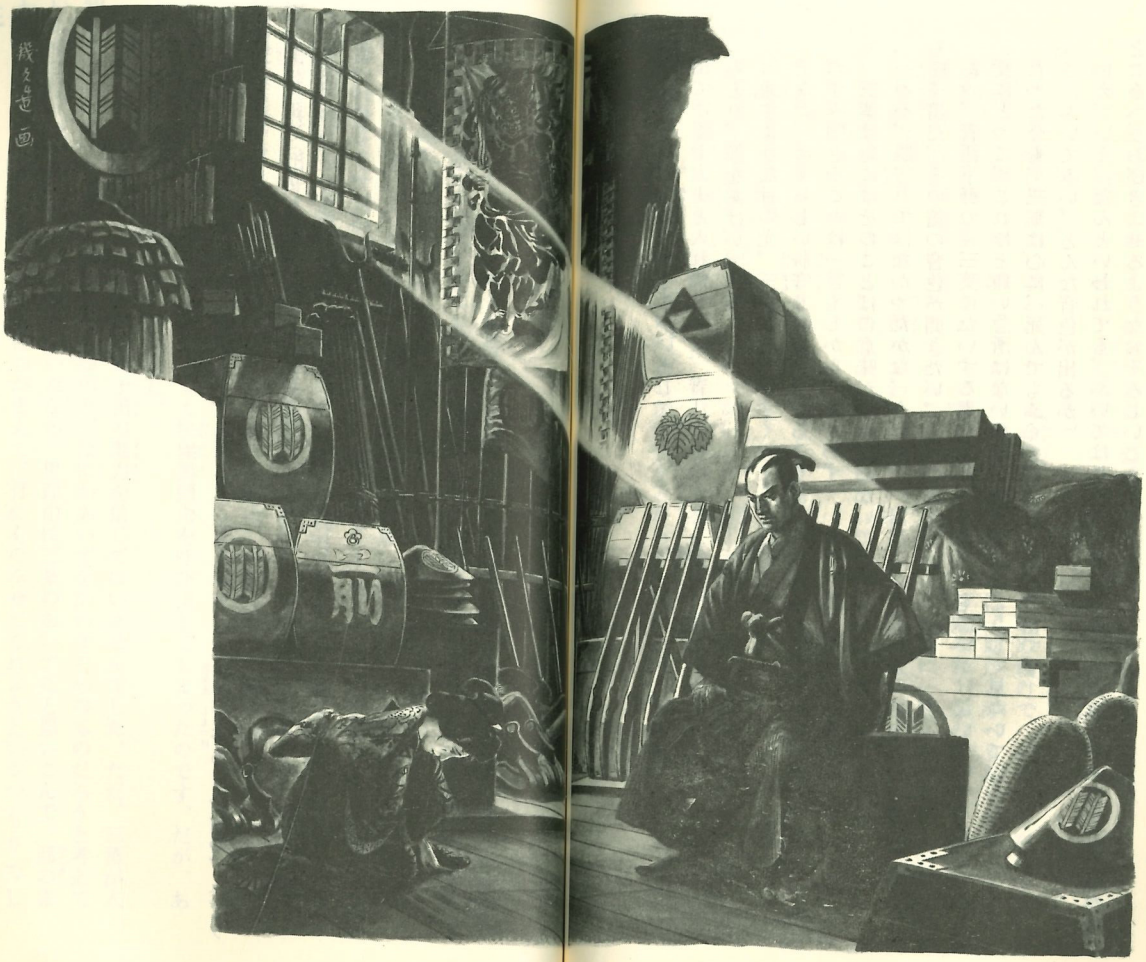
たった今も、三葉は心に、死んでもふくまいと誓ったその笛です。

「さ、ふいてみい。どんな音色が出るか」

いえ、いえ、なんといわれても、ふいてはならぬ。大恩ある黒頭巾様をみすみす敵の罠のあるところへ、おびきよせるようなおそろしいことが、どうしてできましょう。

「そちがふくのがいやなら、わしがふいてみせる。みどり、その笛をこれへ出せ」

ああ、もうのっぴきならぬ運命だ。



第十回　一人二役

笛の魔力

蛙が蛇にらまれると、すくみあがって動けなくなります。今、青江下野の目の前の、みどりの三葉もちょうどそれとおなじこと。

「笛をこれへ出せと申すのが、わからぬか」

青江下野の声がきびしくとがる。でも、おそろしいこの人の手に、どうしてわたせましょう。三葉はむちゅうで両のたもとを胸にあてて、呼子笛をしっかりだきしめます。青江下野はそれを見るとにがりきって、立ち上がって三葉のそばへよる。

「しぶといやつめ……」

こばむ力もない三葉のふところからひき出した呼子笛を、冷たいあざ笑いの浮かんだくちびるにあてると、……ピリ　ピリ　ピリッ、澄んだ笛の音が陰気な庫の中にひびきました。三葉がハ

ッとからだを固くしたとたんに、庫の戸口にちらっと人影がさしました。青江下野が、なんの気もなくその方へ目をやったとき、ガラリと網戸をあけて、庫の中へはいってきた者がある。大きな落ち葉籠をせおって、手ぬぐいでほおかむりをした、いきな姿の植木屋だ。

しかし、ほおかむりした手ぬぐいの下からは、奇怪な黒い頭巾のきれがはみ出して見える。

「やや、おのれは……」

呼子笛を投げすてた青江下野、血相かえて、小刀の柄もくだけよとにぎりしめます。あやしい植木屋は、おちつきはらって、手早く片手で戸をしめきると、背の籠をゆり落とし、ほおかむりの手ぬぐいをパッとはらいのける。と、あらわれた顔は、まぎれもない黒頭巾だったのです。

「青江下野、わたしを呼んだのは何用だ？」

おお、夢ではないか？　呼子笛はまさしく快傑黒頭巾を呼び出してしまったのです。だが、あまりに早く、あまりに意外なあらわれ方だ。

もともと青江下野は、三葉ほどには呼子笛の魔力を信じてはいませんでした。ただ、三葉が人知れず持ってるこの笛は、邸の外の黒頭巾と、なにかあいずをかわすためのものだろうと考えていたのです。だから、この笛の音を聞いたなら、黒頭巾は三葉のあいずだと思いこんで、邸のまわりに近づくにちがいない。そこを待ちかまえて、目にものみせてくれようというつもりでした。

だのに、このま昼中、しかも邸の奥庭へ、出入りの植木屋らしくばけたにしても、黒頭巾をわずかに手ぬぐいのほおかむりくらいでごまかして、こうまで大胆不敵に、自由自在にあらわれよ

うとは、まさかに思いかけませんでした。
「ウム黒頭巾、とんで火に入る虫けらめ！」
「ハッハッ、ご招待のあいさつが、それか。いたみいったご家風だな、ハッハッハッ」
ただひとり死地へのりこんできた者とも思えない、大胆不敵な高笑いです。青江下野はうずくような怒りに青ざめて、キッと居合いの身がまえのまま敵をにらむ。うす暗い庫の中に、すごい殺気がみちます。
三葉は息づまる思いで、この両雄のおそろしいにらみあいを見まもります。いかめしい武器のたぐいがギッシリつまった、うす暗い庫の光景は、まことに龍虎相争うにふさわしい場所です。ならず、一方がたおれねばやまぬ運命だ。
以前、切支丹牢の塀外の、あの最初の出あいのときは、まず黒頭巾の頭と業とのさえが、青江下野を手玉にとりました。二どめは天井裏の騒動で、あのときは青江下野のするどい眼光と、新式の短銃の一発とが、完全に黒頭巾をたたきつけてしまいました。この一勝一敗のあとをうけて、今ぞ三度、両雄はここに相対したのです。

しびれ薬

当代無双の青江下野の剣。鬼神もおどろく黒頭巾の業。今この両者が、たがいに精根をかたむ

けつくして、最後の決勝を争うのだから、天下にこれほどの見物はありますまい。だが、ただ一人の見物人の三葉の身になったら、そんなどころじゃない。
いきどおりのほのおが胸を焼くうちにも、冷たいおちつきはうしなわぬ青江下野。あのおそるべき居合いのかまえのままで、ジリジリと黒頭巾にせまる。が、その小きざみの足どりが、ハタと一瞬、くぎづけになりました。
なぜだ？　戸口を背にして立つ快傑黒頭巾の右手に、いつのまにかにぎられていた短銃が、まさにわが胸もとをねらっているのを見いだしたからです。
ああ、きょうまで一ども、人の血を流したことのない黒頭巾だのに、このあいだ天井裏で受けた一撃のうらみを忘れかねて、今、仇敵青江下野の命をうばおうという心になったのか？
「こしゃくなッ……」
もとより青江下野、飛び道具におそれる男でないばかりか、殿様そだちの強い癇癖が、かえっておさえきれなくなってしまいました。
「おのれッ……」
不敵にも、銃口のま正面から身をおどらせて、手練の抜き討ちがいなずまのごとくに……。
（あぶないッ、黒頭巾様が……）
三葉は氷の水をあびせられたように、ゾッとして思わず目をとじる。その耳たぶをつんざくように、一発の銃声が鳴りひびきました。
「ウウウウムッ」

しぼるようなうめき声。つづいてだれかが床にたおれるひびき。ああ、殿様が射たれなすったか？　黒頭巾様が切られなすったか？　三葉はおそろしさをこらえて、その場のようすを見とどけようと、そっと顔をあげたとき、フト、鼻をつく異様なにおいを、胸いっぱいにすいこんでしまいました。

「あっ、三葉どの、顔をふせて……」

だれかがさけぶのを、遠い夢のように聞いた三葉は、はげしいめまいにおそわれて、そのまま、なにもわからなくなってしまいました。

庫の中いちめんに立ちこめた、この異様なにおいは、和蘭医者が手術に用いる、しびれ薬にどこか似ていました。すなわち、青江下野が抜き討ちの一刀をさや走らせようとして、息をすいこむせつなをねらって、黒頭巾がひきがねをおとした短銃からは、弾丸の代わりに、奇怪なしびれ薬の煙をはきだしたのでした。それをすって、青江下野ばかりか三葉までが、一瞬の間に正気を失ったのです。

黒頭巾は短銃をふところにしまいながら、たおれた二人をジッと見守る。

「ウウムッ、ウウッ……」

青江下野はしきりにうめきながら、起きあがろうとでもするように、むちゅうで身を動かすようすだ。死体同然になった三葉とちがって、かれのすぐれた精神の力が、このしびれ薬のおそろしい魔力に対して、ひっしの反抗をつづけているのです。敵ながら、まことに悲壮な気力でした。

黒頭巾は、さっきの落ち葉籠をひきよせて、正体もなく眠っている三葉をその中へおしこむ

と、上を枝や葉っぱでおおいかくして、わが背にせおって立ちあがり、手ぬぐいをひろって、ふたたび黒頭巾の上からほおかむりをしました。

そして、戸のすきからしばらく庫の外のようすをうかがったのち、すばやく外へとび出すと、いそぎ足に、深い庭木立の奥へスタスタとはいってしまいました。なるほど、大胆不敵な思いつきだ。たとえこの姿を、母家の縁先あたりでちらと見た者があっても、黒頭巾の変装だなどとは夢にも思わず、お出入りの庭師が刈りこんだ枝や葉っぱを運び出してるのだろうぐらいに、見のがしてしまったでしょう。黒頭巾は、たくみに深い木立から木立をつたわって人目をさけながら、塀ぎわの非常口のくぐり戸の方へいそぎます。

番町大騒動

その時分に、九段坂の方角から、すげ笠をかぶった巡礼が二人、カン、カン、カンと鉦をたたきながら、番町の青江の邸の方へやってきました。

その一人は、少女のような姿をしているが、よくよく見れば珠三郎だ。同行はもとより、俠気の山勘の源一兄い。さては、熱病がなおって、かねてのおもわく通りに、青江の邸にいる三葉にあうため、やってきたものでしょう。

三葉から呼子笛を借りうけ、それで黒頭巾を呼び出して、「七つの抜け穴の図解」をとりもどす談判をするつもりにちがいない。山勘の源一兄いは、おおいに珠三郎に加勢して、快傑黒頭巾

と力くらべ腕くらべをやる意気ごみでした。

だが、八千石の大旗本、青江の邸の表門からは、さすがに巡礼姿ではいってゆけない。やかましそうな門番のじじいの顔を見ただけで、二人は裏門の方へまわったが、ふと、むこうからいそぎ足にやってくる二人づれの男を見ると、珠三郎があわてて、源一兄いのうしろへかくれます。

「どうした？　珠太夫」

「むこうから、赤鬼と三太がきたんだよ」

「アッ、そうか。じゃ、見つかるとたいへんだ。ソッと通りすごさせろ」

いそいで笠をかたむけて、道ばたへよる。だが、その用心にはおよばなかった。赤鬼たちは、巡礼などにはなんの気もつかぬようすで、裏門さしていそぐ途中、ふいに、すぐ目の前の塀の非常口がギーッとあいて、邸の中からとび出したのは、大きな籠をせおったほおかむりの庭師。

これが、ほかの者に出あったのならなんでもなかったが、えりにえって赤鬼の弥太五郎だったからたまりません。赤鬼は、ほおかむりの手ぬぐいの下からはみ出ている、黒い頭巾のきれを一目見ると、サッと顔色をかえました。

「ヤヤッ、黒頭巾……」

さけぶなり、庭師の胸ぐらにしがみつく。

「ム、どけ、赤鬼めッ」

ふりほどこうとする黒頭巾。だが、赤鬼は、骨までしみこんだうらみの一念だ。

「三太ッ。ぬかるなッ」

「おお、がってんだッ」

三太は、庭師の両足をねらってだきついた。なにしろ、出あいがしらのふいうちだけに、さすがの黒頭巾も、二人にじゅうぶん組みつかせてしまった。そのうえ、不利なことには、背に大きな籠をせおっています。うっかりあばれて、籠の中から三葉をふり落としたらたいへんだと思うと、思いきった業もほどこせないのが、なによりこまる。

「青江の殿様ッ、ご家来衆ッ、黒頭巾がお邸から逃げ出しますぞッ」

「みなさん、早く加勢をたのみますぜッ」

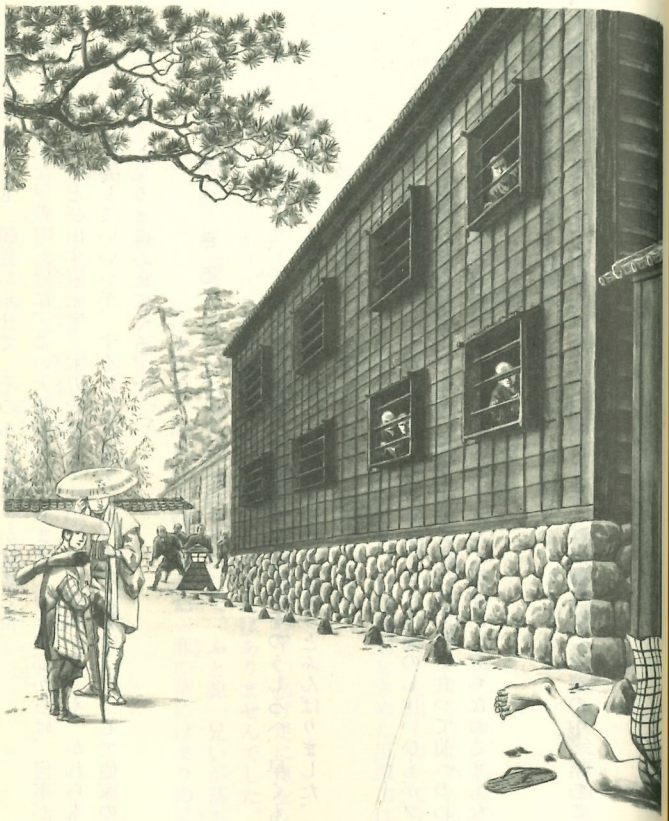
赤鬼も三太も、声をかぎりに加勢を呼ぶ。と、邸内の家来や居候浪士どもが、このさけびを聞きつけて、ドヤドヤとかけつけてくるようすだ。

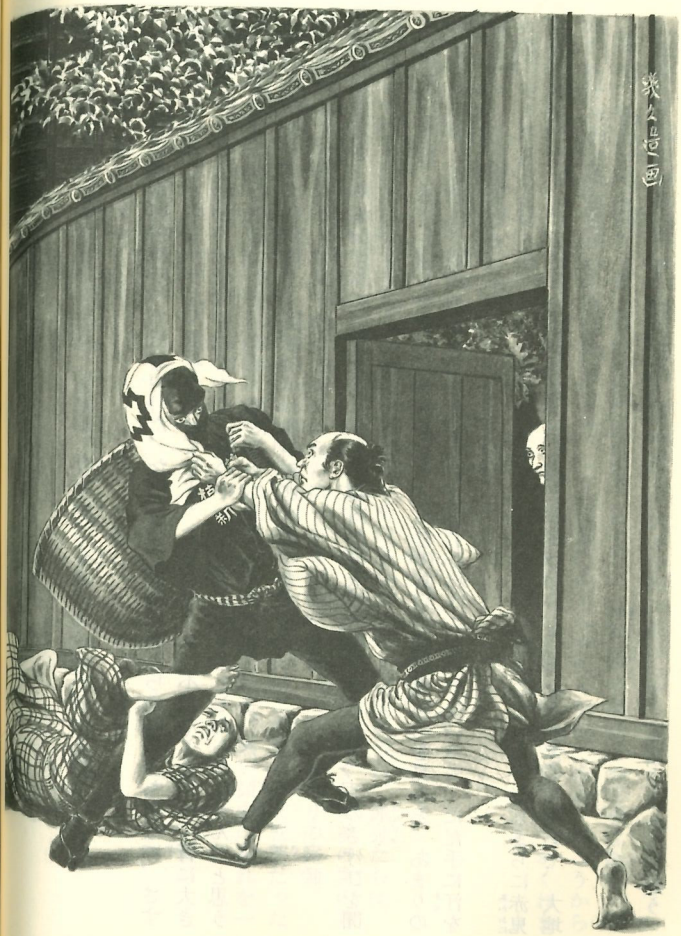
珠三郎たちも、ほおかむりの手ぬぐいがとんで、あとにあらわれた黒頭巾を見ると、あまりの意外に目をみはったが、このばあい、どっちの味方をするわけにもゆかないので、ただ手に汗をにぎって、これを見守るばかり。

邸じゅうの者どもがとび出してくるのを見ると、黒頭巾はしんけんになって、たちまちに赤鬼と三太をふりはなしてたたきつける。犬っころのようにころがる二人を見むきもしないで、大地をけってかけだす黒頭巾のうしろから、

「それ、逃がすなッ」

家来どもや居候浪士たち、起きあがった赤鬼と三太もそれに加わって、黒頭巾のあとを追う。





珠三郎と源一兄いも、顔見あわせて、そのあとを追いかけました。

日ごろは静かな屋敷町だけに、この大騒動は目だちます。方々の邸からは、何事が起こったかと、おっとり刀でとび出す家来衆、木刀や箒を手にかけ出す仲間小者ども、かれらも一目見れば、どっちに味方していいかが、すぐわかります。追っ手の人数は、こうして他家のやじうまどもまで加えて、見るまにふえてくる。

天運つきる

黒頭巾は足にまかして、千鳥ケ淵のお濠ばたを逃げてゆく。そのうしろへ、早くも追いすがった力じまんの仲間の一人が、いきなり籠をつかんでひきとめようとふんばりました。

「アッ、こら、はなせッ」

「なにをッ、この昼とんびめ」

双方の大力が一時に加わったからたまらない。アッというまに籠のしょいひもがプツリと切れた。仲間は籠とともにしりもちをついたが、黒頭巾もまた、はずみを食って前へのめりました。あいにく、そこは土手っぷちだったからたまりません。黒頭巾は立ちなおるまもなく、もんどりうって、けわしい土手の斜面をころがり落ちる。

「ワーッ、お濠の中へ落ちたぞッ」

大勢の追っ手はドッと声をあげます。だが、さすがは黒頭巾だ。お濠の中へ落ちこむようなぶまはやらない。あやうく水ぎわで起きなおって土手の上を見あげると、そこにはおそろしく大勢の顔がこっちを見おろして口々にののしりわめいている。

「しまったなッ」

籠とともに残してきた三葉を、すぐにも取りもどしにあがってゆきたいが、なんのかかわりもない他家の者どもまで大勢とび出してきたようす、その連中を相手にするのはめいわくな話でした。で、ここは一番、追っ手をよそへおびきよせていってから、それを出しぬいてひき返して、三葉をつれて逃げよう。と、またたき一つする間に、すっかり思案をきめた黒頭巾は、土手の斜面を飛鳥のごとくにつっきって、半蔵門の方角へかけ出します。

「やあ、逃げるぞッ、追っかけろッ」

土手の上の連中も、ワーッと声をあげて追いかける。黒頭巾の早い逃げ足に気をうばわれて、だれ一人、そこに投げ出された落ち葉籠などに注意をむける者はありませんでした。

源一兄いと珠三郎も、追っ手のうしろからかけ出そうとして、ふと源一兄いが落ち葉籠につまずきました。とたんに、ふたがはずれて、中からこぼれ出した、麻の葉にけまりの模様の、目のさめるような美しい片袖を見つけました。

「あッ、女の着物だな？」

あやしんで、籠の中をのぞきこんだ源一兄い、

「やッ、人間がッ……。娘の死体だッ……」

「エッ死体が？　……あッ、たいへんだッ、三葉姉さんが死んでいるッ……」

珠三郎が、声をうわずらせて籠にとりすがります。
「なんだと？　……これがお前の？　……あッ、珠太夫、喜べッ。生きてるぜ、こりゃあ……」
「えッ、ほんとかい、生きてるって？」
「肌もあたたかいし、息もかよってる。珠太夫、どこか人目につかないところで、手あてをしたら正気づくぜ。……ウン、そこのあき茶店がいい」
すこしはなれたお濠ばたの、よしず張りのあき茶店を見つけると、源一兄いは籠のまま三葉をかついで、そこへつれこみました。二人がいそいで三葉を籠から出して、介抱しようとするとき、またもやわッという人声が近づきました。
「おや、またひき返してきたようだぜッ」
そっとよしずのかげからのぞいてみると、はたして、追っ手どもを百メートルばかりもひき離した黒頭巾が、こっちをさしてかけもどってくるのが見える。むろん、籠のまま落としていった三葉を、気づかってもどってきたにちがいない。疾風のごとくに、珠三郎たちの目の前をかけぬけて、さっきの濠端まできた黒頭巾は、はたと立ちどまって、
「ややッ、しまったッ、籠がないッ」
珠三郎たちがあき茶店へかつぎこんだことは知らないから、ぎょッとしてあたりを見まわします。もしか濠へおちたかとのぞいてもみる。
その間に、追っ手どもはしだいにせまりました。さすがの黒頭巾も、すっかりとりみだしたようすでしたが、しかたなしに、ひとまず追っ手どもをまいてしまう決心をしたらしく、またかけだそうとして、ゆく手をながめたとたんに、なんにおどろいたか、釘づけにされたように立ちすくんでしまいました。

そのはずだ。七、八十メートルばかりむこうから、こっちへやってきかかったのは、例の怪物清川八郎、ちかごろ集めた新徴組の隊士十人ばかりをひきつれて、青江の邸へゆく途中らしく、大声で話しながら近づいてくる。
関口の大滝以来、黒頭巾をうらんでいる清川八郎です。こんなところで出あいたくない相手だ。前後に敵を受けた快傑黒頭巾。そぞろに天運のつきたことが感じられます。

意外な正体

あッ、こっちのさわがしい人声に気がついた清川八郎は、植木屋姿の黒頭巾を見つけてしまいました。さすがに、声をはずませたかれは、
「諸君、きゃつが例の黒頭巾という曲者だよッ」
隊士たちにそういって指さして教えます。
「なに、黒頭巾？　おもしろい。隊長、あの曲者を、ひとつ、われわれに料理さしてくださらんか」
すぐ、のり出したのは、水戸浪人で芹沢鴨というすごい男。近藤勇、土方蔵三、沖田総司なんて連中も、腕がむずむずするといった顔で、清川隊長のことばを待ちうける。

「よろしい、諸君が新徴組に加入して最初の腕だめしだ。だれがまっ先に、評判の黒頭巾を切るか、一番やって見たまえ」

清川八郎はらんぼうなことをいって、そそのかします。のちに京へのぼって新選組の雷名を天下にとどろかせたこの連中ですから、勇みたってわれさきにと、黒頭巾めがけてかけてきました。

これを見ると、黒頭巾もいよいよ度を失ったらしい。前と後ろとからせまる敵をさけかねたか、珠三郎らがひそみかくれているあき茶店から四、五十メートルはなれたところに、これも立ちぐされのようになっているおなじようなもう一軒のあき茶店の中へ、あわてて逃げこんでしまいました。

「さあしめたッ、袋のねずみだぞッ」

赤鬼たちのほうでも、清川らのほうでも、同時にこれを見て、どっと勝ちほこった声をあげながら、その小屋をめがけて双方からかけよります。

「珠太夫、黒頭巾も今度は助かるまいぜ」

すべてのようすを見ていた源一兄いが、こっちのあき茶店で珠三郎に耳打ちする。

「あッ、兄さん、黒頭巾が裏口へ出たよッ」

珠三郎は、あき小屋を表から裏へかけぬけた黒頭巾の姿を見つけました。黒頭巾は、なに思ったか、裏口においてあるあき樽のかげへしゃがみました。と思うと、両手をいなずまのように働かせて、印ばんてんや股ひき、腹がけをぬぎすてる。と、思いがけなくも、その下からあらわれ

たのは、ようかん色の古単衣とよれよれの古袴だ。またたき一つする間のあざやかな早がわりは、まるで歌舞伎芝居の名優の、舞台裏を見るような早業です。

だが、この早がわりの姿を見た珠三郎は、

「おや、あの姿は、どっかで見たことが……」

小首をかしげました。とたんに、快傑黒頭巾は、あの大きなな包む黒い頭巾を、おしげもなくむしりとってしまったのです。と、頭巾の中からあらわれたその素顔！　これを一目見た珠三郎も源一兄いも、アッといったきり、あいた口がふさがらない。夢ではないか？

「珠太夫、あの天神ひげを見たかッ……」

「ふしぎだね、黒頭巾が、天命堂のおじさんにばけたのかしら……」

ああ、ついにとけた黒頭巾のなぞ！　しかもその正体はあまりに意外だった。珠三郎も源一兄いも、目の前のあざやかな早がわりのありさまを見ていなかったら、どうして、あのさっそうとした快傑黒頭巾と、あわて者のヘボ易者天命堂とが、おなじ人物だったなどと信じられましょう！

電光石火、わずか二、三秒の間に、まるきり別人になりすました快傑黒頭巾、いや天命堂のおじさんは、そばの大きな石ころを拾いあげて、ぬぎすてた印ばんてんや腹がけなどでそれを包みはじめました。なにをするつもりだろう？

ちょうどそのころ、小屋の表では、清川はじめ新徴組の面々と、赤鬼たちの大勢の追っ手とが、バッタリ出あったところでした。そのけはいを、じっとうかがっていた天命堂は、大石を包

んだ庭師の衣装を、すぐ目の前のお濠めがけて、やッとばかりに投げこむと同時に、じぶんはひらりと軒にとびついて、あき小屋の屋根にとびあがって、ぴったりと腹ばいになりました。

さきを争ってあき小屋の中へふみこもうとひしめいていた連中が、ドブンというはげしい水音を聞いたのはこのときだ。

「それッ、黒頭巾めが濠へとびこんだぞッ」

不敵な天命堂

どっと裏口へかけぬけた新徴組の猛者どもや赤鬼と三太の二人は、急な土手を水ぎわまでかけおりる。見ると、あわだった波紋のまだおさまらぬ水面に、黒い頭巾が浮いている。

「浮きあがったら、たたっ切れッ」

水ぎわでは意気ごんでさけぶ。土手の上にも、例の追っ手のやじうまどもが目白押しにならんで、今にも黒頭巾が水面に浮かび出るかと、かたずをのんで見はっています。

みながお濠の中に気をとられたすきに、屋根の上の天命堂は、そっとはって表の方へまわると、軽く軒から下へとびおりました。そして、土手にならんだ人垣のうしろへ、今、よそからやってきたようなぬからぬ顔をして近づいてゆくと、

「ほほう、みなさん、身投げがあったのかね？」

さもものずきらしく、わりこもうとする。あまりの大胆不敵さに、珠三郎と源一兄いとは、あ

きれて顔を見あわせました。

だが、いつまで待っても、水の底に沈んだ石が浮かんでくるはずはない。

「いやどうも、身投げの浮いてくるのを待ってたら、日がくれるね。どれ、出かけよう。まあ、みなさん、おさきへごめんなさい」

天命堂はだれにともなく、皮肉なあいさつをのこして、土手の人垣からはなれて、のんきそうにぶらりぶらりと歩き出しました。お濠の水面に気をとられてだれ一人、ヘボ易者天命堂などに見むきもしないなかに、ふと、そのうしろ姿を見て小首をかしげたのは、新徴組の隊長清川八郎でした。なに思ったか、土手のさわぎをよそに、かれもまた、天命堂のあとをつけはじめました。

こっちのあき茶店の中で、しばらくあきれた顔を見あわせていた二人、源一兄いがさきにわれに返って、珠三郎にささやきました。

「珠太夫、黒頭巾は逃げっちまった。おいらも今のうちに、ここを逃げ出さないと、今にやつらも、だまされたことに気がついて、このかいわいをさがしはじめると、やっかいだぜ」

「そうだね。じゃ早くゆこうよ」

「うん、だがちょっと待ちな。こっちもひとつ黒頭巾流に、早がわりをやらかさなくちゃ」

源一兄いは、そういいながら、いそいでじぶんが着ていた巡礼の白衣をぬぎながら、

「珠太夫、手を貸してくれ」

正体のない三葉の帯をときすて、目のさめるような例の振袖をもぬがせてしまうと、今度は巡

礼の白衣を三葉に着せ、笠をかぶせ、甲かけ、脚絆まですっかりつけて、そッとだきあげました。なるほど、これなら、ゆきだおれの巡礼娘をどこかへ運んでいるようで、だれもあやしむ者はありますまい。

土手の上と下とのからさわぎをうしろに、そッとあき茶店を立ち出た源一と珠三郎とは、天命堂の去った方角へ、これもいそぎ足に立ち去ります。

すこし前をゆく天命堂は、清川八郎につけられていることは夢にも知らぬらしい。いい気持そうに鼻歌を歌いながら、九段の中坂を、ふらりふらりとおりてゆきます。やがて、飯田町の河岸べりへ出ると、なに思ったか、すぐ目の前にある材木小屋の中へ、いきなり、はいっていってしまいました。

「しまッたッ」

また逃げられた！　清川八郎は思わずあわてて、一気に坂をかけおりると、いきおいこんで材木小屋の中へとびこもうとして、入り口のところで、はたとぼう立ちになりました。

てっきり逃げたと思った天命堂が意外にも、小屋の入り口の丸太の上に、悠然と腰をおろしていて、あわてた清川のさまをあざ笑うように、天神ひげをしごきながら、ニコニコしていたではありませんか。

「ややッ……」

「ハッハッ、清川先生、なにをキョロキョロしてござるね？　失せ物ですかな？　たずね人かな？　さあさあ、これへ二十文耳をそろえて出したまえ。わしがさっそくうらなって進ぜるから」

なんたる、人を食ったことばだ！　いやしくも、天下の清川八郎にむかって。だが、さすがに清川も怪物だ。胸のさきまでこみあげてくる癇癪を、ジッと殺して、わざと平気な顔で、

「黒頭巾殿、内職にうらないをしていられたことは、きょうただいまはじめて知ったよ。これで、あの関口の大滝での貴公のいたずらも、やっと腑におちた。いや、まったくおどろいたものだ。ハッハッハッ」

清川ののろい

「いや、かんじんのからくりを、きみにすっかり見通されて困ったよ。ハハハ、きみのその眼力なら、易者になってもじゅうぶん飯が食えるね」

天命堂の黒頭巾も、声をあわせて笑いました。

「ハッハッ、いずれ、うらないのほうは弟子入りさせてもらうが、それよりさきに、今ここできみにぜひ一つ無心がある。なんと聞きとどけてもらいたいものだが」

急に、あらたまって清川八郎がそういいました。

「なんの無心だね？　品によれば……」

一瞬、せまい木小屋の中に相対した両雄の間を、目に見えぬいなずまのような、すさまじいものがひらめき通いました。

「きみの、命がもらいたい」

あッ、秋霜のごとき清川八郎の声音。息づまるような一瞬の沈黙を破って、たちまち、快傑黒頭巾の天命堂が、ゆかいそうに笑いだした。

「ハッハッ、大道易者の命など、ほしがってなんにする気だ！」

しかし、清川八郎はどこまでもしんけんだ。

「きみを勤王の志士と見こんで、うちあける。ぼく一生の大秘密だ。ぼくは今、幕府にすすめて、腕ききの浪士たちを集めさせている。幕府の重役どもは、むろん、この新徴組浪士隊をぼくがひきいて、幕府のために勤王の志士たちを皆殺しにするのだと信じている。が、なにをかくそう。ぼくの真の志は尊王倒幕だ。ぼくは幕府の力で集めさせた新徴組を使って、鉾をさかさまに幕府を打ちたおす計画だ。この大計画に、ぜひともほしいのは、勤王の志を同じくする、しかも万人にすぐれた貴公の力ぞえだ。きみがこのくわだてに加わってくれるなら、ぼくと二人の力で、どんな大仕事でも必ずなしとげうる。きみ、どうかわが新徴組の客将になってくれたまえ。いや、もしきみが望むなら、喜んでぼくは主将をきみにゆずり、軍師参謀となってきみをたすける。きみ、ぜひこの望みをかなえてくれたまえ」

清川の熱弁は火のようです。ああ、なんという大胆不敵な、しかもずぶといくわだてだ！　幕府の力で集めた新徴組をもって、幕府をたおそうとは。

だが、黒頭巾に新徴組の主将をゆずって、じぶんがその下位にあまんじるというのは、清川の本音でしょうか？　それともまた、あまいことばで黒頭巾に近づき、機を見て「図解」をうばい

とって、尊王、佐幕両派を自由にあやつる大権力をにぎろうとする下心ではないか？　天命堂、いや黒頭巾はなんと答えるか？

「清川さん、おたがいに勤王の志は一つかもしれぬが、わたしは、きみの道づれにはなりたくない」

にべもないことばだ。清川は顔色をかえた。

「なにッ？」

「正しい志は、正しい手段でなしとぐべきだ。きみの手段は、残念だがあやまっている。わたしは、きみのためにそれを惜しむのだ」

ああ、強く正しく男らしい黒頭巾のことば。

「ムッ、なにをこしゃくなッ。……黒頭巾、きさまの命はもらったぞッ」

凶暴な本性をあらわした清川八郎、抜き討ちの一刀をあびせようとする右ひじを、つと丸太から身を起こした黒頭巾が、左手でぴたりとおさえると、

「清川、これを見ろ」

右手の短銃が、清川の胸もとをねらっていた。

「ムムム、飛び道具だなっ。……ひきょう者めッ」

清川八郎は、はき出すようにつぶやきました。が、癇癖の強い青江下野とちがって、飛び道具の正面から切りこむほどの猪武者ではない清川、無念をこらえて歯ぎしりするのを見て、

「清川さん、おたがいに、まだまだ命はそまつにできまい。相引きにしようではないか？」

「……」

どう考えても勝ち目のない清川、しぶしぶ大刀の柄から手をはなす。黒頭巾もニッコリ笑って、ふところに短銃をしまうと、ただ一言、

「では、ごめん」

いきなり、相手に背をむけて、すたすたと木小屋を出てゆく。そのうしろ姿はもう、すきまだらけのあのヘボ易者天命堂になりきってるのだが、さすがの清川も、追いかけて切りつける気にはなれないのか、あきれて見送りながら、

「いまいましいやつだ。が、大事を知られたうえは、長く生かしておけぬかれ。よし、今に新徴組の手で、きゃつをやみ討ちしてしまおう」

おそろしいのろいのことばが、くちびるをもれます。

第十一回　穴八幡

思わぬ獲物

千鳥ケ淵のお濠ばたでは、おおぜいの追っ手どもが目を皿のようにして、青みどろの浮いた水面を見守っていましたが、いつまで待っても黒頭巾が浮きあがってくるはずはありません。

どうやら、いっぱい食わされたらしいことに気がつくと、やじうまどもは散ってしまい、新徴組隊士たちは清川隊長の姿の見あたらぬのをあやしみながらも、青江家の人々や赤鬼の弥太五郎といっしょに、ひとまず青江の邸へひきあげてゆきました。

が、赤鬼の子分三太は、さっきから大立ちまわりをやったり、さんざんかけ歩かされて、すっかりのどをかわかしました。意地のきたない酒のみのくせで、三太はもう矢もたてもたまらないほど、すきな冷や酒を一ぱいキュウッとやりたくなってきたので、親分にはいいかげんなことをいって、お濠ばたで別れると、九段下の居酒屋へいそいでかけます。その途中、なにげなく通

りかかった世継稲荷の境内の、神楽堂の床下から、なにやらヒソヒソ話の声。そこは職業がら、すぐ聞きとがめてあやしみました。

「ハテナ、何者だろう？」

足音を忍ばせて近づくと、しめ切った床下の板戸のふし穴から、ソッとあやしい人声の正体をのぞいてみたが、たちまちハッと顔色をかえた。

「アッ、しめたッ、こいつはたいした獲物だぞ」

思わず十手をにぎりしめる。今、三太がふし穴から見つけたのは、おたずね者の珠三郎と、山勘の源一兄いの二人が、正体のない三葉をしきりに介抱している光景でした。三太は思いがけない獲物をかぎだしてしまった。なにしろ、すっぽんいらいの怨みもあり、この姉弟に縄をかけたら、それこそ三太一代の大手柄になるしろものです。

小おどりした三太は「御用」ととびこもうとしたが、どっこい待った。姉弟のほかに、も一人いるのが苦手だ。浅草で名の聞こえた素人角力の大関、山勘の兄いの強い腕っぷしは、三太もとより百も承知です。

（いけねえ、昇天斎召し捕りのとき、ゆくえが知れなかった山勘めだ。あいつがいては、おいら一人の手に合わない。早く親分を呼んできて……。だが、いったい、やつらはなにを話してるんだろう？）

たいへんなやつにのぞかれているとも知らぬ二人は、三葉の介抱をつづけるうち、しびれ薬のさめるときがきたか、三葉はかすかに目を開きました。

「三葉姉さんッ、気がついたかいッ……」

「アッ……、珠ちゃん……」

「ウン、おいらだよ。姉さん、おいらがわかるかい？」

「まあ、夢じゃないかしら？　わたし、どんなにあなたにあいたかったでしょう」

「おいらもだよ。おいらもあいたくて……」

胸いっぱいにこみあげる、なつかしさ、うれしさ。手をとりあって喜ぶ姉弟のむつまじいさまを、源一兄いもそばからニコニコながめています。

「珠ちゃん、ここはどこなの？　わたし、どうしてここへ？　黒頭巾様はどうなすって？」

なにも知らないでふしぎがる姉に、弟はお濠ばたのさわぎを話して聞かせ、また、親切な源一兄いの力ぞえを話して、あらためて三葉にひきあわせますと、三葉もはじめて源一兄いがいたのに気づいて、心から厚く礼をいいました。

「なに、礼なんかいわれるほどのことはしないよ。あやうい難儀を助けあうのは、おたがいっこだ。おいらはこののちも、二人に加勢して、早く父っさんを牢から助け出させてやりてえと思うんだ」

たのもしい源一兄いの心待ちです。

「ア、お父上の牢といえば、珠ちゃん、その秘密牢の名が、やっとわかったのよ」

「エッ、姉さん、そいつはほんとかい？」

穴八幡のお穴

「ええ、青江下野の口からハッキリ聞いたわ。なんでも『ひゃくちゅうかん』って、要害堅固なお城らしいのよ」

「なに『ひゃくちゅうかん』？　お城なんだね？　おいら、なんだかそれば聞きおぼえがあるような気がする名だぜ、姉さん」

「エッ、ほんとうにそんな気がして？」

「ウン、たしか、どこかで聞いたことのある名だよ。でも、思い出せないなあ……」

「珠ちゃん、シッカリ思い出してみてね。お父上のありかが知れるかどうかの、さかいめなのよ。さっ、珠ちゃん……」

「待っとくれ。それがどうしても、ハッキリ思い出せないんだ。くやしいなあ……」

珠三郎は泣き顔になりました。

「でも、なんとかして思い出せないかしら。…ああ、もしか黒頭巾様にうかがってみたら……」

「姉さんッ、その黒頭巾で思い出せたよッ」

「まあ、ほんとう？　どこなの？　珠ちゃん」

「黒頭巾にぬすまれた、あの『図解』の中に出てたんだ。姉さんといっしょに見たんだよ。ホラ、江戸大城吹上庭内『百むし館』って。七つの抜け穴のうちの一つの口さあ。『むし』と読んじまったから気がつかなかったんだけど、ホラ、『百むし館』は百虫館なのさ」

ああ、珠三郎はとうとう思い出した。長い間、姉弟の心を苦しめたなぞ、父上のありかはついにわかったのだ。

「あッ、そういわれば、そうね、たしかにそうだわ。まあ、よかったわねえ……」

顔見あわせて喜ぶ姉弟のそばで、源一兄いが、

「だが、そいつはたいへんだぜ。すると、父っさんの牢ってのは、つまり江戸城の中なんだなあ」

むちゅうで喜びあってた姉弟も、ハッと顔を見あわせる。三葉がふすまごしに聞いた青江下野のことばに、「だれも近づけぬ要害」とあったのもいまさら思いあたります。なるほど、天下の大将軍のお城の中とわかっては、救い出すどころか、近づくことさえ思いもよらない。せっかくお父上のありかが知れても、これではかえって、姉弟をガッカリさせるばかりでした。

「ほんとうに、江戸城の中では困ったわねえ」

「こんなとき、あの『図解』があったら、江戸城へ忍びこむ抜け穴が見つかるんだけどな」

「それでは、珠ちゃん、たいせつな図解は……」

「黒頭巾にぬすまれたんだ。ねえ、源一兄さん」

「まあ、黒頭巾様は、まさかそんなことをなさるまいと思うんだけれど、でも、黒頭巾様がここにいてくださったら、きっと力になってくださるでしょうねえ」

「アッ、そうだ。姉さん、呼子笛はまだ持っている？」

せめて呼子笛で黒頭巾が呼び出せれば……。

「あらッ、あの笛は……」

物の具庫の中で、青江下野にうばいとられたっきり、どうなったか知らないのです。

「ああ、よくよく運がないんだねえ」

力をおとした姉弟を、はげますように源一兄い、

「でも、二人ともその『図解』を見て、『百虫館』が抜け穴の出口ということをおぼえてるぐらいなら、その一方の入り口のほうがどこにあったか、おぼえてはいないかい？」

「ところが、入り口の方は、べつに地図があるだけで、土地の名もなにも、字は一つも書いてなかったんだもの、わかりゃしないや」

「でも、珠ちゃん、七つの入り口の図面のうち、どれか一つが、牛込の穴八幡様によく似た所らしいって、二人でいったことがあったわね」

それを聞くと、源一兄いがひざを乗り出した。

「なに、穴八幡？　じゃ、そうかもしれないぞ。むかしっから、穴八幡のお穴は底知れずで、なんでも富士の人穴までつづいてるなんて、いいつたえがあるくらいだから、ひょっとすると、抜け穴の一つなのかもしれないじゃないか」

「そうだ。じゃ、あの穴が抜け穴かどうか、さっそくさぐってみようよ」

珠三郎も声をはずませました。

「よし、今夜までにすっかりしたくして、お穴へもぐりこんでみよう。もしほんとうに、江戸城

の抜け穴だったら、それこそしめたもんだ」

身投げ娘の振袖

どうもたいへんな話のぐあいになってきた。天下大将軍の本城へしのびこむ相談がはじまったのだ。ぬすみ聞く三太は、あきれて目をむきました。

（いや、とんでもないやつらだ。こうなれば、いよいよ見のがせねえや。さっそく親分に知らせて、三人ともひっくくってしまわなくては）

心にうなずくと、ソッと神楽堂の軒下をはなれた三太は、のどのかわきも忘れて、スタコラスタコラかけだしました。そして、千鳥ヶ淵のお濠端まできかかると、どこからか、

「三太、三太、どこへゆく。これ待て、三太」

赤鬼親分の声がする。三太はいいところで出あったと喜んで、

「へえ、親分。……オヤ、どこにいなさるんで？」

キョロキョロ見まわすとき、すぐそばのあき茶店の中から、

「三太、ここだよ。近こう、近こう」

赤鬼にしてはふざけすぎてるが、そんなことには気のつかぬ三太は、

「おお、親分、一大事だ。たいした獲物が……」

といいながら、よしず張りの中へとび込んで見ると、そこのほこりだらけの床几に腰をおろし

て、ニヤニヤ笑っているのは、親分と思いのほか、あのヘボ易者の天命堂だったではありませんか。

「アッ、なんだ、手前か？　ふざけやがって」

三太は腹を立ててにらみつけました。が、親分のえらそうな声色を使って三太を呼びとめた天命堂は、ぬからぬ顔で、手に持っていた美しい模様の振袖と帯とを、三太の鼻さきに突き出して見せつけながら、

「ああこれ、ここにこんなものがすててあったよ。お濠へ身投げでもした娘がいるのではないかね？　ひとつしらべてみたまえ」

この振袖は、三葉が着ていたものだ。天命堂、いや黒頭巾は、材木小屋で清川八郎と別れると、も一ど三葉をさがしにここへひっ返してきて、このあき茶屋の中で、落ち葉などといっしょにこの振袖を見つけ出したのです。

三葉はこの着物をぬがされて、どこかへつれ去られたにちがいない。どこだろう？　と思案しているところへ、フト表を通りかかった三太の姿を見かけたので、さっそく呼びこんで、この振袖を見せたのは、三太の口から、三葉のゆくえについてなにか聞き出せるかもしれないと思ったからでした。だが、今の三太は、そんな主の知れぬ振袖なんかにかまっていられないほど気をあせっている。

「なにをッ、身投げなんかにかまってられるかい。こっちは大いそぎのところなんだ。とんちきめッ」

はらだたしそうにぼやいて、あき茶店の外にとび出してしまいました。

「ハテナ、なにをあんなにあわててるんだ？」

天命堂は小首をかしげる。だがもし、三太がいそいでいるわけを知ったら、どうしてみすみす見のがしてしまいましょう。それほどの一大事とは夢にも知らず、見のがしてしまったばかりに、三葉と珠三郎の身には、おそろしい大難がせまろうとしています。

神楽堂の捕り物

と、まもなく、お濠端をひきかえしてきた三太。今度は親分の赤鬼と、ほかに青江の邸の居候浪士ども、森田、平山、樋口などという顔見知りの連中が、五、六人で、いそぎ足に九段の方へやってゆくのです。

よしずのかげから、それを見送った天命堂、

「ハテナ？　みな、たいした勢いで出かけるぞ。こいつは一つ、あとをつけてみずばなるまい」

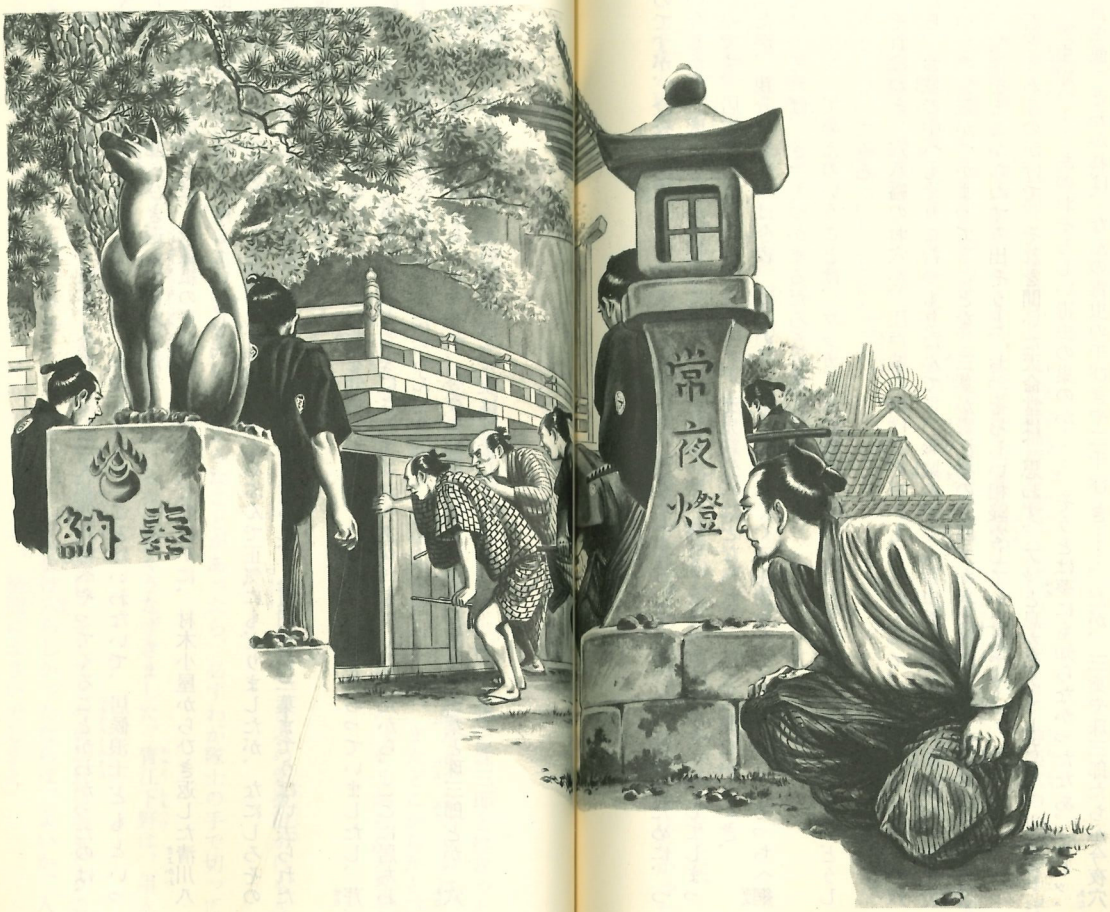
なにかピンと心にひびいたものがあったか、天命堂はあき茶店を出て、ソッとあとをつけはじめる。連中はやがて、九段の中坂の上までくると、立ちどまって、相談をはじめました。

「では、曲者どもは神楽堂の床下にいるのだな」

柔術じまんの浪人森田がそういっている。

「みなさんには、素人角力のほうをお願い申します。わたしが三葉を、三太、手前は珠三郎をし

ばれ」
赤鬼が手くばりをきめる。そのことばで天命堂は、はじめてなにもかものようすを知ってしまいました。とんでもないことだ。三葉と珠三郎とをこの連中がめしとろうという。
「しまったッ、気がつくのがおそかった。だが、なに、この連中の手なみは知っている。いざとなったら横合いからとび出して……」
天命堂は心にうなずく。
赤鬼をさきに、一同はぬき足さし足で世継稲荷の境内へはいってゆくと、神楽堂の四方をすばやくとりまいてしまいました。ああ、珠三郎も三葉も袋のねずみ同然だ。
天命堂は、石どうろうのかげに身をひそめてうかがう。と、神楽堂の床下へ忍びよった三太が、いきなり板戸をガラリとひきあけて、
「御用だぞッ、神妙にし……アッ……」
あきれたようすでぼう立ちになった。
「やッ、三太、なんてえざまだッ。みんな、逃げっちまったじゃねえかッ」
赤鬼が雷のような声でどなりつけました。
「いつのまに、風をくらやがったんでしょうね」
「どじめ、てめえの仕事は、いつだってこのざまだ」
三太は、すっかりしおれてしまった。だが、石どうろうのかげの天命堂はホッとしました。三葉と珠三郎、源一兄いの三人は、捕り手のせまるのを知って、逃げ去ったわけではなかったのですが、今夜のお穴さぐりの大冒険に、いろいろなしたくがいるので、その準備のために、つい今しがた、床下を出かけたのでした。一足ちがいで、捕り手どもは三人をとりにがしてしまったのです。居候浪士どもは不平をいうし、赤鬼親分にはどなられる。三太は頭をかきかき、
「だが、親分、やつらは今夜、高田の穴八幡のお穴へくぐる相談をしてましたから、そっちへ網をはってれば、きっとつかまるだろうと思いますぜ」
「フフン、てめえのいうことは、ウッカリ真に受けるとまたばかを見そうだが、穴八幡がどうしたと？　いってみろ」
「それはねえ。穴八幡のお穴が、江戸城の抜け穴の口かもしれねえって、あいつら、今夜その穴から、お城の中へもぐりこむつもりなんでさ。お城の中の『百虫館』とか『焼酎軒』とかに、やつらの父親がつかまってることを、三葉が青江様のお邸でかぎつけたんで、今夜三人でもって、父親をそこからぬすみ出そうと、おっそろしい相談をしていたんですよ」
石どうろうのかげで、それを聞いた天命堂は、思わず、アッと息をのみました。
（「百虫館」……あのおそろしい毒虫の巣のか……。そうとは夢にも知らなかったなあ。よしッ、「百虫館」とわかれば、なんの毒虫の千びきや二千びき……。だが、三葉や珠三郎たちが今夜穴八幡へ出かけると知って、赤鬼どもは、きっとおそろしいわなをはって、待ちぶせするにちがいない。なんとかして途中であの子たちをくいとめないと……）
天命堂はひとりで思案する。三葉が、敵の手に落ちていなくて、かえって珠三郎とめぐりあっていたことがわかったのは、一安心だし、「百虫館」が山鹿士行の秘密牢だと知れたのは、なに


常夜燈

よりありがたかったけれど、気にかかるのは、赤鬼や三太が網をはるとも知らずに、今夜穴八幡へ出かけるにきまっている姉弟たちのことだ。

手くばり

神楽堂の捕り物は失敗だったが、今夜、あの三人が穴八幡へやってくることがわかったのは、やはり三太の手柄にちがいないので、赤鬼もあまりこごとはいわないで、居候浪士どもといっしょに、青江の邸へひき返してきました。

青江下野の居間では、新徴組の芹沢鴨や近藤勇などのほかに、材木小屋からひき返した清川八郎も、何くわぬ顔で一座していました。

青江下野は、三葉などとちがって、ずっと早くじぶんで正気にもどりましたが、なにしろそのあとは頭が重苦しく痛むのと、黒頭巾にまたもしてやられ、人質同然の三葉までうばい去られた腹立ちとで、とてもふきげんでした。

清川八郎は、黒頭巾にだいじな秘密を知られたので、はげしくかれをのろっていましたし、芹沢鴨や近藤勇たちも、黒頭巾におもちゃにされてムシャクシャしている。だから、ここに居あわす人々の黒頭巾をにくむ気持ちはたいへんです。

そこへ、赤鬼の報告があったのです。今夜黒頭巾に深いゆかりのある、三葉と珠三郎とが、穴八幡へやってくる、というのだから、一座は緊張しています。

「殿様、ですから今夜、穴八幡のあたりへ待ちぶせしていさえすれば、三葉と珠三郎とはきっと網にかかりますが、ひょっとすると、もっと大物がひっかかるかもしれませんぜ。というのは、あの子どもたちに影のようにくっついている黒頭巾、いずれ今夜あたりは、またどこからかとび出してきて、じゃまするにちがいありません。そこで、今度こそ一網に、バッサリからめとる手段を……」

赤鬼がいきごんでいいますと、

「ウム、今夜こそ、必ず黒頭巾めをとらえるか切るかしてしまえ。清川、きみの新徴組からも人数を出して、捕り方どもを助けてもらおう」

「心得ました。もし、きゃつが姿をあらわすようなことがあったら、必ずわが隊士の手で切ってしまいましょう。のう、諸君」

清川八郎がそういうと、新徴組の猛者どもも、みな力強くうなずきました。青江下野は、用人の原口十太夫を呼びつけました。

「十太夫、其方は今すぐ、人足どもをつれて、穴八幡へ出むけ。そして、今夜かれらがもぐりこもうとする穴をしらべてみて、はたしてどこまでもつづく抜け穴らしかったならば、よいか、入り口から十間（およそ十八メートル）くらい奥のところで、堅固にふさいでしまえ」

「ハハッ」

「やつらにはもとより、人目にたたぬよう手早くやるのだぞ」

「かしこまりました。それではさっそく……」

十太夫はすぐさま立ちあがって出てゆく。つまり、穴の奥をふさいでしまって、なにも知らぬ姉弟たちや黒頭巾などがはいっていったあとで、待ちぶせした人数が一時にあらわれ、穴の出口をとりまいて、袋のねずみにしてしまう計略でした。

「赤鬼、其方は町奉行から人数を入り用なだけ借り出して手配をせい。新徴組の諸君は別働隊だ。これはもっぱら、黒頭巾があらわれたとき、それにあたるのだ。わしはこれから登城して、かねての手くばりどおりに、城内の固めをせねばならぬ」

大胆不敵な黒頭巾の手に、「抜け穴の図解」があるとすれば、どんなことで「百虫館」のありかをかぎつけて、江戸城の奥深くへ忍びこむかもしれないのだ。あるいは、三葉や珠三郎といっしょに、穴八幡以外の抜け穴から、城内へはいりこむかもしれない。今夜こそゆだんのならぬ晩だ。青江下野はそう考えると、いそいで登城の支度をします。

かねてから、老中たちや小栗上野介などと相談のうえ、城内の警備は厳重にできあがっていました。まんいちにも、「抜け穴から曲者があらわれた！」とさえいえば、城内の要所要所にすきまなく手くばりしてある番卒どもは、いっせいに守りを固め、その曲者を四方八方からとりかこんで、くもの巣に迷いこんだ羽虫同然に、からめとってしまうという、まことにおそろしい用意ができているのです。

清川八郎は、なに思ったか、

「御前、穴八幡のほうへは、芹沢、近藤の両士を大将にして、新徴組半分の同勢をさしむければよろしいでしょう。わたしは残り半分をひきいて御前のお供をし、城中のかための最も手うすなところへ、ときに応じて援軍にかけつけることにしたら、いかがでしょうかな？」

忠勤らしいことばだが、じつはぬけめのない清川八郎、こんな機会に江戸城の中のようすも見きわめておきたいし、黒頭巾に出あったら、そのときはまた、人手を借りずに相手を切りたおして、「図解」をわが手にまきあげ、じぶんの勢力をさかんにしたい下心かもしれない。

「よろしい。では人数をまとめて、あとからお城へあがるがよい」

清川の下心に気がついてか、つかないでか、青江下野はむぞうさにそれを聞きとどけました。

十本の征矢

やがて、夜になりました。

今夜は美しい月夜だ。すっかりのびた青田の中で、蛙の声がさわがしく聞こえる牛込の奥、高田の馬場に近いたんぼ道を、三人づれの人影が、穴八幡の大鳥居さして、肩をならべていそいでゆきます。目だたぬように身じたくした、三葉と珠三郎の姉弟に、山勘の源一兄いです。

ゆく手におそろしいわながはりめぐらされ、赤鬼はじめ町奉行所の同勢のほか、鬼といわれた芹沢、近藤たち、新徴組の腕ききが、やぶ蚊にせめられながら手ぐすねひいて待ちぶせしていることは、もとより三人とも、夢にも知らないのです。

「やあ、あれが穴八幡の大鳥居だね」

「いいぐあいに人通りがないわ。今の間に早くお穴のところへゆきましょう」

なんの、人通りがないどころか。あぶない！　あぶない！　三人は大鳥居をくぐると、本殿の方へ登る石段の下から左に折れて、崖にそってしばらくゆくと、玉垣をめぐらして人を入れないようにした神々しい一かこいの場所がある。この玉垣の内の崖の根方に、底知れぬといいつたえられたお穴が、しめ縄をはられたまっ暗な入り口を、きみわるく開いています。

三人は前後を見まわして、いそいで玉垣をのりこえると、はげしく心をおどらせながら、ほら穴の口をめがけてかけよりました。

「おそろしく暗いなあ。火縄をつけようよ」

「待った。だれかに見とがめられるとたいへんだ。もっと穴ん中へはいってからにしよう。おれがさきにはいるから、二人ともあとからくるがいい」

源一兄いをさきに、三人の姿はまっ暗な洞の入り口から、すいこまれるように消えました。

ああ、とうとう獲物がわなに落ちた。ほうぼうの物かげにひそむ新徴組や捕り方どもが、いっせいにとび出そうとしたとき、またも、大鳥居の方から近づく人の足音がありました。待ちぶせの人数が、いいあわせたようにす早く首をすくめた前を、スタスタといそぎ足に通りかかったのは、ああ、なんと、黒装束、黒覆面の背の高い武士。

快傑黒頭巾だ！　三人のあとを追って、一足おくれてやってきたのだ。穴の入り口のところで立ちどまった黒頭巾は、じっとあたりのやみに目をやると、そのまま三人のあとから、暗い穴の中へとびこみました。

「しめたぞッ、早く穴の出口をかためろッ」

勇みたって、ドッと一時に、ものかげをとび出した人々は、たちまちお穴の口を、十重二十重にふさいでしまいました。はたして、三びきの小兎ばかりか、稀代の大獅子まで、わなに追いこんだのだから、新徴組の面々も赤鬼の手下どもも、おどりあがって喜びます。しかも、穴の奥は昼間のうちに、念入りにふさいでしまったのだから、まったく袋のねずみとは、お穴の中の四人のことです。

「ゆだんするな。弓組、鉄砲組は前へ出ろ」

赤鬼は用心深く下知する。腕前のすぐれた快傑黒頭巾が、死にものぐるいに切って出ぬともかぎりませんから、鉄砲十挺、弓十張、筒口をそろえ矢先をならべて、せまいお穴の奥をねらった鉄壁の陣立てです。

「黒頭巾、のがれぬところだ。じんじょうにでてこい」

気短な芹沢鴨が、大刀の柄をたたいてさけぶ。近藤勇、土方歳三、沖田総司なども、ゆだんなく身がまえます。だが、お穴の中は、きみわるいほどしんかんとしていて、黒頭巾はもとより、さきへはいっていった三人の声さえ聞こえません。さては、わなにおちたことを知って、進退きわまった四人が、息を殺してやみの中に身をひそめているに相違ない。

「出てうせなきゃ、弓組、さぐりをいれてみろ」

血も涙もない赤鬼が、しびれを切らして、むごたらしい命令を発しました。と、声の下から、弦音高く切って放された十本の征矢が、奥行きわずか十八メートルの洞の中へ、すごい羽音をひびかせながら射こまれました。

スワ！　悲鳴が聞こえてくるか？　または手おい猪のようにあばれくるって切って出るか？　お穴の口をきびしくとり巻いた一同が、息を殺して待ちかまえている。だのに、穴の中からは、なんの物音も聞こえない。さては四人とも、矢先にかかって命を失ったか？　いや、それにしては、うめき声も聞こえない。まっ暗な穴の中は、ひっそりかんと静まりかえっているばかり、どうやら十本の矢に、なんの手ごたえもなかったらしいのです。

「ハテなッ？」

赤鬼は小首をかしげます。

「よし、拙者が見とどける。おい、ちょうちんをかせ」

近藤勇が捕り方の一人の持っていたちょうちんをとりあげると、ズカズカと洞の奥へふみこんでゆきました。赤鬼も三太といっしょに、すぐあとにつづく。一足おくれて土方歳三と沖田総司の二人が、お穴の奥へはいりました。

まもなく、近藤勇は、昼間人夫どもがふさいだところへつきあたってしまいました。ちょうちんの光で、あたりを念入りにしらべてみるが、がんじがらめに組みあげられた丸太の山も、べつに切りくずされたようすもなく、さっき射込んだ矢が、三、四本、丸太に深くつきささって、かすかに矢羽根をふるわしているばかりです。

「おかしいな。もぐら一ぴきいない」

近藤がふしぎそうにつぶやくと、赤鬼はいまいましそうに舌うちして、

「どこへ逃げやがったろう？」

第十二回　父子再会

送り狼

こんどこそは袋のねずみだと思った、快傑黒頭巾たち四人に、またもみごとに姿をかくされたので、五人は顔を見あわせてしまいました。

「赤鬼、そのへんに抜け穴でもありはしないか。も一度よくしらべてみるといいぞ」

土方歳三が赤鬼にいいました。やはり、どこかに抜け道があるにちがいないので、五人は手分けして、ほら穴の四方を手さぐりになでまわします。と、穴のふさぎ場所から、三、四メートルもあともどりしたところで、地べたにしゃがんでいた三太が、声をはずませて、

「親分ッ、ここに抜け道があるようだッ」

「どれ、どこだ？」

みなが集まってちょうちんの光で見ると、なるほど、立って歩いては気がつかないが、ちょう

ど膝くらいの高さの所に、大きくでばっている岩の下が、深くへこんでいて、奥へ手がとどかないばかりか、氷のような冷たい風が、スウッとふいてくるのが知れます。

「かくし穴かもしれない。三太、もぐってみろ」

「がってんです」

三太は、ちょうちん片手に大岩の下へはいこんだが、やがて、ズッと奥の方で、

「親分、やっぱり抜け穴ですぜ。あッ、しめたッ、ここに、やつらの足あとが残っているッ」

「なに、足あとが？　よしッ……」

赤鬼は、いそいで三太のあとを追う。近藤勇は、ほら穴の入り口に待ってる芹沢鴨たちのほうへ、

「芹沢くん、曲者どもは横穴から逃げうせたようだ。拙者はとりしらべてくるから……」

すると、ほら穴の口の所で、芹沢鴨の声が、

「それはご苦労だ。よろしくたのむ」

短気であばれ者だが、せまいほら穴をもぐるような陰気なことの大きらいな芹沢鴨は、気のないようすで、近藤勇になにもかもおしつけてしまった。

近藤、土方、沖田の三人も、大岩の下をむこう側へはいぬけると、そこはもう、立って歩くにさしつかえない広さのほら穴です。

「みなさま、ホラ、やつらの足音が聞こえますぜ」

赤鬼は、地べたに耳をつけていう。ちょうちんの光が照らし出すこのほら穴は、天然にできた

ものとちがって、大石小石をたたみあげてつくった、古い地下道であることが一目でわかります。

「フム、さては、こんな抜け穴があったのか」

「まだ遠くはゆくまい。追いかけよう」

ささやきあった五人は、底知れぬやみのかなたから、かすかに聞こえてくる足音について、そのままどこまでも追いかけてゆきます。

この追っ手より、二百メートルばかり先をゆく四人、かすかな火縄の光で足もとを照らしながら、まっ先にいそぐのは快傑黒頭巾です。

黒頭巾は、昼間に世継稲荷で三太たちの話をぬすみ聞くと、いそいで三葉たちのゆくえをさがしましたが、めぐりあえないうちに夜になりました。そこで、いそいで穴八幡へかけつけたとき、三葉たちがお穴へはいってゆく姿を見つけたので、いきなりあとを追ってとびこんでみると、三人は、ふさがれた穴の奥で立ち往生していたのでした。

そこで、黒頭巾はことばせわしく、三人の身に危険がせまっていることを知らせ、ひきずるようにして、大岩の下のかくし穴へ、三人をつれこんだとたんに、十本の矢の羽音が、するどくしろでひびきわたったのを聞いたのでした。

だから、ゆっくり話しあうひまもない。おたがいに、胸いっぱい、問いたいこと、話したいことをこらえて、無言のままでいそぎます。そのうち、かくし穴を見つけた五人の者が、あとを追ってくる足音が聞こえだしました。

（さてはかぎつけたか。追ってくる人数は、五人かな、六人かな？　こりゃどっちにしても厄介

せんばんな送り狼だ。追っつかれないようにいそがねばならぬ）

黒頭巾は心の中で思案しました。このやっかいな送り狼が、赤鬼たちのほかに、近藤、土方、沖田という、関東に鳴りひびいた腕ききぞろいなのだから、追いつかれたらたいへんなことになる。

吹上の大庭

はてもなくつづくと見えた地下道を、およそ六キロばかりもいそいだころから、ようやく、追っ手の足音が遠ざかり、おしまいには話し声も聞こえなくなりました。よほど間がへだたったのか？　あきらめてひき返したのか？

そのころから、地下道がすこしずつ爪先あがりの坂道になってきました。黒頭巾ははじめて、足をゆるめて、小声でささやきました。

「もうすぐ、抜け穴もおしまいだ。この抜け穴の出口は、吹上の庭の神代樟の幹の空洞だが、『百虫館』とは目と鼻の間だ。しかし、今夜は城中は警戒がきびしいようすだから、そのつもりで、じゅうぶん気をつけて、見とがめられぬように」

「エッ、では、『百虫館』のすぐそばへ？」

「しッ、静かに……」

黒頭巾は、しきりになにかと聞きたがる姉弟を制します。姉弟は「百虫館」のそばへ出られると聞いて、思わず胸をおどらせるのでした。

坂道がいよいよ急になり、足もとがすべりがちになったころ、ふと、えもいわれぬ樟のいいにおいがしはじめました。黒頭巾は立ちどまって、さげていた火縄の火をふみ消しながら、小声でいいました。

「ここに太い鉄棒が立てかけてある。これをつたってよじのぼるのだから、すべり落ちぬように、わたしのあとから一人ずつのぼってきたまえ」

そして、黒頭巾は早くも、身軽にその鉄棒をつたって、ま上をさしてのぼってゆくようすだ。

「姉さん、さきにおいでよ」

「ええ」

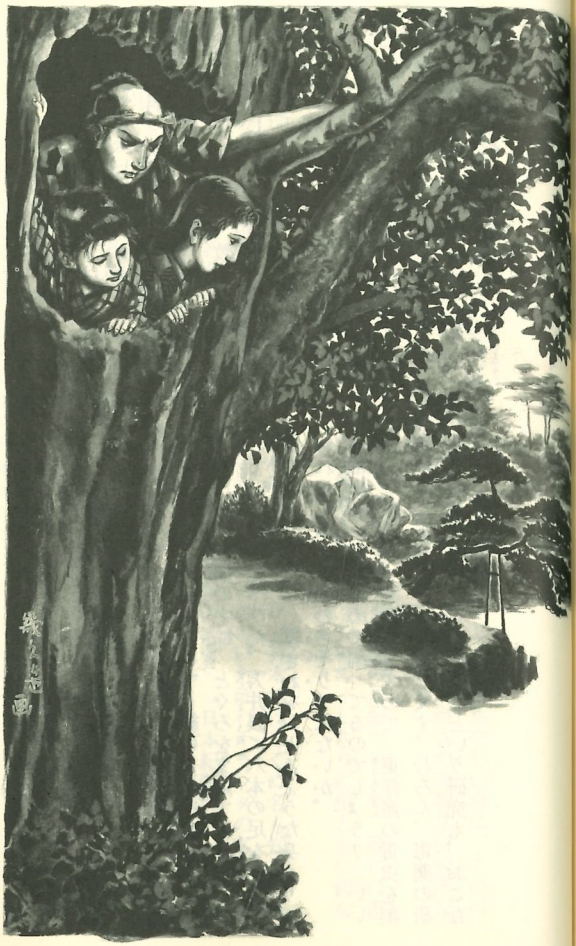
三葉がさぐりよって見ると、手にさわるのはすっかりさびついた太い鉄棒。たいへんなはしごだが、おさないときから軽業できたえた三葉です。苦もなくその鉄棒をよじのぼる。珠三郎がそれにつづき、小ぶとりに太った源一兄いが、最後に大骨折って、およそ五メートルばかりの鉄棒をのぼりきると、目の前は昼のような明るさです。

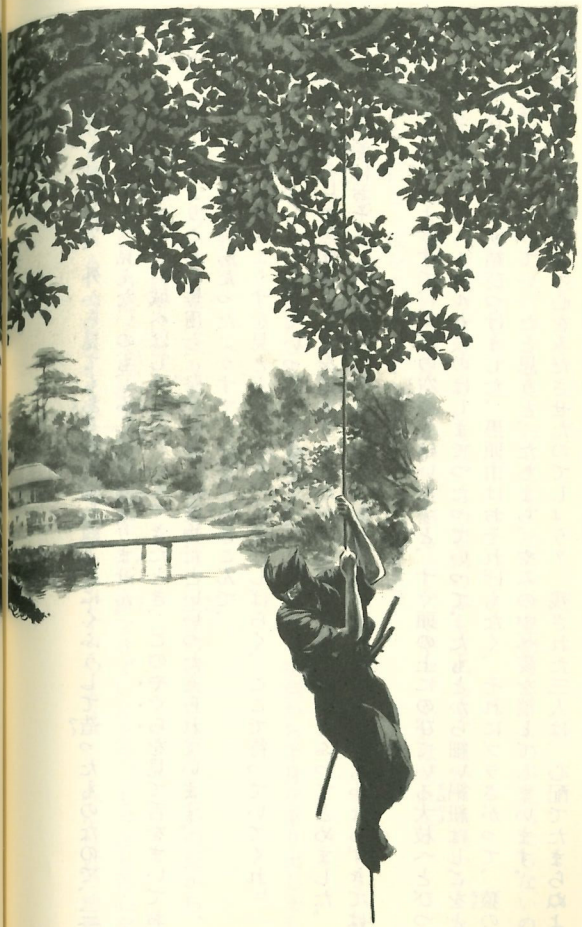
鉄棒の上のはしは、樟の大木の幹の中途にある空洞に通じていました。三葉と珠三郎と源一兄いの三人は、その空洞のふちにソッと首をならべて、外の景色を見まわします。

ここは吹上の庭のまん中あたり、小高い岩山のいただきにそびえ立つ、関東一の老木神代樟の幹の中途です。今、目の下に見わたす景色は、月の光にあざやかに照らし出されていましたが、どうしてこれが、江戸城の中のお庭だと思われましょう！　丘あり谷あり森林あり、濠あり池あ

り、地底からふき上げる清水が、まがりくねった谷川となって流れる水音さえ聞える。
ひっそりと静まりかえって、火影も見えず、夜たかふくろうがさびしげに鳴くほかは、死んだような静けさで、まるで深山へまよい入ったような気さえします。
「百虫館はどこにあるのでしょう？」
すぐそばに出るというのに、いくら見まわしても、なに一つ建物らしいものが見あたらないので、三葉があやしんでたずねました。
「おお、百虫館は、この大枝のすぐ下の、それ、この岩山のふもとにある。だが、名高いかくれ造りのやぐらだから、気をつけて見ないとわからぬかも……、ややッ、あれはだれだ」
黒頭巾がふいにことばをきって、下をすかすように見ると、
「おッ、青江下野だ。こんな夜ふけに、ただ一人で青江下野が百虫館をおとずれる。……ハテナ、どうやら不吉な胸さわぎがするわい」
黒頭巾は、おしまいのことばはひとりごとのようにつぶやいて、空洞から半身を乗り出しました。
「えッ、どこに青江下野が？」
他の三人は、おどろいて目をみはります。三人の目には百虫館の建物さえ見えないのだから、青江下野の姿も見いだせるはずはない。
そも、この百虫館というのは、大兵法家太田道灌が、江戸城をきずいたとき、もっとも苦心をこらして建てたといわれる、有名なかくし造りのやぐらなのです。つまり、たくみに付近の地勢

や木立のかげを利用して、外から見てもありかの知れぬようにくふうして造ったものなので、三葉たちの目にはハッキリ見えないのも、ふしぎではありません。
さすがの徳川家康も、江戸城へはじめてのりこんできたとき、このやぐらを見て舌をまいておどろき、後々までとりこわし無用と、保存を命じた建物だといいつたえられています。
黒頭巾は、なにか思いあたったようすで、ひどく急きこんで、
「とにかく、青江下野のようすを見とどけてくる。みなはしばらく、ここで待っていてくれ」
「ア、おいらもいっしょにつれていってください」
珠三郎は、いそいで黒頭巾のあとを追おうとしたが、なぜか黒頭巾は手をふってとめました。
「いや、百虫館はおそろしい場所だ。あとで、わたしが迎えにくるまで、だれもかならずきてはならぬ」
という間も心の急くようすで、大樟の空洞をはいだすと、すぐ頭の上にのびている大枝へとびつき、木ねずみのようにスルスルと枝のはしまでつたっていって、たもとから細い絹紐ばしごをとり出すと、枝にシッカリ結びつけました。黒頭巾はおそれげもなく、それにブラさがって、猿のように身軽にすべりおりていったと思うと、たちまち、やみの中へ姿を消してしまいます。
なにがそんなに、黒頭巾の心をみださせたのでしょう？　残された三人は、心配でたまらぬようすで、たがいに顔を見あわせました。





お虫番と毒虫

名さえきみょうな百虫館のかくしやぐら。外の見かけのあやしげなのより、内の造り方のほうが、さらにさらに奇怪せんばんでした。

やぐらは二階建だが、下は大きな広間になっていて、窓もない四方の壁も、天井も、全部が細かい金網でおおわれています。

その金網の上や下を、ゾロゾロガサゴソとはいまわっている、大小数知れぬあやしげなものを一目見たものは、だれだってゾッとするにちがいない。すみのところで、縄のようにからみあってうごめいているのは、数十びきのまむしだ。そっちの金網の中に、とぐろをまいているのは琉球のはぶだし、こっちのすみの水槽の中に泳いでいるのは海へびだ。天井裏に八本の足をひろげて、ペッタリくっついているのは、みにくい姿の大毒ぐもだし、壁ぎわをおどるような身ぶりではってるのは、一かみで大象をもたおすといわれる、南シナ産のさそりではないか。

いったい、なんのために、こんなおそろしい毒虫ばかりを集めて飼ってるのでしょう？　いいつたえによると、南蛮国からわたってきた紅毛人の医者が、家康にすすめて、東洋産の毒虫を集め、毒物学の研究をしたのが、そもそも百虫館のはじまりだということです。むろん、毒薬の研究ばかりでなく、その毒から、とうとい人の命を救う良薬をつくりだそうという研究も、おこなわれたのにちがいありません。

しかし、家康が二条城で、加藤清正にあたえた有名な毒まんじゅうのあやしい毒は、この百虫館の紅毛医者がつくりだしたものだというわさもある。つまり、日本最古の毒物学研究所なのです。

今、この奇怪な金網張りの部屋のまんなかには、からだじゅうを皮の洋服で包んで、頭には潜水かぶとのような形の金網かぶとをかぶった一人の老人がすわっていて、しきりに虫どもに餌をあたえていました。

この老人は、「お虫番」という役名だが、本名は庵洗斎と呼び、日本ではろくに名も知られていないが、かえって外国で有名な学者です。なぜ外国で名高いかといえば、オランダの名医シーボルトという人が、この老人にあって、その学問の深いのにおどろき、「日本紀聞」という有名な著書の中で、「一生を毒物研究にささげ、毒虫どもといっしょにくらす日本の大学者」といって、くわしく紹介した記事を書いたからです。

さて、このお虫番の庵老人は、ふと、虫どものただならぬざわめきを見つけると、キッとなって、戸口の方をふりかえりました。

「だれだッ？　戸口に近よる者は？」

するどくとがめる老人の声に答えて、戸の外から、

「青江下野。急用だ、戸をあけてもらいたい」

それを聞くと、老人は顔色をやわらげて、

「あ、さようでしたか。ただいま、虫どもを金網の中へおいこみます間、しばらくお待ちを…

…」

「ム、早くたのむ」

庵老人は、ヒュッヒュッと口笛を鳴らし、長い棒でトントンと金網をたたくと、虫どもはなれたもので、いそいでゾロゾロと、金網の出入口を、それぞれじぶんの巣へとはいこんでゆく。老人は手早く、出入口の小さなとびらを、片っぱしからしめてまわる。なるほど、虫どもが残らず金網の中へ追いこまれれば、もうだれがはいってきても危険はないが、さっきのように部屋いちめんに、毒虫どもがはいまわっているときに、うっかりはいってきたら、たちまち毒虫どものために殺されてしまう。これこそ、百万の番卒をつけておくより、もっとたしかであるにちがいない。

老人はほとんどの金網とびらをしめてしまったが、最後にさそりの巣の中をのぞきこんで、

「おや、一ぴき見えないな。どうしたろう？」

心配そうに、部屋じゅうを見まわします。

「お虫番、早くあけてくれないか」

やぐらの戸口の外では、青江下野、待ちくたびれたか、そういってせきたてます。

汚点かさそりか？

「ハ、今すぐあけます。……ハテナ、どこへまぎれこんだかな？　またまむしのねぐらへでももぐりこんでくれると、大騒動だがなあ」

部屋じゅう見まわしても、おそろしいさそりの姿は見あたらないので、どこか、ほかの虫のしきりへまぎれこんだものと思った老人が、ウロウロとさがしまわっていると、

「火急の用事でまいったのだ。早くしてくれ」

「ハ、今、ただ今、あけます」

人のいい庵老人は、すっかりあわてて、いそいで戸口の所へくると、内からかんぬきをはずしました。待ちかねてとびこんだ青江下野は、金網かぶとをぬいで一礼するお虫番の老人に、

「二階の囚人、なにも異変はあるまいな？」

「ハ、先刻見まわりましたが、別状は……」

「よろしい。では、はしごをたのむ」

「ハッ、ただいま」

老人は、正面の金網壁に近づいて、なにかしかけをいじると、たちまち、壁の一部がクルッと回転して、そのうしろ側に急なはしご段があらわれた。

「さあ、どうぞ」

老人は、行燈の火皿から、手燭へ火を移して青江下野にさしだしました。青江下野は手燭を受けとると、はしご段をかけのぼる。その袴のすそのあたりが、老人の目の前でパッとひるがえったとたんに、老人の目にうつったのは、汚点かと見える黒いもの。だが、一目それを見たお虫番庵洗斎老人、ハッと顔色をかえました。

「ヤッ、あれはさそりではなかったかしら。……もしかさそりだと、……ああ、青江様ッ、もしッ……」

さっき一びきだけ姿を見せなかったさそりが、今まで老人の衣服にでもとまっていて、それがいつのまにか青江下野の袴のすそにとび移りでもしたのではあるまいか？

なにしろ、チラと見たきりだが、不安心でならないから、老人はいそいではしご段の下から呼びとめました。そして、じぶんもあとからかけのぼろうとしたとき、かんぬきをかけ忘れていた表戸がガラリとあいて、疾風のようにとびこんできたものがあります。金網の床の上を一息にかけぬけて、はしご段の下の老人にとびかかると、いきなり力まかせにひきのけようとする。

「あッ、だれだッ？　なにをするッ……」

老人はふり返って、むちゅうでつきとばそうとする。思わずもつれあった二人が、はしご段の下から、床の方へころがりだしたとたんに、どうしかけにさわったものか、金網の壁はふたたび音もなくクルリと回転して、はしご段をうしろにかくしたまま、もとどおりしまってしまいました。

「やッ、曲者、ウウウムッ」

老人は、じぶんをひきとめた相手が、黒覆面の曲者だと知って、大声をあげて人を呼ぼうとしたとたんに、早くもとんだこぶしの一撃、ひ腹をあてられて、ウムとばかりに目をまわした。

とびこんできたのは、快傑黒頭巾だったのです。黒頭巾は、たおれたお虫番には目もくれず、正面の金網壁に近づいて、はしご段を見つけ出そうとあせりましたが、いそいでいるので、なかなかしかけが見つかりません。

見なれない者が近づいたのをおこったか、金網の中の毒虫どもは、おそろしいいきおいで、金網ごしに、黒頭巾の指先を、かみつこうととびかかる。さすがの黒頭巾も、思わず、ゾッとして手をひっこめました。三葉や珠三郎たちに、百虫館へくるなといったのは、このおそろしい虫どもがいたからです。

「シッ、シーッ」

舌うちして追ってみたが、逃げ散るどころか、かえって集まってくる毒虫ども。黒頭巾は、こうしている間も気があせります。青江下野が、二階の囚人のいる所へかけあがってから、もうかなり時間がたったではありませんか。

追いついた追っ手

大樟の空洞の口で、黒頭巾におきざりにされた三人は、さらに気が気でありません。

「姉さん、百虫館にお父上がとらわれていられるのだと、今夜、青江下野がそこへ行ったのは、もしか、お父上のお命を……」

「エエ、わたしもそれを心配してるところなの」

「ジッとしてはいられないや。見てくるぜ」

「わたしもゆくわ」

「よし、じゃあ、姉さん、おいらがさきへ……」
珠三郎は、黒頭巾がさっきやったとおなじように、頭上の大枝へとびつきました。三葉がつづいて大枝へはいあがったときには、珠三郎はもう、黒頭巾が残していった紐ばしごの所までつたっていっていた。源一兄いも、姉弟のうしろからつづいて、空洞のふちに立ちあがると、
「どれ、おいらも……。アッ……」
ギョッとしてさけぶ。思いもよらぬうしろから、源一兄いの腰のあたりに、ムズと組みついた者があったからです。
「曲者、しんみょうにしろッ」
「ヤッ、しまったッ、放せッ」
すっかり忘れていた、抜け穴の中の五人の追っ手ども。やっとこのとき、大樟の下の鉄棒をよじのぼって、空洞の所へはいあがったのが、赤鬼の弥太五郎だったのです。
「どうした？　赤鬼」
鉄棒の下からは、近藤勇らしい声が聞こえる。
（しまった。だが、この連中を、空洞から外へ出してはおしまいだ。よし、ここはおいらが一番、命がけでくいとめなくちゃ）
源一兄いは決心しました。鉄棒は一本だし、空洞の口はせまい。ここで源一兄いが、うまくふせぎさえすれば、近藤勇たちがいかに勇猛でも、上と下とではあるし、容易にこの関所は通りぬけられますまい。

だがしかし、ゆだんしてたところを、うしろから赤鬼に組みつかれたから、源一兄いもなかなかの苦戦だ。赤鬼のほうでも、早く組みふせて縄をかけようとあせるのだが、相手は素人角力の大関で、ものすごい力持ちだし、足場のわるい空洞のふちなので、ともすれば、ふりはなされそうになったり、足をふみすべらそうとする。
「三太ッ、早くのぼってこいッ」
「だって、親分、親分のからだがじゃまになって……」
三太は鉄棒の中途にしがみついたまま、あせってさけびます。源一兄いは、気をいらって、両手で、赤鬼の左右の手首を力いっぱいにぎりしめました。その力のすごいこと。赤鬼は手首がしびれて思わず組みついた手をはなす。
「あッ、いたたッ」
「しめたッ、おのれッ」
からだをうしろへねじむけた源一兄いは、赤鬼の肩のあたりを、力いっぱいつきはなしました。
「わッ」
「ぎゃーッ」
空洞の中では、同時に二人のさけび声。つき落とされた赤鬼のからだが、鉄棒の中ほどにしがみついた三太の上にふってきたので、二人は一かたまりになって、五メートルあまりの高さからドシンと地下道の底へ落ちて、どうやら目でもまわしたらしい。

「おのれッ」
近藤勇は、上からおちてきた二人のからだをかわしておいて、鉄棒にとりすがると、案外に身軽なようすで、鉄棒を上へよじのぼる。
空洞の上から見おろした源一兄いは、月明かりに、すさまじい殺気をおびた近藤勇の顔と、思わず目を見あわせました。
「やい、さんぴん、あがってきて見やあがれ」
「なにを、無礼ものッ」
勇は、左手で鉄棒をだくようにして、右手でスラリと愛刀虎徹をぬきはなすと、いきなり上を目がけてつきあげました。
「あッ、あぶねえまねをしやあがるなッ」
源一兄いは、おどろいて顔をひっこめました。そのすきに、空洞のふちまではいのぼった近藤勇。あとから土方歳三もつづいてのぼってくる。
「や、こいつはいけない」
源一兄いは、なに思ったか、身をひるがえして、五メートルばかり目の下の、大樟の根方をさしてとびおりると、百虫館とは反対の方角さして、わざと敵をさそうつもりでかけ出しました。
「待てッ、おのれッ」
近藤勇は、つづいてとびおりる。土方、沖田の二人も、あとからあとからとびおりて、かなたの森の中へ逃げこんだ源一兄いを追いかけようとする目の前へ、バラバラととび出してきて立ち

ふさがった一隊の人数がある。
「曲者ッ、なにやつだッ？」
手に手に、槍や白刃をひらめかしたこの連中こそ、青江下野が要所要所に手くばりした人数にちがいない。近藤勇はそれを見ると、
「拙者は、新徴組の近藤勇ですぞ。ただいま、牛込穴八幡から、地下の抜け穴づたいに、四人の曲者を追ってここまでまいったところだ」
「なに？　なんといわれる？」
一同は目をまるくしました。と、そこへ、バタバタとかけてきたのは、今夜、青江下野にしたがって吹上の庭へつめていた、新徴組隊長の清川八郎でした。
「おお、近藤くんか。曲者は城中に忍びこんだといわれるか？」
「おお、隊長、今、あの森かげへ」
「よし、諸君、すぐ追いかけたまえ」

大きな心

百虫館の二階へかけあがった青江下野は、二階のまん中にがんじょうな牢格子でまっ四角にしきってある牢舎へ近づくと、手早く鍵で出入口の錠をはずして、手燭を持ったまま、ズッと格子の中へはいってゆきました。

まっ暗な板の間の上に、キチンと端座していた牢の中の囚人が、手燭の光を見て、このとき静かに顔をあげました。目の光がするどく人を射る、見るからりっぱなようすをした人物でした。

「山鹿士行。今日、幕議で其方の処分がきまった。ただいま申し聞けるから、つつしんでうけたまわれ」

「……」

ああ、この囚人こそ、三葉、珠三郎の姉弟が、命にかけてもさがしもとめている、なつかしい父の山鹿士行だったのです。かつては、二千人にあまる門弟どもにかこまれて、その兵法の大講義は、幕府の肝玉をふるえあがらせた勤王の大学者。十三年という長い年月、むごたらしいとらわれの身となりながら、今もなお、身にも心にも、すこしのおとろえもゆるみも見えぬのは、よほどシッカリした精神が宿っているからでしょう。

「其方、長々牢舎のところ、きょうかぎり、幕命によって、ときはなしてつかわす」

青江下野は、手燭を板敷きの上において、ひややかにいいわたしました。むろん、「ときはなす」というのは、牢から許して自由な身にするというのではない。幕府にとっておそるべき目の上のこぶとも思われるこの勤王の大兵学者の命を、きょうかぎり絶つという意味なのです。

このおそろしいいいわたしをした青江下野は、ふところから金襴地のたとう紙包みをとり出しました。

「お上お情けのこもる神薬をたまわる。これをのんで、長の苦しみからのがれるがよい」

しかし、山鹿士行は顔色さえ変えないで、かすかにほほえんだ。

「さようなものは、ちょうだいするにおよばぬ」

ああ、静かな声音だが、キッパリとしりぞけたのです。もとより、命をおしんでの未練ではない。けれども、どんなあいでも、みずから毒などのんで命を絶つことは、大丈夫たる身は、あえてしないのでした。

「なんという？　では、ぜひにおよばぬ」

青江下野は、この毒薬の包みを、足下に投げすてると、そのまま半身に開いた右手が、腰の刀の柄にかかる。

この一代の大学者に対しては、さすがに、いやしい首切り役人などの手にかけないで、浪人目付青江下野が、じきじきに討ち果たすのが、せめてもの礼儀と考えたのか、それとも、夜の明けるまでも待てぬほど、仕おきをいそがねばならぬわけがあるのか？　息もつまるおそろしいせつなだ。

今、頭上に白刃が舞い落ちようとするにもかかわらず、山鹿士行は、顔色も変えません。けいけいと光る目で、だまって相手を見すえていたが、ふと、その目のうちに、ただならぬおどろきの色がひらめきました。

「待たれよ、青江下野。お身ののどを、さ、そりが……」

「なにを……」

青江下野の顔に、あざけりの色が浮かびます。山鹿士行ほどの人物でも、最期のせとぎわがせまれば、こんなあさましい一寸のがれのでたらめをいってまで、命が助かりたいのか？　未練至

極なッ！

だが、それは青江下野の思いちがいでした。現在、じぶんの手にかけて命をうばおうというその相手が、まさか、じぶんの身にせまるおそろしい危険を見つけて、わざわざ教えてくれようなどとは、夢にも考えられなかったのです。そんな大きな、聖人のような心の持ち主が、この世の中にあるとは思えなかったのです。

さっき、お虫番の老人をあわてさせた、ゆくえ知れぬさそりが、袴のすそからはいのぼって、ちょうどこのとき、青江下野ののどのあたりに、そのおそるべき毒針を、今にもさし通そうと、身がまえているではないか。

「あぶない！　貴公ののどもとに、さそりが……」

「だまれッ、見苦しいぞ。覚悟せ……、ウウムッ」

抜き討ちの一刀がさや走ろうとするせつな、思わず苦痛のさけびを発して、柄にかけた手をはなすと、わがのど笛のあたりをかきむしるようにつかんだ青江下野。手にさわったさそりをつかんで、たちまち床にたたきつけたが、そのときすでに、おそろしいさそりの猛毒は、かれのからだじゅうの脈管に流れこんでしまいました。しかし、さすがは青江下野、見苦しいわめき声はたてないで、ひっしに苦痛とたたかいながら、くずれるように床にたおれてしまいました。

そのとき、はしご段を、あわただしくかけあがる足音が聞こえて、

「父上ッ、お父上ッ」

あがり口に、飛鳥のごとく姿をあらわしたのは快傑黒頭巾でした。いそいで牢格子の中へとびこんだが、ぶじな山鹿士行の姿を見つけると、声をつつぬかせて、

「おお、まにあったかッ。お父上ッ、弦一郎です。お救いにまいりましたッ」

泰然とすわっていた山鹿士行。弦一郎と名のる黒頭巾のことばを聞くと、サッと顔をかがやかせたが、

「おお、弦一郎、動くまいッ、そこにさそりが……」

指さして教えるのを、黒頭巾の山鹿弦一郎、

「エッ、なんとおおせられる？」

思わず足下に目を落とすと、たおれている青江下野の頭のあたり、みにくい姿のさそりが一ぴき、今にもわが足首をさそうと身がまえているのを見いだしました。

「フム、青江下野はこのさそりにやられたのか？」

黒頭巾の弦一郎は、す早く足をあげて、この毒虫をふみ殺しながら、なにもかも、この場のようすをさとってしまいました。

わが父上を、かくまで苦しめたにくい敵ながら、あっぱれ好敵手でもあった青江下野、あまりに意外な最期ではなかったか。床の上にたおれて、手足をはげしくふるわせながら、苦しみもがく青江下野のさまを見守って、思わずその末路をあわれむ黒頭巾は、

「弦一郎、これ、弦一郎」

なつかしい父上の声に、ハッとわれに返りました。

父子再会

「お父上、おなつかしゅうございましたッ」
「弦一郎、成人したそちの顔を、見せてくれ」
父の声も、情にせまってふるえる。快傑黒頭巾は、一息に黒い覆面をかなぐりすてました。と、あらわれたのは、どこやら天命堂のおもかげに似てはいるが、ずっと年も若く、りりしくひきしまったけだかい顔立ちです。むろん、あのこっけいな天神ひげは、あともなくそり落とされている。
「お父上、くわしい話はあとで申しあげます。一時も早く、この場をば……」
十三年ぶりにめぐりあった喜びに、ゆっくり語るひまもない敵の中です。弦一郎は父の手をとって、立ちあがろうとしたときに、階下の部屋へ、だれかかけこんできた足音がして、
「お父上ッ、どこにいらっしゃるのッ？」
「お父上さまッ、山鹿士行さまッ」
おさない女の子と男の子の声を、ふしぎそうに聞いて目をみはった山鹿士行、
「ヤッ、あの声は？」
「父上、あれは三葉と珠三郎です。ただいま、これへ呼びあげてつかわしましょう。……これ、三葉ッ、珠三郎ッ、父上はここだ。ここだ」

弦一郎が、下をむいて呼びかけたとき、階下では、またしても、なにものかがとびこんできたようす。
「ヤッ、三葉と珠三郎、いたかッ」
「あッ、清川だッ……」
「あれッ、放してッ」
おびえたような姉弟の声。黒頭巾はキッとなって、はしご段の下へかけおります。見れば、ひっしにもがく姉弟のえり首を、左右の手にわしづかみにした清川八郎。弦一郎と顔を見あわせると、たちまち、血相かえて、姉弟をはなして大刀の柄に手をかける。
「おおッ、山鹿弦一郎ッ……」
「清川、こいッ」
サッとひらめく白刃。一瞬、もつれあった二人のからだ。だが、つぎのせつなには、白刃が宙にはねあがって、一方の姿が床の上にたたきたおされました。
「三葉、珠三郎、お父上は二階だ。早くおそばへゆくがよい」
弦一郎は、清川八郎の背に片足ふみかけながら、そういいました。姉弟は、とぶようにはしご段をかけあがる。と、はしごの上がり口につっ立つ山鹿士行の姿を見つけて、同時に右と左とから、ひしととりすがりました。
「お父上ッ」
「父上さまッ」

ふりあおぐ姉弟。見おろす父。ああ、姉弟は生まれてはじめてあうような気がするお父上。父の方でも、姉が三つ、弟が二つの幼顔しか見おぼえていないのです。見かわす六つの目には、喜びか、悲しみか、熱い涙がしきりにせきあげてくるのです。

姉弟のうしろからあがってきた弦一郎も、この場の美しい光景を、ウットリとながめていましたが、情にせまった声音で、

「妹よ、弟よ。きょうまで、黒頭巾でつつんできたわたしの素性だったが、わたしはお前たちの兄弦一郎だよ。長い間、苦労させたねえ」

その声を聞くと、涙の中から、姉弟がニッコリと顔をあげました。

「では、やっぱりへんだと思っていたことが……、ねえ、珠ちゃん……」

「ウン、黒頭巾のおじさんが、おいらの兄上だったんだ。こんなうれしいことはないねえ、姉さん……」

天にものぼる姉弟の喜びが、まもなく、階下のさわがしいののしり声にかきみだされました。

「珠太夫、三葉さんッ、黒頭巾も早く逃げ出せッ。このやぐらの四方が、すっかりとりかこまれたッ。……アッ、もうやってきたなッ、なにをッ。……さあ、早く窓から外へ逃げてくれッ。……ここはおいら、死にものぐるいでふせいでるからッ」

ああ、俠気の源一兄い、百虫館の戸口にがんばって、死にものぐるいに、捕り手の人数相手にたたかうようすだ。

弦一郎はそれを聞くと、懐中からとり出したこよりひも、すなわち「七つの抜け穴の図解」

を、父の前へさし出しながら、

「お父上、この図解にある通り、この百虫館の乾の大柱の心がくり抜かれて、抜け穴へ通じるようになっています。この二人をつれて、一足さきへおのがれください。わたしは、あの若者をたすけて、すぐおあとから追いつきますから」

「そうか。では、さきへ行って待っていようぞ。三葉、珠三郎。わしといっしょにくるがよい」

父は、姉弟の手をひいて、牢格子の外を乾の隅の方へまわり、そこの隅の大柱の根方に手をふれると、アッ、たちまち柱が二つに割れて、わずかに人の通れるまっ黒い穴があらわれました。

「弦一郎、待っているぞ。けがせぬようにな」

「ハッ」

三人の姿が、大柱の心にすいこまれるように聞こえたのを見とどけて、弦一郎は、階下をさしてかけおりました。

「ヤヤッ、曲者ッ」

その姿を見つけて、さわぎたてる捕り手どもにむかって、弦一郎はゆかいげに高笑い、

「ハッハッハッ、黒頭巾が最後の手なみ、肝をつぶして目をまわさぬ用心しろッ」

いいもおわらず、サッと右手が動く。と、その手をはなれた投げ弾が、金網壁にあたってみじんにくだけた。せつな。

ごうッ、すさまじい音とともに、目もくらむ白焔がひらめいて、捕り方どもはハッと一時におもてをふせてしまいました。

もうもうたる煙がうすらいで、われに返った人数が、キョロキョロとあたりを見まわしたころには、弦一郎の姿も源一兄いも、もうそのあたりには見えませんでした。

人々はさきを争って二階へかけあがってみたが、牢格子の戸はあけ放され、牢の中はもぬけのからで、意外にも、青江下野がひややかな屍になって横たわっていました。山鹿父子四人と源一兄いとが、どこからのがれ去ったのかは、抜け穴の秘密を知らぬかれらには、まったく、なぞのようなふしぎだったのです。

それからのち二年、朝廷と幕府との間についに戦いの火ぶたが切られました。鳥羽伏見の戦いに勝ちほこった官軍は、やがて江戸をさして攻めよせてきました。

このとき、江戸城明けわたしの談判が、西郷隆盛、勝海舟という二人の大英雄の間に、笑い話のうちにスラスラととりきめられ、江戸は兵火にほろぼされないですんだことは、諸君も知っていられるとおりだ。が、あれほどむぞうさに、幕府方が江戸城を明けわたしたのは、官軍の参謀の中に、山鹿士行、山鹿弦一郎二人の名が見え、したがって、江戸城の死命をにぎる「七つの抜け穴の図解」が、官軍の手におさまっていたため、幕府方は城を守りふせぐてだてもつきたからだという、歴史にあらわれない秘密を、知る人はまれでした。

（『少年倶楽部』昭和十年一月号～十二月号に連載）

『快傑黒頭巾』後記

高垣眸

◇

二十年近くも前のことだが、毎年二回、某デパートの屋上で、読売巨人軍の野球教室と、わたしの主宰する児童文化普及会の人形劇公演を、定期的に共催したことがある。

そのとき、司会者がわたしのことを、「少年読物のチャンバラの元祖で……」といって紹介した。わたしはすぐそのあとで、

「ただいまのご紹介は、まちがっている。わたしは少年少女のために多くの時代物を書いたが、いま流行の大衆物や、それに倣った少年読物の作品など、人と人が出あえばわけも理由もなく刀を抜いて、チャンチャンバラバラ斬りあうようなものは、書いたおぼえがない。構成と筋の運びのおもしろさで、息もつかせぬ興味を読者にあたえるのがねらいだ。もっともよい実例をあげるなら、『快傑黒頭巾』だ。かれはただの一度だって、自分の刀を抜いたこともなければ、他人を傷つけたり殺したりしたこともない。それでいて、やたら斬ったりはったりする他の読物より、はるかに強く読者を惹きつけたものだ。わたしは書店などで売場に立って見ていると、はいってきた少年たち（ときには少女も）が、いちばんさきにとりあげるのが『少年倶楽部』であり、第一番に開くページが『快傑黒頭巾』であることを、しばしば見た。これは、興味本位なチャンバラでなく、じっくりした愛情と鋭角的な筋運びに、おさない読者が惹かれるせいだ」

と、いい気になって聴衆にむかって揚言したことがある。若気のいたりで汗顔至極だ。しかし、この作品には、それだけの自負を持っていた。

◇

『快傑黒頭巾』の生みの親は、かみそりのように鋭かった故須藤憲三君（当時の『少年倶楽部』の編集長）だ。しばらくぶりに『少年倶楽部』に長編を書くとき、かれは、「同一人物がまったく異った性格で活動するような物語はどうだろう」と、提案してくれた。

「それは、おもしろい」そこで、快傑黒頭巾と、臆病であわて者の易者天命堂が生まれたわけだ。

数多くのファンレターの中に、四、五回ごろから、「黒頭巾と天命堂は同じ人間だと、見やぶった」という、得意満面の投書がかなり多く出はじめたり、「少倶を買ってきて、夜読もうとしたら、見つからない。方々さがしていたら、お父さんの枕の下にかくしてあ

った」などと、父子争奪戦まで報告してくれた、可憐な読者もいた。

発表以来四十年、先年某週刊誌に「かくれたベストセラー」だとすっぱ抜かれたこともあり、十数本の映画化やテレビ化などもあって、少年読物としての記録ものではあるまいか。今でもごくまれに、テレビで大友柳太朗扮する二挺拳銃の黒頭巾（作者は目をまるくして拝見しているが）の英姿にさえお目にかかることがある。呵々。

（昭和五十年七月）

少年倶楽部文庫 7
快傑黒頭巾

昭和50年10月16日　第1刷発行
昭和50年10月28日　第3刷発行

著者　高垣眸
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2－12－21
郵便番号 112　振替 東京8－3930
電話 東京(03)945－1111(大代表)
編集　株式会社第一出版センター
印刷　図書印刷株式会社
製本　株式会社大進堂

Printed in Japan　©高垣眸　1975
落丁・乱丁の際はおとりかえいたします。
定価はカバーに表示してあります。（セ）

少年倶楽部文庫　第Ⅰ期20冊

1 角兵衛獅子（鞍馬天狗）　大佛次郎
2 ああ玉杯に花うけて　佐藤紅緑
3 苦心の学友　佐々木邦
4 敵中横断三百里　山中峯太郎
5 吼える密林　南洋一郎
6 謎の暗号　森下雨村
7 快傑黒頭巾　高垣眸
8 浮かぶ飛行島　海野十三
9 怪人二十面相　江戸川乱歩
10 豹（ジャガー）の眼　高垣眸
11 少年賛歌　佐藤紅緑
12 亜細亜の曙　山中峯太郎
13 少年探偵団　江戸川乱歩
14 海の荒鷲　大佛次郎
15 村の少年団　佐々木邦
16 のらくろ漫画集1　田河水泡
17 のらくろ漫画集2　田河水泡
18 のらくろ漫画集3　田河水泡
19 冒険ダン吉1　島田啓三
20 冒険ダン吉2　島田啓三

各巻　挿絵多数入り
1〜9・16・17既刊　以下続刊